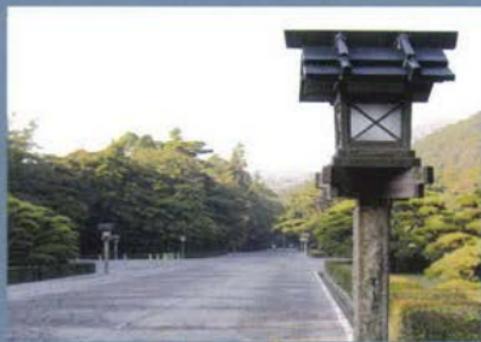


日本への回帰

第41集

平成17年 伊勢合宿レポート



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

日本への回帰
(第四十一集)

——第五十回全国学生青年合宿教室(伊勢)の記録より——

はしがき

小泉純一郎首相は、かねて今年九月の自民党総裁任期切れを以て退陣すると表明してゐるが、本年年頭の記者会見（二月四日）の中で次の旨を語った（各紙）。

「一国の首相が、一政治家として一国民として戦没者に感謝と敬意を捧げる。精神の自由、心の問題について、政治が関与することを嫌う言論人、知識人が批判することは理解できない。まして外国政府が介入して、外交問題にしようとする姿勢も理解できない」

その後の国会答弁（二月七日）では「外国政府が行け行くなといふ事柄ではない。中国、韓国以外に何か言つて来る国はない」と、国名を挙げ靖国神社参拝についての所信を語つた。その言や良し！と言ひたいところであるが、そこまで言ふならば二ヶ月余り前（十月十七日）の社頭参拝はどうしたことか。社頭に進んだ背広姿の首相は右手でズボンのポケットをさぐるやそのまま賽銭を投じたのである。それまでは服装をあらためた上で、お祓ひを受け昇殿してのものだった。総理たる者はお参りすればいいといふものではあるまい。

この社頭参拝によって、後継首相の昇殿参拝に新たなハードルができたのではなからうか。首相は、「八月十五日には必ず参拝する」と明言して平成十三年四月の自民党総裁選に当選

した。しかしながら、「八月十三日」に参拝を前倒しにしたことで自ら「八月十五日の参拝」を難しくした。それと同様に今後、礼服に身をあらためて昇殿する総理参拝に相応しい手順そのものが「仰々しい」と非難する口実を批判派に与へることになったのである。朝日新聞を初めとする対中拝跪の異様異常なマス・メディアの包囲網にさからって、毎年靖国神社に足を運んでゐることは結構なことである。しかしながら、小泉首相の参拝には、本当のことの後先を考慮してゐるのだらうかとの疑念を抱かせるものがある。

その最たるものは、「八月十三日」の参拝の折りに出された首相談話だ。「八月十五日」の参拝の途を自ら閉ざした「八月十三日」の参拝には、「…内外の人々がわだかまりなく追悼の誠をささげるにはどうすればよいか、議論する必要があると私は考えております」云々の談話が付随してゐた。当時の福田康夫官房長官は、(談話も官房長官らによつてまとめられたものだらうが)その線に沿つて「新たな戦没者追悼施設建設」に執心し、自ら設置した私的懇談会に「国立の無宗教の恒久的施設が必要」とする報告書を出させた。それ以後つねに与党内の親中派(と言ふより媚中派と言ふべきだが)やマス・メディアからなる総理参拝批判勢力に尤もらしい口実を与へ続けてゐる。これがあるため予算編成時期を迎へると決まったやうに新追悼施設建設に調査費を付けるかどうか政治問題化するのだ。「国立追悼施設を考え

る会」といふ与野党横断的な建設推進の議員連盟まで結成されてゐる。報告書を放置したまま退任するとしたら、首相としてあまりにも無責任だ。

さらに問題なのは、皇室典範の改正問題についての小泉内閣のやり方であつた。

皇位継承を安定的に維持するために、政府として平生から意を用ひることは当然の責務であり、皇室では秋篠宮殿下ご生誕の昭和四十年以来、男子に恵まれてゐないわけだから、検討して皇位の継承に万全を期さうすることはいい。

しかし、次期の通常国会に改正案を上程したいといふことで、平成十六年十二月二十七日に十人の委員から成る首相の私的諮問機関「皇室典範に関する有識者会議」を発足させてゐる。その有識者会議はわづか十七回延べ四十時間余の審議で、十一ヶ月後の昨年十一月二十四日、二千年来の伝統をいとも容易に変更する「女系容認、長子優先の皇位継承」を盛った報告書を提出した。かねての予定通りと言はんばかりに首相は一月二十日、通常国会の施政方針演説の中で「有識者会議の報告書に沿つて改正案を提出いたします」と言明してゐる。

ことは皇位継承のあり方である。歴史的経緯を十二分に踏へるべきが、逆に現憲法の文面（今日的価値観）から一步も出ようとしない官僚的作文に正式なお墨付きを与へたのである。

十人の委員の内、皆勤したのは四人だけ（『週刊文春』二月十六日号）といふのも看過できな

いが、そもそも「皇統百二十五代にわたって守られてきた正統の原則は、一時代の総理大臣の私的諮問機関にその変更論議が許されるべき様な軽小な事案ではない」と皇室典範研究会（代表・東京大学名誉教授小堀桂一郎先生）は厳しく指摘してゐる（「皇室典範改定問題に関する提言」）。全くその通りであつて、取り組む基本姿勢に大きく欠けるところがあつたと言はざるを得ない。それを裏づけるやうに、国会内外で高まる「拙速に過ぎる」との声に対しても、なほ首相は強気だつた。しかし、天佑と言ふべきか、二月七日、秋篠宮家に「おめでた」との宮内庁発表があつて、慎重を要すべしとさらに高まる声に、さしもの総理も国会提出を断念したのだつた。

ひとまづは国会上程が見送られ後継政権に委ねられた形だが、有識者会議の報告書が存在してゐることが事態を深刻化させてゐる。政府には皇室典範改正の準備室が置かれ、報告書をベースにして既に改正の案文が具体的に練られてゐる。このままでは今後、つねに有識者会議の報告書が論議の前提になつてしまふのである。その上、朝日新聞・読売新聞をはじめマス・メディアの大勢は報告書の内容を支持してゐる。論議を正道に引き戻すには余程のエネルギーを要する状況がつくられてしまつた。総理たる者の責任は重大である。

モラル・ハザード（倫理観の崩壊）が指摘されて既に久しい。近年はかつての少年非行と

は異質の知能犯罪が多発してゐる。例へば年配者の心を弄ぶ「振り込め詐欺」の頻発である。その検挙者の多くは二十歳代であると言ふが、そして、さらにそこには何千万倍の予備軍がゐるはずである。かうした病的なまでに歪んだ利己的風潮を醸成したものは何なのか。「先祖と子孫」を忘れ「目先」の功利性追求に傾き過ぎた戦後六十年間の結果と言ふはかはない。経時的思考は古今東西に共通する人間道徳の基本のはずだが、「首相の靖国神社参拝」を見ても「皇室典範の改正論議」を振り返つても、遺憾ながら大きくそこから逸れてゐる。

私共は、かうした過つた時代思潮の下にある学生青年に真摯な学問の場を提供したいものと念じて、昭和三十一年以来、夏毎に宿泊研修を営んできた。昨夏は伊勢の神宮のお膝元で、記念すべき「第五十回目」を営んだ。その折の内容を収めたのが本冊子である。行間にもこめた私共の願ふところをお汲みとりいただければ幸甚である。

最後に当たり、長谷川三千子先生には御講義要旨の掲載をお許しいただいたばかりでなく、御懇切なる御加筆を賜つたことに深甚なる御礼を申し上げたい。

平成十八年二月十一日

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき

講義

第一日目（八月二十六日）

自分の頭で考へ、自分の心で感じ、自分の言葉で語らう

……………住電エレクトロニクス(株)社長 布瀬雅義…

神国日本——神話と神宮——……………皇學館大学助教授 松浦光修…

第二日目（八月二十七日）

日本思想の源……………埼玉大学教授 長谷川三千子…

第三日目（八月二十八日）

日本の国柄——「憲法第一章の淵源」を考へる——

……………拓殖大学日本文化研究所客員教授 山内健生…

第四日目（八月二十九日）

我らが道統と学問……………福岡県立太宰府高等学校教諭 占部賢志…

講話

書と、人の声—み祖のいのちなつかしきかな— ……(株)宝辺商店相談役 宝辺正久 …… 147

会員発表

治己、知彼、応変 …… 防衛大学校教授 太田文雄 …… 159

他と共なる生き方を求めて—工業高校の生徒と明け暮れる日々に— …… 富山県立富山工業高等学校教諭 岸本弘 …… 173

短歌入門

短歌創作導入講義 …… (株)みずほコーポレート銀行 小柳志乃夫 …… 189

創作短歌全体批評—和歌と友情—

……………元電源開発(株)環境立地本部本部長代理 長内俊平 …… 209

一年の歩み …… (株)寺子屋モデル代表世話役社長 山口秀範 …… 247

合宿教室のあらまし ……

合宿詠草抄 …… 261

あとがき …… 287

講義

——合宿導入講義——

自分の頭で考へ、
自分の心で感じ、
自分の言葉で語らう

住電エレクトロニクス(株)社長

布 瀬 雅 義



- 一、この合宿教室で学んでいただきたい事
- 二、自分の頭で考へる
- 三、自分の心で感じる
- 四、自分の言葉で語る
- 五、真の学問とは

一、この合宿教室で学んでいただきたい事

皆さん、こんにちは。皆さんの中には、はじめてこの合宿教室に参加されて、一体、どんな合宿なんだらう、自分にはうまくやっていけるだらうか、と期待と不安を抱かれてゐる方も多いと思ひます。私がこの合宿教室に初めて参加したのは、もう三十年以上前になります。その時の失敗談からお話しませう。

当時、私は大学二年生でした。合宿でいろいろな先生方から興味深いご講義を伺ひ、まさに「目から鱗うろこが落ちる」といふ気持ちで、帰ってから高校時代の友人に会つて、合宿で学んだことをいろいろ話したのです。ところが、聞いてゐる友人の表情が次第に険しくなつていき、つひには「もうそんな話、聞きたくない」と言つたのです。ふだん、おとなしい、穏やかな性格の友人がこんな口調で物を言つたのは、後にも先にもこの時だけで、ずいぶん驚いたことを今でもよく覚えてゐます。合宿での先生方の話を受け売りして、とくとくと話をしてゐる私に愛想が尽きたのでせう。また私自身もこの時に何を学んだのか、今ではすっかり忘れてしまひました。人から聞いた話を受け売りしてゐるだけでは、友の共感を呼ぶことはでき

ませんし、単なる知識はいづれ忘れてしまふのです。

この合宿は皆さんにいろいろな受け売りの知識を与へる場ではありません。講義タイトルに示したやうに「自分の頭で考へ、自分の心で感じ、自分の言葉で語る」、たった一つのことで良いから、さういふ体験を皆さんにして貰ひたいのです。そのやうな「自分の言葉で語る」ものを一つ一つ積み重ねていくこと、それが本当の学問であり、またその積み重ねが皆さんの人生を豊かなものにしてくれるのです。これからこの合宿で先生方の講義を聴いたり、班で友達と語り合ったりしますが、ぜひ「自分の頭で考へ、自分の心で感じ、自分の言葉で語る」事を心がけてください。

二、自分の頭で考へる

さて「自分の頭で考へ、自分の心で感じ、自分の言葉で語る」と言はれても、すぐにできるものではありません。ここで少し、その練習をしておきましょう。

まづ最初の「自分の頭で考へる」ですが、その例題として次の朝日新聞の社説をとりあげてみます。



「日中関係 ああ、なんと不毛な」

（朝日新聞社説、平成十七年五月二十五日）

この問題（布瀬注 首相の靖国神社参拝）を「内政干渉」と切り捨ててしまうのには無理がある。侵略戦争の加害者である日本が戦死者をどう追悼するか。そのやり方をめぐって被害者が感情を傷つけられていると言うのなら、そうした思いを解く努力をする道義的な責任は加害者側にある。

この一節を自分の頭で考へてみませう。自分の頭で考へる一つの方法は、自分の身近な事例に置き換へて、自分自身の常識を働かせてみることです。たとえば自分の亡くなったお祖父さんが六十年前に隣家と大喧嘩した。そのお祖父さんを自分の家の仏壇

でお祀りするのに、隣家が「感情を傷つけられるからやめてくれ」と言ってきた。仮にお祖父さんが加害者だったとしても、本当に「そうした思いを解く努力をする道義的な責任は加害者側にある」のでせうか。

まづ、この社説では、三十年近く前に日中平和友好条約（昭和五十三年締結）が結ばれてゐる事を無視してゐます。六十年前に大喧嘩したとしても、三十年近く前に「大喧嘩の事は水に流して、これからは仲良くやっていかう」といふ約束をしたのです。

それを無視して、いつまでも六十年前の喧嘩の事で、我が家の先祖のお祀りにまで口を挟むとは、をかしいのではないか。これが世間の常識でせう。「そうした思いを解く努力をする道義的な責任は加害者側にある」などと、したり顔で言はれると、さうかなと思つてしまふ人も多いでせうが、あくまで自分の頭で、自分の常識を働かせて考へるのが、眞の学問への第一歩なのです。

三、自分の心で感じる

さて、靖国神社の問題が出た所で、この靖国神社はどのやうな所なのか、見てみませう。

それは中国の言ふやうに、戦争犯罪人を祀つて、日本国民を新たな侵略戦争に向はせるためのプロパガンダ機関なのでせうか。

靖国神社にお祀りされてゐる「戦争犯罪人」の中に「百人斬り競争」をしたとして、戦後の南京における軍事法廷で死刑に処せられた元帝国陸軍少尉（事件）当時・向井敏明、同・野田毅のお二人がゐます。

有罪の証拠とされたのは、昭和十二年十二月十三日付け東京日日新聞（毎日新聞の前身）の浅海一男記者による記事で、どちらが先に中国兵を百人斬るか競争をした、といふ内容です。「百人斬り“超記録”」のタイトルで、次のやうな一節があります。

野田「おいおれは百五だが貴様は？」向井「おれは百六だ！」両少尉は「アハハハ」結局いつまでにいづれが先に百人斬つたかこれは不問、結局「ちやドロンゲームと致さう。だが改めて百五十人はどうちや」

（向井少尉は）「俺の関の孫六が刃こぼしたのは一人を鉄兜かたたけもろとも唐竹割りにしたからちや……」と飛来する敵弾の中で百六の生血を吸つた孫六を記者に示した。

この記事については、山本七平氏が『私の中の日本軍』下巻の中で、

日本刀で三人も斬れば、どんな名刀でも刃こぼれし、刀身は折れ曲がり、柄ががたがたになる。まして、「鉄兜もろとも唐竹割り」などということは、木刀でマキを割るのと同様に物理的に不可能（従軍した軍刀修理の専門家の著書から）。

と、荒唐無稽な内容であることを暴いてゐます。どうしてこんな記事が書かれたのか、野田少尉が獄中で残した手記にはかう書かれてゐます。

記者「貴殿等ノ剣ノ名ハ何デスカ」

向井「関ノ孫六デス」

野田「無名デス」

記者「斬レマスカネ」

向井「サア未ダ斬ツタ経験ハアリマセンガ日本ニハ昔カラ百人斬トカ千人斬トカ云フ武勇伝ガアリマス。真実ニ昔ハ百人モ斬ツタモノカナア。上海方面デハ鉄兜ヲ、切ツタ

トカニ云フガ」

記者「一体無錫カラ南京マデノ間ニ白兵戦デ何人位斬レルモノデセウカネ」

向井「常ニ第一線ニ立チ戦死サヘシナケレバネー」

記者「ドウデス無錫カラ南京マデ何人斬レルモノカ競争シテミタラ。記事ノ特種ヲ探シテ
キルンデスガ」

向井「ソウデスネ無錫附近ノ戦斗デ向井二十人野田十人トスルカ。……無錫カラ南京マデ
ノ間ノ戦斗デハ向井野田共二百人以上ト云フコトニシタラ、オイ野田ドウ考ヘルカ、
小説ダガ」

野田「ソナナコトハ実行不可能ダ、武人トシテ虚名ヲ売ルコトハ乗氣ニナレナイネ」

記者「百人斬競争ノ武勇伝ガ記事ニ出タラ花嫁サンガ殺到シマスゾ。ハハハ、写真ヲトリ
マセウ」

向井「チョット恥ゾカシイガ記事ノ種ガ無ケレバ氣ノ毒デス。二人ノ名前ヲ貸シテアゲマ
セウカ」

記者「記事ハ一切記者ニ任セテ下サイ」

かうして、戦場でなんとか目立つ記事を書きたいと思つてゐた浅海記者に、向井さんが気の毒に思つて、ちよつとした思ひつきを話した。それを待つてましたとばかり、記者が取り上げて、もつともらしい武勇伝をでつちあげたのです。

裁判が始つてから家族は記者に、これが創作記事であることを証言して欲しい、と必死に頼んだのですが、得られた証言は「同記事に記載されてゐる事實は、向井、野田両氏より聞きとつて、記事にしたもので、その現場を目撃したことはありません」といふものでした。文明国の裁判なら、目撃者もゐない、まして被害者もゐないケースで有罪になるはずありませんが、二人はこの新聞記事だけで「戦争犯罪人」とされ、処刑されたのです。

二人の遺書を読んでみませう。皆さんの「自分の心で感じ」ていただきたいと思います。

向井少尉遺書

我ハ天地神明ニ誓ヒ 捕虜住民ヲ殺害セル事全然ナシ 南京虐殺等ノ罪ハ絶タイニ受ケマセン 死ハ天命ト思ヒ日本男子トシテ立派ニ中国ノ土トナリマス 然レ共魂ハ大八州ニ返リマス 我ガ死ヲ以テ中国抗戰八年ノ苦杯ノ遺恨流レサリ 日華親善東洋平和ノ因トモナレバ捨石トナリ幸ヒデス 中国ノ御奮斗ヲ祈ル 日本ノ敢奮ヲ祈ル 中国萬歳 日本萬

歳 死シテ護国ノ鬼トナリマス 天皇陛下萬歳

野田少尉遺書（一部）

我々の死が中国と日本の楔となり、両国の提携となり、東洋平和の人柱となり、ひいては世界平和が到来することを喜ぶものであります。何卒、我々の死を犬死、徒死むだじにたらしめない様、これだけを祈願いたします。中国万歳、日本万歳、天皇陛下万歳

ひよんな思ひつきを、さも事実であるかのやうな記事にされ、それを証拠として復讐裁判で死刑にされる。二人の無念を想像してみてください。

普通の人間だったら、この記者に憤り、中国を恨み、その思ひを遺書にぶちまけたでせう。しかし、向井・野田両少尉は二人とも、さういふ事には全く触れずに、ただただ自分達の処刑で「中国抗戦八年ノ苦杯ノ遺恨流レサリ」、「日華親善」が実現して、「東洋平和の人柱」となる事を望むのです。その心中を皆さんの「自分の心で感じ」ていただきたいと思ひます。しかし、この記事は、戦後、朝日新聞の本多勝一記者が『中国の旅』で再び取り上げて、今度は「南京大虐殺」の具体例として喧伝されるのです。「何卒、我々の死を犬死、徒死た

らしめない様、これだけを祈願いたします」といふ、野田少尉の最期の祈願は、もう一人の
でっちあげ記者によつて踏みにじられてゐるのです。現在、向井少尉の娘さんが、本多記者
などを相手に裁判を起してをられます。謂はれなき汚名が早く晴されて、靖国神社でお二人
の霊が安らかにお息みになられるやう願ふばかりです。

四、自分の言葉で語る

最後に「自分の言葉で語る」とはどういふ事か、考へてみませう。一つ、素晴らしい例が
あります。日系ブラジル人の女子高生が、日本で靖国神社などを訪問し、感じたことをまと
めた感想文です。

げんしゆくな気持ち

ナタリア・恵美・浅村（十七才）

二〇〇二年十二月に、私は第十三回使節団として、日本に行きました。あそこで、沖縄
や広島でおこったせんそうの事を見ました。原爆資料館や江田島や靖国神社で、いろんな
お話を聞きました。

そしてせんそうの意味が深く分かりました。戦争がなかったら、人々はしななくてもよかったのに。戦争というものはすごく苦しいものです。

けれど、私をもっとおどろいた事は、戦争にいった人達のすばらしい気持だった。あなた方は自分の国日本をまもるために、そして自分の家族の命をまもるために、自分の命をかけました。あなた達は敵にふくしゅうする気持より、自分の国の誇りをまもるために「死ぬこと」をえらびましたね。私はそれは本当にげんしゅくな気持ちであると思います。私は江田島でこんなメッセージを見ました。「正道一心」という書でした。だれかが弟のために自分の血で書いたものでした。女の子は自分のかみの毛で、「日本」と書きました。それは私の心にふかい感動をおこさせました。

江田島とは海軍兵学校があった場所です。ここで学んだ青年が、弟に「正道一心」と自らの血で書き残して、出征していった。海軍兵学校での就学年齢は十六歳から十九歳ですから、十七歳のナタリアさんとはほぼ同世代と言ってよいでせう。「正道一心」とは、「正しい道を一心に歩いてゆく」といふ事です。祖国を守るために出征していく事を、さう信じて弟に書き残していったのです。

また自分の髪で「日本」と書いた女の子とは、この兵学校の生徒の妹か許嫁だったのでせう。どうかこの日本を護ってください、といふ気持だったと思はれます。国が滅びるかもしれないといふ大戦争の最中で、一人ひとりが国の行く末を案じてゐた時代でした。

皆様、戦争で日本はまけた。でも、あなた方の命はむだにはならなかった。だって、今、私達も、日本の人も幸せ一杯でしょう。だから、あなた方はなくなったけれど、その気持は、いろんな人達に大切なことを教えました。

あなた方のために、今、私は一生けんめい祈ります。そして、あなたの生命をもらって今生きてるよ。本当にありがとうございます。日本の人、靖国神社を大切にしてください。おねがいします。なくなつた人達に誇りをもって下さい。おねがいします。

(真倫子・川村編「日本の皆様、靖国神社を守ってください」明成社、平成十五年)

江田島で見たメッセージにナタリアさんは「ふかい感動」を覚えました。それはナタリアさん自身の心で感じたことです。しかし、その「ふかい感動」とは何なのか。おそらくナタリアさんは、この文章を書きながら、あの時、自分は何に感動したのか、一生懸命考へてゐ

るのです。そして「あなたの生命をもらって今生きているよ」といふ言葉がみつかった時、ナタリアさんは、自分自身が何に感動したのか、得心がいったのでせう。自分の祖父母にあたる世代の人々が、自分たちと同じ若さで、何とか国を護らう、国を自分たち子孫のために残していかうと考へてくれてゐた、その思ひやりへの感謝の気持なのです。

「自分の心で感ずる」とは言つても、それを正確にあらはす言葉が見つかつて、はじめて自分が何に感動してゐたのか分るのです。この合宿では短歌創作の時間がありますが、その目的は自分の心で感じた事をいかに正確に表現するか、といふ事を学ぶことです。そして、自分の思ひにびつたりという言葉が見つかった時、その言葉によつて自分の思ひが自分自身でもよく分り、また友にもすつと伝はる、といふ体験をされるでせう。「自分の頭で考へる」「自分の心で感ずる」とはさうした「自分の言葉で語る」事によつて、はじめて完結するのです。このやうな「自分の言葉で語られた」文章を通じて、私たちの心は、遠いブラジルに育つた少女や、六十年前の人々ともつながっていくのです。

五、真の学問とは

靖国神社の問題を論ずるにしても、そこで祀られてゐる人々、そこで祈る人々の思ひを我々の心で感じ、それを自分自身の言葉で語る、といふ所から、始める必要があるのです。ここでご紹介したナタリアさんの感想文や、向井・野田両少尉の遺書を、自分の心で感じ、その思ひを自分の言葉で語ってみてください。

その上で、冒頭の朝日新聞社説の「侵略戦争の加害者である日本が戦死者をどう追悼するか」などといふ一文をもう一度よんでみれば、これがいかに概念的・概括的・表層的な物言ひであるか、理解できるでせう。「正道一心」と血で弟に書き送った兄、自分の髪で「日本」と書いた少女が「侵略戦争の加害者」なのか、冤罪によって死刑判決を受けながらも自分たちの死が日中和解の人柱となる事を願った両少尉を「侵略戦争の戦死者」と言へるのか。この一文には、当時の人々がどういふ気持で戦争に向つたのか、その思ひを自分の心で具体的に辿つていかう、といふ姿勢が全くありません。

かういふ姿勢では、外国政府の言ひ分に洗脳されることはあつても、自分の頭で考へ、自

分の心で感じ、自分の言葉で語るといふ真の学問には近づけません。政治的な思想にしても、我々の人生を導いてくれる信条や価値観にしても、その根底に自分自身の心で感じ、言葉で表現された思ひがあればこそ、それは我々の日々の行動を支へる原動力になり、また人に伝はり得るまごころになるのです。真の学問には、このやうな「核」がなければなりません。

この合宿の目的は、いろいろな講師のお話を聴いたり、文章に向つたり、友と語り合つたりしながら、一つでも良いから、自分自身の頭で考へ、自分自身の心で感じ、自分自身の言葉で語りうる何かを見つけ出して貰ふといふことです。さうした姿勢を身につけて、今後の日常生活で続けていけば、そこで得られた一つ一つの言葉が、皆さんの人生を豊かな生き甲斐のあるものにしてくれるでせう。さういふ姿勢で、これからの三泊四日間を過ごしていただきたいと思ひます。

講義

神国日本

— 神話と神宮 —

皇學館大学助教授

松浦光修



- 一 「科学の知」「神話の知」
- 二 世界で一つのだけの「国」
- 三 アマテラス大神、かく鎮まれり
- 四 式年遷宮——永遠の今

一 「科学の知」「神話の知」

神話について学ぶときに、大切なことが一つあります。それは、触れることも見ることもできないものを感じる、といふことです。現代人にとっては、とても苦手なことですね。なぜ苦手になったのか？といふと、それは、たぶん戦後教育のせみでせう。

戦後教育の本質とは「唯物思想」である、と私は思つてゐます。人はその思想に染まると、「触れることのできるもの」「見ることのできるもの」しか信じないやうになります。こんな教育が、日本では、もう六十年以上もつづいてきたのです。一世代を三十年とすれば、「唯物思想」による教育は、来年から、つひに三世代目に入るわけです。

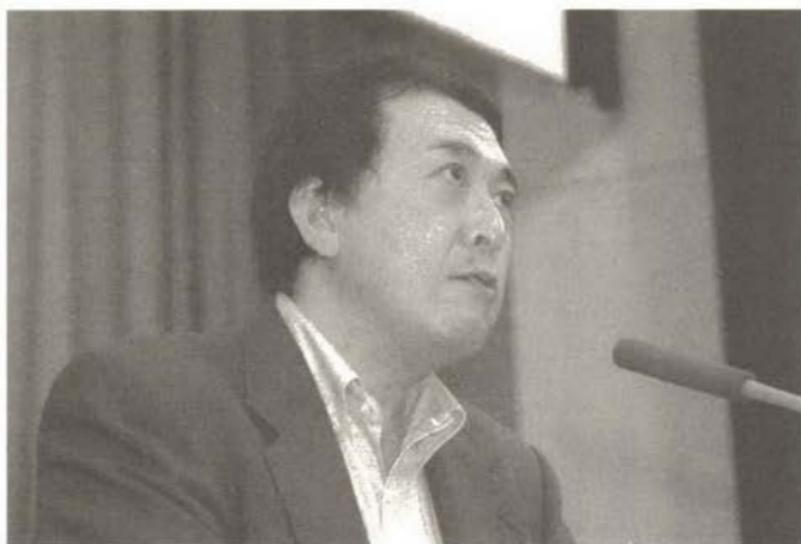
ですから、「神話」といふ言葉も、現在では、あまり良い意味では使はれなくなつてゐますね。たとへば、「それは神話にすぎない」などと、よく言ひませんか？ つまり「神話」といふ言葉は、現代日本では「錯覚」、「幻想」、あるいは「つくり話」、「思ひ込み」などの別名になつてしまつてゐます。私が学生さんたちに、「神話つて、そんなものぢやないよ」と言ふと、みんなあまりに驚くので、その驚きやうを見て、私の方が驚いてゐるくらゐです。

さういふ「神話」に対する心の中の「呪縛」、まづは、これを解かなければなりません。解きながら話をすすめなければ、いくら神話や神宮の話をして、たぶん無意味か、あるいは、かへって害になるかもしれません。

サン・テグジュペリ著『星の王子さま』といふ児童文学に、かういふ一節があります。「きつね」が、「王子さま」に、「ひとつ秘密を贈物にする」といって、こんなことを言ふのです。「なに、なんでもないことだよ。心で見なくちゃ、ものごとは見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」。「心」で見る、皆さんできますか？

戦後教育では、その逆を教へてきました。「心で見ない」やうにしてきたのです。だから「かんじんなこと」が、見えなくなったのでせう。「かんじんなこと」といふのは、具体的に言へば、神様・仏様などです。

いはゆる宗教系の学校が、日本にはたくさんありますが、では、その生徒や学生たちは、神様・仏様を信じてゐるでせうか？ 私には、ほとんど信じてゐないやうに見えます。それでは、さういふ学校の先生たちはどうですか？ これも私には、ほとんど信じてゐないやうに見えます。むろん、さういふ生徒や学生や先生たちには、信仰に関する知識は、他の人々よりはあるでせう。それは、むろん良いことですが、それだけだと、どこまでいっても「信



仰について知ってゐる」、といふにすぎません。

「信仰について知ってゐる」ことと、「信仰そのものを知ってゐる」こととは、天地ほどの開きがあります。音楽にたとへれば、譜面と演奏くらゐの開きがあります。

どれほど日本の宗教史に精通してゐようと、どれほど伝統文化を学んでゐようと、さらには、どれほど、さういふ分野の本を書いてゐようと、結局のところは古い戦後思想の「枠」を一步も出てゐない、思想の基本は「唯物思想」のまま、といふ人が、私を見るかぎり、たくさんゐます。皆さんのなかには、いろいろと難しい日本文化の本を読んでも、「ピンとくるものがない」と嘆いてゐる人はゐませんか。しかし、それは、皆さんがダメなんぢやなくて、書いてゐる人が、ダメなのかもしれませんよ。そもそ

も書いてゐる人が、内心では神様を信じてゐない、といふ人が多い。

むしろ、神話をバカにするため、神話を粗末にするため、まるでそのために本を書いてゐるやうな学者さへゐる。そんな学者の書いたものを、いくら読んだところで、「ピンとくるものがない」のは、当然なんです。

しかし近ごろは、さすがに日本人の心の復元力といふか、そんな力が動き出して、神話学や心理学の分野から、新しい時代のおとづれを予感させる本が、やうやく少し出てきました。ユング派の心理学者・河合隼雄さんが、一昨年、『神話と日本人の心』といふ本を出版されました。その本の書評が新聞に載ってゐましたが、そこには、この本の要点がまとめられてゐますので、次にあげておきませう。

「本書（河合隼雄著『神話と日本人の心』）は、古代の日本神話の中に現代人の心の深層を探り、神話から私たちがこの現代社会を生き抜いてゆくためのヒントを得ようと意図されている。私たちが『いま』を生き抜いてゆくには、ものを分析し、分離する『科学の知』だけではだめなのだ。ものや人をつなぎ、はぐくむ『物語の力』や『神話の知』が必要なのである。」（池田雅之「神話と日本人の心―現代社会を生き抜くヒント―」・『産経新聞』平成十五年

十月十二日）

「科学の知」、それが近代文明、ひいては現代文明を築いてきたこと、それを認めることに、私は何の異議もありません。「科学の知」は、分析し、比較し、数値化し、法則化し、そして、それを応用してきました。

しかし近代科学は、そもそもの出発点では、「自分たちは、あくまで『目に見えるもの』の範囲内のことをやってゐる」といふ、謙虚な認識をもつてゐたやうに思ひます。つまり、ある限定された世界のことしか自分たちは知りえないといふ前提で、近代科学は始つたはずなのですが、やがて、その謙虚さを失ひ、「科学の知」が万能であるかのやうな錯覚が生じ、いはゆる文科系の学問にも、怪しげな「科学の知」を持ち込む人々があらはれます。

その一例が、歴史に「法則」がある、とするマルクス主義の歴史学ですが、結局のところ、それが破綻したことは、ご承知の通りです。つまり、世の中を知るための方法として、「科学の知」は大切だが、「知」はそれだけではない。もう一つある。それが「神話の知」なのです。

たとへば、皆さんの子どもときのアルバムがあるでせう。それは、他人から見たら「ただの物」です。けれど、皆さんが見たら、一枚の写真からさへ、さまざまな「思ひ出」が「語られる」でせう。御両親からも、さまざま「思ひ出」が「語られる」かもしれぬ。

「物」は、それだけでは決して「物語」にはなりません、ある個人的な体験が「物」を通して「語られる」ことによつて、「物語」になるのです。「物」として見れば、九十九人にとっては、古くて汚い一枚の写真でも、あなたといふ一人にとっては、かけがへのない宝物になるわけです。その価値は「物」自体にあるわけではない。それに関する、あなたの「心」のありやうによつて、「価値あるもの」ともなり、「価値なきもの」ともなるのです。とすれば、その価値が「高い」とか「低い」とか、それはもう「科学の知」だけでは、計測不可能なことですよ。

さて、さういふ「物語」が昇華して、「物語」の域を超えるときがあります。それは、個別的でありながら、普遍的なものになるのです。個人の心が、民族の過去と現在をつらぬく普遍性をもつた何かと共鳴するのです。かうして「神話」が誕生します。

ですから、一つの民族が生み育てた「神話」は、その民族にとつてのみならず、世界の宝なのです。ギリシア、ローマ、ユダヤ、北欧、ケルトなど、その他の世界各地の「神話」は、その民族の「心のかたち」を、さらには、人の「心のかたち」をあらはしたものとして、二十世紀にはひつてから、あらためて大切にされるやうになってゐます。

たとへば、映画の「スターウォーズ」は、神話を素材にしてつくられてゐます。あれは、

神話学でいふ「英雄体験」の物語でせう。今も昔も、特に男性は「英雄体験」を経て、一人前の大人になる、といはれてゐますが、少年が男になるといふのは、じつに大変なことなのです。そこでは、何よりも「知恵」と「勇氣」が試されるのですから……。

わが国のスサノヲの命みことの話も、少年が男になるといふ「英雄体験」を語つたものとして読むことができます。泣いてばかりゐた少年が、「死と再生」を経て、ヤマタノオロチを退治し、クシナダ姫を救ふ英雄となる……、まさに「英雄体験」の神話ですね。

古くて汚い一枚の写真でも、それがその人の人生を支へてゐる。そんなことがあるやうに、じつは人間は今も「神話」によつて、からうじて、人間らしい世界を維持してゐるのかもしれない。

二 世界で一つだけの「国」

世界の神話は、世界の宝ですが、ここで大切なことは、日本の神話は、そのなかでも、きはめて特殊なものである、といふことです。世界で一つだけといふ特徴があります。それは何か？ つまり、まだ死んでゐない、生きてゐるといふことです。

渡部昇一さんといへば、皆さん御存じでせうが、昭和四十年ごろ、きはめて象徴的な体験をされてゐます。ギリシアでポセイドンの神殿の廢墟を見たあと、日本に戻り、石巻市のマシオンに滞在されてゐた。これは、その時の話です。

「マシオンの後ろには崖があり、登ると塩竈神社しほがまがあつた。(略) ちようと塩竈神社のお祭り、ワツシヨイワツシヨイと大変な賑わいだった。そのとき私は、ふとギリシアにいたときに見た有名な壺のことを思い出した。それは古代ギリシアのお祭りが描かれた壺であつた。古代ギリシアのお祭りは壺の中に残っているだけで、再び繰り返されることはない。(略) しかし、この塩竈神社の祭りはどうだろう。ワツシヨイワツシヨイと町をあげて祝つているのである。(略) 塩竈神社の神様はオオワタツミの神だから、海の神様でポセイドンなのである。(略) 金華山には、鬱蒼たる森林と木造茅葺かやぶきでありながらそっくり残っている神社と、お祭りをする人々がいる。日本は全部生きている」(渡部昇一著『国民の教育』)

古代には、世界のどこにでも神話が生きてゐたでせう。しかし、ほとんど地域が排他的宗教に支配され、やがて神話も祭祀も、それを生んだ王朝も民族も、組織的な構造をもつた統一体は、すべて消滅し、わづかに民間伝承、民間儀礼など、断片的な「神話の跡」を残すの

みとなつてしまひます。しかし、日本は違ひます。「古事記」「日本書紀」の時代から、現代にいたるまで、神話も神祭りも、その王朝も民族も、すべてが組織的な構造をもつた統一体としてつづいてゐる、途絶えることなく「全部生きてゐる」わけです。

サヨクの学者たちは、それが癪らしい。いろいろと細かい難癖、ケチをつけて、それを否定しようとやつきです。それに惑はされる読書人も多くゐますが、このところ、どうにも彼らは分が悪い。結局のところ、この日本は「全部生きてゐる」といふ事実を否定することなど、できはしません。「古事記」「日本書紀」があり、目の前に第一二五代の天皇陛下がをられ、全国では八万もの神社があり、古代と同じ民族によつて、今も祭りがつづいてゐます。だから、どうあがいてみても勝負はついてゐます。

日本は「神話と現代が連続してゐる国」です。その意味で人類史上、ほとんど唯一の国なのですが、その連続性を象徴する、いはば「神社の中の神社」ともいふべき存在が、この伊勢の神宮です。

ですから、感じることでできる人は、神宮に来ると、何か感じるやうです。イギリスの歴史家・アーノルド・トインビーは、昭和四十二年、伊勢神宮を訪れたとき、一筆求められ、かう書いてゐます。「この聖地において、私は、あらゆる宗教の根底的な統一性を感得する」。

また、フランスのアンドレ・マルローといふ著名な文化人も、昭和四十九年、七十三歳のとき、神宮に詣でて、神秘的な「啓示」を受けたといひます。

要するに、「心で見」る人は、外国人でも「かんじんなこと」が見える。さうでない人は日本人でも見えない……、そういふことでせう。

三 アマテラス大神、かく鎮まれり

さて、その伊勢神宮とは、どのやうにして成立したのか？ 伝へられてゐるところを、ザツと申しあげませう。

日本神話の、いはばクライマックスといふべきものの一つに、「天孫降臨」の場面があります。そのとき、天上の支配者であるアマテラス大神は、地上に降臨されるお孫様のニニギの命みことに対して、三つの大事な命令を与へられますが、これがいはゆる「三大神勅」といはれるものです。要するに、神様からの三つの命令です。それを一つづつ見ておきませう。

「吾みこが見、この宝鏡たからのかがみを視みまさんこと、吾あれを視みるがごとくすべし。ともに床を同じくして、

殿を共にして、齋鏡となすべし。」（『日本書紀』）

これは、アマテラス大神が、鏡を渡されて、「わが孫よ、この鏡を見るときは、それを私を見ることだと思ひ、この鏡と、同じところに住んで祭りなさい」とおっしゃったといふ意味です。

「吾が高天原にきこしめす、齋庭の稲穂を以ちて、また吾が児に御せまつるべし。」（『日本書紀』）

これは、アマテラス大神が、「私の世界・高天原で食べてゐる神聖な稲穂を、私の孫である、あなたに授けよう」とおっしゃったといふ意味です。

「葦原千五百秋瑞穂の国は、これ吾が子孫の王たるべき地なり。よろしく爾皇孫、就きて治せ。行くませ。宝祚の隆えまさむこと、まさに天壤と無窮けむ。」（『日本書紀』）

これは、アマテラス大神が、「日本の国は、私の子孫が君主となりつづける国である。さあ、私の孫よ、行って治めなさい。幸ひを祈る。天皇の位が栄えつづけることは、天のやうに、また地のやうに永遠であるのだから」とおっしゃったといふ意味で、「天壤無窮の神勅」として有名なものです。

さて、この「三大神勅」は、何を意味してゐるのでせう？ 私なりに解釈してみます。

最初の「神勅」は、「国民の信仰」を意味してゐます。しかし、この「信仰」、なんと寛容なものでせうか。「この鏡を祭りなさい」、それだけなのです。理念でも戒律でもなく、「鏡」といふ物、それを祭りつづけられ、それでいいのです。このやうな寛容な「信仰」の基盤があるからこそ、わが国は、古代から現代にいたるまで、全世界の人類が古今東西、苦しみつづけてゐる「宗教戦争」といふ大変な悲劇を、ほとんど経験することなく、歴史をきざさんでこれたやうに思ひます。

その次の「神勅」は「国民の経済」を意味してゐます。米といふものが、きはめて生産性と滋養に富んだもので、穀物の中の王様であるといふことは、周知のところでは最近では遺伝子工学の世界的権威・村上一雄氏が、「世界のあらゆる食品の中でも最も理想的な作物」である、と述べてゐます。日本人は米を主食にすることにより、近代以前の社会では、もつ

とも効率的に、人口を高く維持することが可能だったわけですから。

最後の「神勅」は「国民の政治」を意味してゐます。政治には必ず中心点が必要で、それが日本では皇室なのですが、この天皇といふご存在の大切さについては、戦後教育では、まったく教へられてをりません。

一言でいへば、天皇は日本の命です。日本を日本たらしめるのは、天皇しかない。皇統が絶えれば、何もかもなくなるのです。日本で守るべきものの優先順位をつけるとすれば、何はさておいても皇統であると、私は思つてゐます。

ところで皆さん、そもそも天皇の最も大切なお仕事とは何か、御存じですか？ それは「祈ること」です。今も毎日、陛下は人々の幸福を祈つてゐらっしゃいます。日本民族の祈りの代表者、つまり「祭り主」、それが天皇なのです。ただし、「祈り」といっても、これも唯物思想に染め上げられた現代人には、よく意味がわからないかもしれません。私は「祈り」とは、一言でいへば「愛」である、と思つてゐます。天皇は、日々、神と民への愛を示してゐらっしゃる。そこに天皇の「祈り」の意味がある、と考へたらいいでせう。

さて、先の三大神勅のうち、伊勢神宮に直接に関係するのは、むろん「宝鏡」の神勅です。同じ家に祭られ、といふことでしたから、最初は宮中に祭られてゐました。ところが、第

十代の崇神天皇のとき、異変がおこります。疫病が流行し、民衆が動揺したのです。

何か自分の政治に誤りがあり、神がお怒りなのではないか、と考へられた崇神天皇は、「鏡」を皇居の外の一番神聖なところ・笠縫村に移し、最愛の娘・豊鍬入姫命を奉仕者として、お祭りされます。豊鍬入姫命のお仕事を受け継がれたのが、倭姫命で、ときに垂仁天皇のころでした。このあと、倭姫命の、鏡を祭る最適の地を探す、長い旅が始まります。その長い旅は、現在の奈良県から三重県、滋賀県を通り、また三重県へとつづきます。

その結果、アマテラス大神は、現在の場所に鎮座されます。この時のアマテラス大神のお言葉は、こういふものでした。

「時に天照大神、倭姫命にをしへて曰く、『この神風の伊勢の国は、すなはち常世の浪の重波よする国なり。傍国の可憐国なり。この国に居らむと欲ふ』とのたまふ。故大神の教へのまにまに、その祠を伊勢国に立て、よりて齋宮を五十鈴川の上へ興てたまふ。」（『日本書紀』）

アマテラス大神は倭姫命に、「この伊勢の国は『常世』（永遠の国）からの波が、しきりに打

ち寄せる国であり、大和の側の美しい国である。だから、この国にみたいと思ふ」とおっしゃったわけです。なんとも荘厳で、しかも美しい表現ですね。

かうして、伊勢神宮がはじまりました。それはいつごろのことなのか、といふことについては、著名な古代史学者・田中卓氏の説にもとづいて、「三世紀の後半から四世紀の初頭」としておきませう。

以来、千数百年の歳月が流れます。しかし、神宮は原形を保持しつづけ、今でも古代さながらの「祭り」がつづいてゐます。

四 式年遷宮——永遠の今

神宮には、それほど古い歴史があるのですが、むろん三、四世紀のころの神社がそのまま残ってゐるわけではありません。現在の社殿は、平成五年に出来たものですから、まだ出来てから、十二年目の神社にすぎない、ともいへるわけです。これは、どういふことか？ それには、式年遷宮といふ、世界史上でも、きはめてユニークな、神殿のリメイク・システムを理解しておかなければなりません。

そもそも、神宮の建物は、ほぼ弥生時代の倉庫のかたち、そのままです。かういふ建物は、二、三十年で、古びて朽ち果てる運命にあります。むろん、日本には、すでに奈良時代、法隆寺のやうに一千年以上の耐久年数をもつ建物を立てる、高度な技術がありました。ならば、その高度な技術で、伊勢神宮を建てたらよささうなものです。古代人は、わざとさうしなかつたのです。

わざと二、三十年で、古びて朽ち果てる建物を、古びたら壊し、まったく同じものを建てる、といふことを繰り返してきたわけです。ですから神宮では、最古の建物が、そのまま最新の建物なのです。「永遠の今」と言ひますか……。千年の長い時間の流れも、神宮においては、まるで昨日のことのやうです。このシステムには、古代人の、なみなみならぬ知恵と、神道の信仰の奥深い姿が象徴的にあらはされてゐます。

このシステムは七世紀の持統天皇のころにスタートし、戦国時代などに、若干の断絶はありました。千三百年の歳月を経ても、なほ現在進行形でつづいてゐます。なぜ、それが可能なのでせうか。その理由は、日本の国の本質に由来するものでせうから、話したらきりがあります。ここでは私の考へる、きはめて具体的な理由を、二つだけあげておきたいと思ひます。

一つは、神宮で最も古い祭り、「日毎朝夕大御饌祭」ひごとあさゆふのおほみけにまつはるものです。この祭りは、毎日毎日、一日もとぎれることなく、朝と夕の二度、神々にお食事を差し上げる、といふもので、これが神宮の祭りの基本です。ちなみに、古代の人は、一日二度しか食事をしませんでしたから、二度でいいのでせう。

「食べること」、これは「生きること」と同じです。その生命の基本が、じつにシンプルに神宮の祭りに表現されてゐます。むろん、人は、一度食べても、すぐに空腹になります。だから、毎日毎日、朝と晩、食べつづける。

服もさうです。季節ごとに古い物は捨て、あたらしいものに着替へなければならぬ。だから神宮には、神様の着物をととのへる神社も、二つあります。食べる物、着る物、ときたら、こんどは住むところ。それを二十年に一度、まったく新しく作り替へるのが、式年遷宮です。

さて、毎日、神様にお食事を差し上げなくてはならないので、休む暇などありません。「日毎朝夕大御饌祭」をつづけてゐるかぎり、一瞬の断絶も許されないのです。

ところで皆さん、皆さんが新しいアパートに引っ越すとき、一瞬も途絶えることなく、まったく同じ生活をつづけるためには、どうしたらいいですか？ それは、今住んでゐると

ころと、まったく同じ間取の部屋を用意して、まったく同じ家具を、同じやうに配置しておけばいいでせうね。

伊勢神宮には、その隣に、まったく同じスペースがとってありますが、遷宮のときは、ここに全く同じ建物を建てて、一晩で移動するわけです。これで「日毎朝夕大御饌祭」と式年遷宮の関係がおわかりでせう。つまり、毎日、まったく同じ祭りを、一瞬も途絶えることなくつづけるために、このやうな知恵が生れたのではないか、と私は思ひます。それに、隣に同じ建物があるわけですから、同じものをつくることは容易でせう。

時は移り、人は変わりますが、二十年に一度ですから、必ず技術は伝承される。そのため、弥生時代の建物と、まったく同じ建物を、今も造ることができるわけです。

次に、もう一つ、式年遷宮を継続させたものとして、ぜひ言っておきたいことがあります。それは民衆の信仰です。

そもそも外国なら、古代国家の権力機構が崩壊したら、それとともに、その信仰の中心施設も崩壊するのが、ふつうでせう。ところが、なぜ日本では朝廷が力を失っても、神宮は滅びてゐない。武士の世が来ても、また武士の世が滅んでも、神宮は滅びてゐない。それは、なぜか？

それは神宮への信仰が、政治権力によって強制されたものではなく、また、宗教戦争の結果、勝ち取ったものでもないからです。それは古代から、日本人一人ひとりの、心の中に、直接根づいてゐたものなのです。

「私幣禁断」であつたにもかかはらず、すでに平安時代の中ごろには、民衆の参拝がはじまつてゐます。古代国家から与へられた神宮の領地が、武士の世になつて横取りされても、こんどは武士が寄付しましたから、神宮は困らない。鎌倉時代になると、ますます神宮への信仰が盛んになります。南北朝のころになると全国各地に、伊勢信仰をもつ人々の組織……「講」といふものが広まつて、その経済を支へるシステムも確立していきます。

伊勢神宮の信仰を全国に広めるために歩き回つた神職たちを「御師」と呼び、そのお札をもらつてゐた家を「檀家」といひますが、江戸時代の、田沼意次の政治が行はれてゐたころ、安永六（一七七七）年の数字が残つてゐます。御師は四六三人、檀家は四三万九五四九軒にのほります（『大神宮古事類纂』）。かりに一軒に五人として計算すると、だいたい二千万人です。当時の人口が、約三千万人ですから、外宮の「檀家」だけで、全国民の七割はおさへてゐたことになります。

神宮のお札を「大麻」といひますが、どんな離れ島でも、どんな僻地にでも、「大麻」は

配布されてゐました。御存じの集団参拝、「おかげ参り」といふ現象がピークのころは、国民の数人に一人が、一度に伊勢へ参拝したといはれてゐます。

世間では「日本人ほど信仰心のない民族はない」などといふ人もゐますが、私は、さうは思ひません。信仰心がないのは、日本史上、大正以後の知識人たちくらゐではないでせうか。ある意味では、日本人ほど信仰の厚い民族も少ない、とさへ言へるやうに思ひます。ただし、その信仰は、いはゆる一神教ではないので、外国人の目からすると、信仰ではないやうに見えるかもしれませんか……。

このやうな民衆の信仰、その具体的な思ひが、「御神宝」……、要するに遷宮のたびにつきり直される神宮の宝物（神様の御道具）にあらはされてゐます。二千数百人の職人が、何年も、全身全霊をかけて約八百種、二千五百点の宝物をつくるのです。いづれも文化財級のものばかりです。いったい職人さんたちは、どんな気持ちでつくつてゐるのか？

ある宮大工の棟梁は、かう言つてゐます。

「御神殿は神さんに住んでもらふところやから、何もかもお見通しやで、どんな屋根裏も絶対ごまかしがきかん。しかし、誰が褒めてくれんでも、神さんが喜んでくださりや、本

望ですわ」（藤岡信一談）

この棟梁は、明らかに神の实在を信じてゐるやうです。おそらくそれゆゑに、すぐれた職人たちは、その作品に、自分の名前を刻まうなどとは思ひませぬ。「自分が、自分が」といふ次元の話ではないのです。これは、深い信仰がなければ、できることではないでせう。

また、式年遷宮の根底には、神道の「祓ひ」の思想があります。一度死に、生れ變つて、また生きるのです。式年遷宮は、その意味で、二十年に一度の国家的な「祓ひ」であるといへます。この「もつとも古いものこそ、もつとも新しい」といふ思想、「復古」イコール「維新」といふ思想こそ、神道ならではのものでせう。それは、明治維新が王政復古であることと、軌を一にしてゐます。

ともあれ、「食べる」「着る」「住む」といふ、これほど世俗的な行為を、これほど神聖なものとして洗練しあげた文化は、他にはないでせう。私は、これは世界に発信できる、また、しなければならぬ、きはめて高い文化であると考へてゐますが、その価値を、当の日本人のなかで自覚してゐる人が少ないのは、なんとも残念なことです。

しかし、現状は、世界に発信するところではない、かもしれませぬ。現在の神宮には、しだいに「危機」が迫つてゐるのではないか、といふことも考へておく必要があるでせう。「神宮大麻」の頒布数の減少が、その「危機」を象徴してゐます。平成十六年度の「神宮大麻」

の頒布数は九〇〇万六四二七体、全国世帯数に占める「神宮大麻」の頒布世帯率は一九・一五%です（『神社新報』平成十七年三月十五日）。

一世帯平均・二人とすれば、この約九〇〇万世帯といふのは、約一千八百万人ほどで、人口の十八%ほどになります。江戸時代、外宮だけで、人口の七割を押さへてゐたところからすれば、その比率は、三分の一以下になってゐる、と推測してよいでせう。

これからの人口は、減少していきますから、この減り方は、もしかしたら、まだ「序の口」なのかもしれません。修学旅行で伊勢を訪れる学校の数も激減してをり、「神宮」にとつては、すでに厳しい時代が、はじまつてゐます。これらすべての原因も、私には、やはり「戦後教育」にあると思はれます。神道、神話、神宮、天皇……、それらすべてに対する否定的なメッセージが、日教組教育によつて社会全体で拡大再生産されつづけ、もはや国民の思想状況は、取りかへしのつかない地点に達しつつあるやうに思はれてなりません。

いはば「失はれた六十年」です。しかし、それを悔んでばかりゐても、しかたがないでせう。ならば、どうするか？ 私たちが、これから取り戻すしかありません。「自分は国のために何ができるのか」。そのことを若く志のある皆さんには、今から深く考へておいてもらひたいと思ひます。

『論語』に、「子曰く、人能く道を弘む。道、人を弘むるに非ず」とあります。思想があつて人間があるのではなく、人間があつて思想があるのです。いくら立派なことを知つてゐても、それだけでは意味がありません。一人ひとりの人が、勇気をもつて正しいことを言ひ、正しいことを行ふこと、そこから「道」が広まる、これはさういふ意味だと思ひます。

ですから、まづは自分が正しいことを言ひ、正しいことを行ふ、そこから、はじめませう。皆さんが、本気で日本を愛してゐるのならば、その思ひは、必ず回りの人に伝はります。さういふ若者が、一人でも二人でもあらはれること、日本を復活させるには、そこからはじめられないと思ひます。

講義

日本思想の源

埼玉大学教授

長谷川 三千子



はじめに

思想の源は言葉の内にある

言葉に関する学問について

西洋語と日本語の文法構造の違い

「てにをは」について

国学の柱

助詞「と」について

をはりに

はじめに

今日は「日本思想の源」といふ題でお話しさせて頂きます。多分、皆さんは、この合宿のパンフレットの「心のふるさと伊勢神宮で学ぼう」といふキャッチフレーズとこの題とは、いはば一組になつてゐるやうにお感じではないかと思ひます。また事実、両者はぴたりと一組になつてをります。ただそんな風感じてゐる時に、「日本人の思想の源」といふのは、何かかう、遠い所にあるといふ、さういふイメージを知らず知らずの内に、心に抱いてゐるのではないか——例へば、ガンジス川の源は遠いヒマラヤの内にある。それと同様に、我々の思想の源は、はるばる伊勢にやつて来て、二千数百年の昔を偲ぶ、そこに源があると感ずる。そんな風に考へる時、我々の思想の源は何か遠い所にある。時間的にも空間的にも、遠い所にある。さういふイメージが付き纏つてゐます。

でも、今日、皆さんにお話したいのは、それは遠い所にあるのではないといふことなんです。実は、日本の思想の源といふのは、皆さんの一人一人の内にある。あるいは皆さん一人一人が、すでにその思想の源泉そのものの内に立つてゐる。今日は、さういふことを、ああ

さうなんだと気づいて頂く、これが今日の私の話しのメインテーマです。

思想の源は言葉の内にある

「日本人の思想の源泉が、皆さんの一人一人の内にある」と言っても、一体どういふ風にしてあるのか、と首を傾げてゐる方もゐらっしゃるかと思ひますが、我々の思想の源泉が、実は日本語といふ言葉の形で、皆さん一人一人の内にあるのです。

そんな風に申し上げると、これもまた、殊に今日お集まりの方には、すんなりと納得していただけるのではないかと思ひます。「しきしまの大和の国は言霊の幸はふ国ぞま幸くありこそ」といふ柿本人麻呂の歌を思ひ出したりして、ああ言霊の話しだな、とそんな風に納得なさる方もおありかと思ひます。また、実際にさういふ話しになるんですが、実は、あんまりそのやうにはすつきり納得して頂かないのがいやうな気がするんです。

改めて、古くからの言霊思想とはどういふことなのか、我々が日本語を話すといふこと、そのことがそもそもどういふことなのか、それを考へてみる必要があります。実はわれわれ自身、普通に暮してゐる時に、我々が日本語を使って暮してゐるといふことは、ほとんど意



識してゐないんですね。今日も、神宮の参道を、三々五々話しながら歩いてゐるわけです。「昨日の夜は暑くて時々目がさめちゃった」。それを聞いてゐる人もすんなり分つて、「ぼくは熟睡してゐて気がつかなかった」。そんな事を話しながら歩いてゐる。多分、その時「自分は今、日本語を使つてゐる」などといふことは意識をしてゐない。さう言へば「昨日はどうだったかな」などと思ひ出し、それが口をついて出て来る。さういふ風に、言葉といふものは、使つてゐる我々自身にとつて、いつもほとんど透明で見えないと言つていい。例へば、今、私は日本語で話しをしてゐます。こんな風に「今、私が日本語で話してゐます」といふ、まさに自分が使つてゐる言葉を意識して語つてゐる時でさへ、皆さんにはもう全く透明に、さっと、私が言はうとすることが通じて

ゐる。ところが、私が「私を今、日本語を喋ってゐます」とか、「私に今、日本語が喋ってゐます」といったら、皆さん「えっ」とお思ひになりますよね。「何か可笑しいぞ」と。実は、日本語文法の達人だなんて思つてゐない人でも、我々日本人はみな日本語文法を良く知つてゐる。私が今、そんな言ひ方をしたら、ぱつと、可笑しいぞと瞬間的に気づく。何といふか、脳内スイッチがピーとエラー信号を發してゐるといふ、そんな感じで「可笑しいぞ」と聴き取ることが出来る。我々自身の内に、我々自身でも気づかないやうな、何かすごい能力が含まれてゐる。それが言葉といふものなんです。

例へば逆に、今、私がこんな風に喋つたとします。「メントナン・ジュ・パルル・アン・フランセ」、もちろん皆さんの中に第二外国語でフランス語を取つてゐらっしゃる方には、ああ、何かフランス語会話の初歩でやったやうな事を言つてゐるな、とお気づきでせうが、フランス語を全然習つたことがない人が、今、もそもそと言つた言葉を聞いたら、ただ単にもそもそとした音の固まりがごそごそしてゐる、そんな感じしかない。母国語といふのは、今もお話した通り全く透明に、何の苦もなく、言葉を使つてゐることすら気が付かないほど、透明にすつと耳から頭に入つて来るのに対して、全く知らない外国語といふのは、これはもう透明だ不透明だといふところの騒ぎでなくて、ただ音のゴミといった風にしか響いてこな

い。

これが又、もう一つ言葉といふものの非常に不思議な所です。この言葉といふものは、自分のいはゆる母国語と言はれるものは、これはもう自分自身がいつ苦勞し勉強したといふことを全く意識しない内に、自分の血となり肉となつてゐて、それは今、言つたやうに、微妙な文法の差異と言ふものをきちんと思分けてゐる。文法学者達といふのは、傍らに文法といふものがあつて、それで見分けてゐるといふよりも、我々の内に備はつてゐる何か「この文章は可笑しい」「この文章は可笑しくない」と見分ける、その能力を手掛かりにして、正しい日本語といふのはどういふものなのかを見分けてゐると言つてもよいのです。片方ではさういふすごい能力を誰もが持つてゐる。と同時に言語と言語の間には、非常に大きな壁といふか、あるいは深淵があつて、自分の母国語以外の言語といふものは（たまたまお母さんがフランス人、お父さんが日本人で、フランス語と日本語を両方一緒に母国語として習得したといふやうな特別な例でもない限り）、大変な苦勞をしないと習得できない。外国語の壁と言ふものは、容易には乗り越えられないのです。

言葉に関する学問について

さて、それでは、どうやって人間は、自分が言葉を使つてゐることに気が付くのか。これは実は非常に面白いことなんです。言葉を持たない民族といふのは、およそ人類の中にはほとんど存在しないんですね。所謂、未開の人類と呼ばれるやうな人達も、それぞれ完全な言葉の体系を持つてゐる。

ところが、言葉についての学問を持つてゐる民族となると、これは古来、非常に少ないんです。言葉を持つてゐる全ての民族が、言葉についての学問を持つてゐるといふ訳ではないんです。例へば古代のギリシャ、インドといった、幾つかの非常に限られた所で、言葉に関する学問といふものが見られるのみなのですが、さうした言葉に関する学問を持つてゐる稀な文化の一つが実は、日本文化なのです。

では、どういふ所から、さうした学問が芽生えて来るのかといふと、外国語との出会ひといふものが、そのための大きなきっかけとなります。彼らの口にする音は、自分にとつてはまるで雑音でしかない。でも、彼らにとつてはそれが言葉だといふ、さういふ体験をするこ

とによって、「言葉の不思議」に目が開かれる。さうしてそこに言語に対する学問といふものが出て来るといふわけなのです。

日本の場合には、日本人が最初に出会った言語といふのは、皆様も御承知のやうに中国語です。これは単に異言語として日本に入つて来ただけではなくて、漢字といふ文字を伴つて日本に入つて来ました。これが如何に日本文化にとつて重大な事件であつたか。このことについては、以前この合宿でもお話ししたことがあるんですが、今日はそこがメインテーマではないので、簡単に触れて置きたいと思ひます。

今、言語についての学問を持つてゐる民族は、非常に少ないと申しましたが、字についても同じことが言へます。文字を持つてゐる言語といふのは、これ又、人類の言語の中で非常に限られてゐます。例へば、西洋語の中には、英語、フランス語、ドイツ語、オランダ語など沢山ありますけれど、皆、同じ一つのローマ字と我々が呼ぶ、その一つの文字で書き表してゐる。これは、古くはギリシャ人達がフェニキア人から学んだ文字から自分達のギリシャ文字を作り、それがまた、時代が下つて、ローマ人達の使ふローマ字になつて行つた訳ですが、本当は根本は一つなのです。それを、皆自分達の言語を書き表すのに使つてゐる。

そしてこれとは別に、もう一つの非常に大きな力を持つてゐた文字が漢字です。ただし、

この漢字といふ文字は、ローマ字と違って、異言語にとつて使ひにくい文字なんです。どんな風に使ひにくいかといふと、ローマ字といふのは、これはただ文字それ自体には最早意味はないのです。出発点の時は、ちゃんと一つ一つの文字に意味があつた。例へば、Mといふ文字、これは水を表す象形文字だつた。さういふ風の一つ一つの由来は意味を持つてゐたんですが、ギリシヤ人やローマ人が使ふ時には、もう全く自分達の言語の音を表す記号として使ひこなせばよかつた。ところが漢字といふものは、必ず意味と音と一つになつた文字といふ、さういふ形で出来上がつてゐる。例へば「木」といふ漢字これはかならず「モク」といふ音と一緒になつて使はなければならぬ。だから、厳密にいふと「木」を「モク」と呼ぶ民族言語でないと漢字が使へない。といふのが、そもその漢字の出発点だつたのです。それを我々はこの本来は「モク」といふ音である「木」といふ漢字を、あつさり「キ」と言つて使つてしまふ。さういふ離れ業でもつて、我々は漢字といふものを使つた訳です。そんな風に異言語と接触してゐると、まづ際立つて気がつくことがある。それはどういふことかといふと、中国語といふのは、いろいろな言語の中でも、一寸タイプの特異な言葉で、所謂「てにをは」に当たるやうなものが極端に少ないのです。ヨーロッパ語、殊にギリシヤ語やラテン語のやうな古い西洋語には、必ず語尾の変化がある。全てのインドヨーロッパ語とい

ふのは、さういふ語尾の変化でもって、丁度「てにをは」に当るやうな機能を果してゐるのですが、中国語にはそれもないのです。全く変化をしない単語だけを並べて行つて、文脈だけからその文法關係を推測するといふ奇妙な言語なのです。さういふ言葉の文字を使って日本語を表してゐると、いやでも日本語の持つてゐる中国語とは違ふ構造といふものに気づかざるを得ない。

皆さんにお配りした資料の中に、をことびん乎古止点の表があります。漢文を読む時に、漢字の左下、左上、右上、右下いろいろな所に点を打つ。この点の位置によつて、漢字にどういふ「てにをは」をくつ付けたらよいか、その印にしてゐた表です。例へば「木」の左下に点が打つてあると「木で」、右上に打つてあると「木を」となる。さういふ便宜の為に作られたものが乎古止点といふものなのです。かういふ形で、我々は中国語を日本語に読むといふ、さういふ工夫をして来た訳です。最初は恐らく、単に非常にぶつきらほうに置いてある漢字を、日本語らしく読む、日本語として読む道具に過ぎなかつたと思はれる。それが、段々「いやまてよ、これは日本語の特色そのものではないか」と、さういふ風に気がついて来る。そして、段々に「さうだこの『てにをは』といふものには、実はいろんな規則があるのだ」といふことが分つて来る。それがまづ日本語の文法研究といふものの出発点になつて来た訳です。そ

れが、どんな風に展開して行ったかといふ、その大筋をこれから詳しくお話したいと思ひますが、それこそが今日お話する「日本思想の源」をさぐるといふことにつながって行くのです。

西洋語と日本語の文法構造の違い

では、さういふそもそも文法に気が付くといふことは、言葉の組立てに気がつくといふこととは、これは一体どういふことなのか。これが、非常に大事な話になって来ます。これからお話するやうに、実は文法といふものは、我々が一体どんな風にしてものを考へてゐるのか、われわれ自身が自分でも気が付かない無意識のものの考へ方の、その肝心な構造を形作つてゐる。それが文法といふものなのです。

そのことに一番早く気が付いたのがギリシヤ人です。お手元にあるレジメを見て下さい。ここでは、私自身ギリシヤ語は自信がありませんし、皆さんもギリシヤ語で例文を書いても何のことやら、ピント来ないと思ひますので、一番良くご存知の英語を例に取つてあります。ここに書きました主語・述語といふ、この皆さんにもよく馴染みの文法用語、文法構造と

いふのは、これは二千数百年前にアリストテレス、つまり古代のギリシャの哲学者が発見した文法構造なんです。

「This is a dog」といふ時、Thisが主語で、dogが述語である。あるときは「The dog is an animal」といふ場合、The dogが主語で、animalが述語、現代文法ではisも含めて述語としてゐます。これが中学校の初歩で習ふ英文法なんですが、これはギリシャ語の場合と全く同じなんです。この非常に簡単な、中学校の一年生で習ふ英文法が、一体どういふ意味を持つてゐるのか、これを考へ出したのはギリシャの哲学者です。哲学者といふと、兎に角やたらと森厳で難しい学問といふ風に思はれてゐます。例へば、今、ご紹介したアリストテレスといふ哲学者は、哲学とは「存在を存在として探求する学問である」といふ風なことを言つてゐる。無と存在について深く考へるのが哲学であるといふのは、実際さうなんです。ただ哲学者達は、じつと瞑想にふけて、無と存在について考へてゐたのではないのです。何を手掛かりにして考へたかといふと、かういふ何でもない普通の彼等にとつて日常的な言葉から考へて行つた。それが彼等にとつての哲学の出発点だったので。どんな風に考へたかと言ひますと、ギリシャ語では主語のことをヒュポケイメノンと言ひます。どういふ意味かといふと、「下に横たはるもの」といふのが、そのもともとの意味です。つまり主語となるも

のが、何か下に横たはつてゐる。そして、それに対して述語はカテゴリーアと言ふ。その意味は面白いことに「告発する、告訴する」といふ意味なんです。つまりどういふことかと言ふと「The dog is an animal」といふ文章ではどんなことを言つてゐるのかといふと、「The dog」といふ被告人がじつと横たはつてゐる。自分自身では何もしないで、じつと横たはつてゐる。それに対して、「お前は動物であるぞ」といふ告発がなされる。これが述語といふわけです。この「犬」といふものについて、「それは動物である」といふ告発がなされる。さうやって「The dog is an animal」といふ文章が出来上がると考へられてゐるのです。

かうした「告発」には、さまざまの種類があります。「これらは動物である」と言へばそのものの本質を語ることになる。「これはおとなしい」と言へば性質、「これは大きい」と言へば量の話になる——さういふさまざまな告発の仕方を分類したのが、「カテゴリー」といふわけなのです。これは「範疇」と訳しますが、もともとは単なる文法用語——「述語」——にすぎなかつたのです。

つまりギリシヤ人達が自分達がものを考へるといふことは、どういふことならうと反省してみた時にそこに見出したのが、主語・述語といふ構造だつたといふことなんです。アリストテレスが主語・述語といふ関係を見つけ出したのは、さつき申しました通り二千数

百年前なんです、それ以来、現代の言語学も相変わらず、この主語・述語といふ枠組が一番基本なものと使って使っているのです。皆さんはチョムスキーといふ二十世紀後半を代表する言語学者の名前をお聞きになったかも知れませんが、チョムスキーの生成文法といふものの基本の構造も、全くアリストテレスの見出した基本構造と変りがない主語・述語といふ、この構造を基本として、これにいろいろバラエティーをくつつけて文法理論を作り上げてゐるにすぎません。

では、日本語の場合はどうか、それが問題となります。明治になって、いろいろな学問が日本に輸入された時、(十九世紀にヨーロッパでも、非常に盛んになって来た)言語学も、日本に入つて来ます。そして、日本語をヨーロッパ流の言語学で裁断するといふのが、まづ最初の、日本の言語学が踏出した第一歩だったので。当然、そこには主語・述語といふ概念が導入されます。今、インドヨーロッパ語の構造を考へる時に使つた「This is a dog」「The dog is an animal」は、このままです。日本語に訳せません。「これは犬です」「犬は動物である」と、ちゃんと日本語に訳せる。そして、それをそのまま西洋語文法の枠組で考へると、「これは」が主語、「犬です」が述語、「犬は」が主語、「動物である」が述語といふことになる。ところが日本語の場合には、これで考へるといろいろ可笑しいことが出て来ます。

例へば、「象は鼻が長い」といふ言ひ方があります。さうすると、「象は」が主語で「鼻が」も主語で、述語は一つ「長い」しかないといふことになる。これはインドヨーロッパ語の文法の場合には決してあり得ないことなんです。つまり、どんな文章でも、兎に角、主語は一つだけ。例へば bread and butter、パンとバターで主語が二つと言ひたくなりますが、bread and butter の一くくりで一つの主語となる。名詞は沢山あつても主語は一つにくくられてゐなければならぬ。ところが、「象は鼻が」は、明らかに「象」と「鼻」とがそれぞれ独立した形をしてゐる。そんな風にして、一つの文章の中に主語が二つあつて、述語が一つだけしかない。これは、インドヨーロッパ語の文法では絶対により得ない。間違ひの文章でない限りあり得ないといふ形なんです。まづ日本人が気が付いたのは、それなんです。すでに明治中期に草野清民さんといふ文法学者が、初めてその問題を取り上げまして、日本語には二つの主語がある。これはどうしてくれるんだといふ大事な問題提起をしてゐます。ところが、そんな大事な問題提起があつたのにもかかはらず、日本語を主語・述語で区切るのは可笑しいぢやないかといふ声がなかなか上がって来なかつた。現在では、言語学者や国語学者などの専門家たちは西洋語文法をそのまま使ふのはやはり可笑しいぞと言つてゐるんですが、学校文法では今でも相変わらず、主語・述語といふものを使つてゐます。

これに一番はつきりと反旗を翻したのが、三上章さんといふ人です。三上さんはいろいろな本を書いてゐるんですが、「象は鼻が長いなど、日本語に主語・述語を持ち込むと可笑しいぞ」といふ、その文をそのままの題にして「象は鼻が長い」といふユニークな題の本も書いてゐます。ここに紹介してゐるのは、三上さんの『続現代語法序説』の「はじめに」といふ部分です。ここで何を言つてゐるかといふと、主語・述語などといふものを使つてゐる限り、日本文法といふものは、きちんと出来上がらないぞと言ふことなんです。はじめの三行を見て頂ければ、それだけで良いんですが、かう言つてゐます。

「日本文法の構文論はまことに幼稚である。幼稚の原因は一つではないが、中でも大きい原因は、土台がゆがんだままのことである。土台は、構文論のイの一条に『文は主語と述語から成る』という虚構が据えてあることである」

この三上さんといふ方は、生涯を主語廃止論の為に捧げてゐるといふ過激な主語否定論者なんです。これはいはゆるオピニオン問題ではなくて、誰がどう見ても、日本語を主語・述語といふ形で区切るのは無理がある。例へば、「犬は」とか「犬が」といふ「は」とか「が」と言ふのが主語の指標だと考へると、どんなことになるのか。例へば「犬は小屋の中にいました」。日本語では普通の言ひ方ですね。「犬はきちんと世話してくれた?」「はい、

犬は小屋の中に入れました。すんなり、意味の通る会話ですね。ところが、これを英語で訳すと、「I put the dog in the kennel」で、つまり「犬は」主語どころではなく、目的語を表すことになる。次の三つになると、このままインドヨーロッパ語に直訳するのは不可能です。でも、日本語としてはごく普通の文章ですよ。犬は世話がやけます」「犬はもうこりこりです」「犬はやはりジャーマンシエパードが一番です」。これはどう見ても主語・述語といふ文法形式ではない。では、どんな風に違ふのかを考へてみませう。日本語で「犬は」といふ時には、これはどういふことなのか。例へば「犬は」とそれだけを言ふと、そのまま日本語では疑問文になるのです。「犬は?」「うん、小屋に入れてあるよ」「犬は?」「うん、好きだよ」といろいろな答へが返つて来る。つまり、日本語の「は」といふのは、言はば一つの問ひを開く形になつてゐる訳です。これを三上さんは「提題」「題目」「題を掲げる」と、より一般的な言ひ方をしてゐるのですが、題を掲げて、そして、それについての問ひを開く。これが、日本語の「何々は」といふ形なんだと。そんな風に考へて見ますと。実に、どの文章もすんなりと意味が通ります。つまり「これは」は「これは何なの」と尋ねてゐるわけですね。すると、「犬です」といふ答へが返つて来る。「犬は」と犬について尋ねて見る。さうすると「動物です」といふ答へが返つて来る訳です。「犬は小屋の中に入れました」「犬は世話が

やけます」「犬はもうこりこりです」「犬はジャーマンシェパードが一番です」。すべて「犬は？」といふ問ひに応へるものであれば、何を喋ってもいい。これが日本語の「は」の機能なのです。

では、ついでに「犬が」といふ方はどうなのか。「犬が」に付いては、かういふ勝手なお喋りはできませんね。「犬がやはりジャーマンシェパードが一番だ」では何を言っているのか分からない。「犬が」と言ったときには「犬が走っている」「犬が吠えている」「犬が怖い」等々全部、ある一つの情景、一つの感情としてぱっと一目で見渡せる文章になってゐないといけない。それを語るのが「犬が」といふ言ひ方なのです。逆に「犬は走っている」と、ある情景を指して言ったとすると、これは日本語では少し可笑しな感じになるんですね。その目に見える情景をパツと表す言ひ方をすべきところで、ゆつたりと「犬は」と問ひを開くやうな言ひ方をしてゐる。そこがちぐはぐになつて来る。

さういふ風に考へて見ると、実は日本語の構文といふのは、単に主語・述語が合はないだけでなく、もつと根本的な所でインドヨーロッパ語と違つてゐる。つまり、最初にお話しした日本人が最初に中国語と出会つた時に、気がついた日本語の特色、つまり「てにをは」といふもの、これが我々の文法構造といふものをいたるところで支配してゐる。そして「てに

をは」といふものが、如何に機能してゐるか、その機能をつぶさに眺めるといふことが、我々にとつての文法論であると言へます。三上章さんが、主語廢止論を唱へたのは、もう二十世紀の終りのことなんですが、非常に回り道をして、百年以上も回り道をして、我々も一度、日本人が最初に日本語文法を発見したところにぐるっと戻ってきたと言つていい。さういふ状況ではないかといふ気がしてゐます。

「てにをは」についで

では、もう一度改めてこの「てにをは」といふものは、どういふものなのか。「てにをは」といふものを日本人が最初に発見した時、それをどういふものとして発見したのか、そこを振り返つて見たいと思ひます。

多分、皆さんは国語学で「手爾葉大概抄」といふ名前をお聞きになつたことがおありかも知れません。その扱ひ方を見ると何か立派な一冊の本のやうな、そんな扱ひ方をされてゐるのですが、レジメで皆様にご紹介したのが「手爾葉大概抄」の全文です。この、短い文の中に、われわれの文法論の一番の出発点がギュッと濃縮されて入つてゐると言つていいものな

のです。これは昔、藤原定家の作だと言はれてゐました。とにかく、昔は人々は言葉に関するいろいろな理論書といふと、全部、藤原定家に押し付けてしまつたやうな所があつて、これも、昔は藤原定家の作と言はれました。今の研究では恐らく、もう少し後に出来たものであらう、鎌倉の末期から室町の初めぐらゐ、西暦で言へば、十四世紀前半の頃出来上がったらしいといふことになつてゐます。いづれにしても、もう今から六百年以上前のそんな時代、つまり西洋では言語学などといふものが全く影も形もなかつた頃のものであります。これはどういふ目的を持つて書かれたものであるかといふと、まづ一番最初の一文の「和歌手爾波は唐土の置字なり」からもわかるやうに、実は、これは和歌を詠む時の歌論の一つとして書かれてゐるんです。この合宿でも、皆さんこれから和歌を詠むに当つて、「てにをは」をどう選ぶのかといふことは、大変苦心なさるところと思ひます。和歌の味はひは、「てにをは」の使ひ方一つで決まつてくる。さういふ意味でも「てにをは」といふものは、まづ歌論において注目されはじめたのです。

ところで、この「和歌手爾波は唐土の置字なり」とはどういふことかと申しますと、先ほども言つたやうに、漢字といふのは大変ぶつきらぼうで、木だつたら木、波だつたら波、モク、パと言ふだけで、木がどうした、木をどうしたのか、波はどうなつたのか、波がどうな

のか、その「てにをは」が全くないんですね。しかし、中には稀に、置き字と言はれて、例へば「耳」がその一例です。たぶん漢文の授業で、これはミミじゃないノミと読むのだと教へられた記憶をお持ちの方もあるかと思ひます。それが漢字の置き字といふものです。この解説はもっぱら漢文の立場から書かれてゐるので、漢文に翻訳すれば所謂、置き字のやうなものだと言つてゐるのです。けれども和歌にとつては、それどころではない、非常にいろいろな機能のある大事なものだといふ話しになつて行く訳です。「之を以て軽重の心を定む、音声之に因り相續す」。つまり、音声を繋げて行くのも、「てにをは」によつて繋げて行くのだ——「つなげる」機能として注目されてゐるわけですね。

そして一番有名なのは次の一文です。このところは時枝誠記先生の文法論でも問題にしてゐますが、「詞は寺社の如く、手爾葉は莊嚴の如し」。今朝お参りしたお社は何の飾りもない、素朴な造りですけれども、之に対して、お寺は非常にきらびやかに、いろいろ飾つてありますね。これが「莊嚴」です。つまり木だとか波だとか机だとか、さういふ、いはゆる単語は、寺の建築物、寺社そのものである。「てにをは」は、それに添へられた莊嚴、飾りのやうなものだ。さういふ言ひ方をしてゐます。つまり、事柄のストレートな意味でなくて、それが持つてゐる情緒といふものを、これは全部「てにをは」が受け持つてゐるんだ。さういふ意

味合ひになつて来る訳です。「莊嚴の手爾葉を以て寺社の尊卑を定む」。つまりその「てにをは」が上手にできてゐるかどうかで、歌の良し悪しも變つて来るのだといふことになる訳です。

「てにをは」は現代の文法論では助詞、助ける詞といふ、とてもマイナーな名前が付けられてゐますが、これだけを見ますと、「手爾葉大概抄」の扱ひも一寸、似たやうな感じがします。つまり決して文法論の柱だといふ、そんな言ひ方はしてゐない。寺社に対する莊嚴、飾りといふそんな扱ひをしてゐると思ひます。これを見る限りは、やっぱり歌論の論者といへども、漢字文化といふものを基本に考へてゐるのかなと、そんな印象をうけるんですが、次のところに進んで見ると、やはりもう少し「てにをは」の機能といふものに踏み込んで、それを深く考へてゐるらしいといふことが見えて来ます。こんな風に言つてゐます。「詞は實際有りといへども、之を新しく自在にするは手爾葉なり」。詞の数、すなはち単語の数といふのは有限です。「字引」などといふものが作られるのも、この詞、単語が有限だからです。もし、単語が無限だったら、字引なんていふのは不可能になつてしまふ訳です。ところが、有限な言葉を連ねて、無限の和歌が出来る。それは如何にして可能なのかといふと、「てにをは」が在るからである。「てにをは」といふのは、もちろん助詞だけでなく、語尾変化

とか、接尾語とか、ここに全部含まれてゐるんですが、さういふものが自由自在に使はれることによつて、無限の心を表す事が出来る。「無尽の心是において顕然たり」といふ、さういふ言ひ方をしてゐます。

つまり、この「手爾葉大概抄」では既に、日本語の「てにをは」といふものが、われわれが無限に言葉を繰り出す時の、その主役だといふことに既に気が付いてゐると言つてもいいのかもしれない。この解説を付けた人は、まだまだ「手爾葉大概抄」の論者は精密な文法学に至つてゐないといふ否定的な捉へ方をしてゐますけれど、しかし現代の西洋文法からやうやく脱して、本来の日本語文法の在り方を掴まうとしてゐる立場から見ると、実はこの「手爾葉大概抄」といふのは、少なくとも二十世紀の前半の国語学者よりは、よほど本質的などころを捉へてゐると言つて良いのではないかといふ気がします。

国学の柱

改めて考へて見ますと、かういふ文法が大事だといふことに、日本で初めて本格的に（その思想的な意味も含めて）注目したのは、やはり国学者だと言つて良いと思ひます。国学の伝

統といふのは、片方では日本の歴史をしっかりと学ぶこと、つまり本居宣長の仕事で言へば『古事記伝』といふ形で、日本の神話の体系をしっかりと知ること、そして、そこを源泉としてゐる日本の歴史を正しく捉へることであつて、それが国学の一つの大事な柱となつてゐます。しかし、もう一つ忘れてはならない大事な国学の柱は国語学なんですね。ご承知の通り、本居宣長が国語学の非常にしっかりとした基本を作つてゐます。資料にあります「言の玉の緒」といふのは、これはまさに、本居宣長が「てにをは」の大切さ、「てにをは」といふのは助詞、語尾変化、その全部を含めた総称なんです、それを「言の玉の緒」と題して、一冊の本に纏めてゐる。その序に書かれてゐるのがこの言葉です。ある意味で「手爾葉大概抄」をそのまま引き継いでゐると言つていいと思ひます。

「此ふみの名よ。玉の緒としもつけけるよしは。人の身のよそひにも。萬の物のかざりにも。あがりし世には。高きいやしきほどほどに。みな玉をなむものして。いみじきたからのおやとはしければ。何事のうへにも。みじかし長し。たゆみだるなどいはむとてのたづきにも。まづそれがを引かけ。うつせみのよの命をさへなん。たとへていひける。さるはいとかぎりなくめでたき物のかざりならむにも。ぬきつらねたらんさまにしたがひ

てなむ。いま一きはの光もそはりぬべく。またはえなくきえても見えぬべければ。此緒こそげにいとなのめなるまじき物には有けれ。ましてすぢなくみだれもし。絶もしなむには。いかにめでたく共。そのかざりいたづらならじやは。ことの葉の玉のよそひはた。此ぬきつらぬるてにをはからなん。ともかくもあ(シ)めるわざなれば。又よそへてなむ。」

と流暢な序を語つてゐます。いま、お聞きになつてお分りの通り、ほとんど「手爾葉大概抄」と同じやうに「てにをは」といふものを扱つてゐるのが見えるかと思ひます。

つまり「手爾葉大概抄」では寺社の莊嚴といふ例へを引いてゐたんですが、ここでは裝飾の玉にたとへられてゐます。それが美しく連ねられてゐれば、全体綺麗な飾りになるけれども、ぶつぶつ途切れてゐたり、間が跳んでゐたりしたら、それでは到底裝飾にはならない。きれいに繋ぐ、此れが大事だ、こんな言ひ方をしてゐます。その限りでは「てにをは」といふのは、専らその言葉の美しさに係はり、それから言葉の情緒を表すのに大切なんだ、さういふ扱ひ方は似てゐるやうに見えます。ただし、ここで大事な所は、この辺りだと思ふのですが、「この葉の玉のよそひはた。此ぬきつらぬるてにをはなからん」、つまり「てにをはが玉をぬきつらねてゐる」といふ、ここが非常に大事な所だと思ふんですね。

先ほども、インドヨーロッパ語と日本語の相違のことをお話しましたが、もう一つ際立った相違といふのは、単に構造の違いだけでなく、かういふ所にもあるのではないかと思ひます。つまり西洋語の場合には、この主語・述語関係といふのは、いつも一望の下に見渡すんですね。「This is a dog」といふこの一つの「見渡されたもの」を主語・述語といふ関係で構築してゐる。ところが、日本語の「てにをは」といふのは、一望の下に見渡せるのではなくて、それがどんな風に連ねられてゐるか、何と言ひますか、流れに沿って、自らも流れを下りながらその形を見て行く。あるいは、細い小道を通りながらその道筋を自分で定め行く。そんな形になつてゐます。つまり一口に言えば「流れに沿って」といふことが、日本語の文法の特徴だと言へるかと思ひます。

しかし、考へてみると、インドヨーロッパ語であらうが、何であらうが、語られる言葉といふのは（いま私が喋つてゐる言葉もさうなんですが）、時間の上に載せて、流れとしてあるんですね。私がいま言つてゐることを、一時に瞬間的に言つてしまつたら全く理解不可能な、タイプライターを一箇所に重ねて打つたやうな、そんな音になつてしまふ。音が一つづつ時間を経て打ち出されてゐるから、皆さんに言葉として通じるんですね。日本語の「てにをは」の文法といふのは、正にこの語つてゐる時間を通して、一つ一つ、この時を渡つて行く形、

そのままが実は日本語文法の形となつてゐる。この宣長の「言の玉の緒」といふ、この比喻は非常にさういふ意味では適切ではないかといふ氣がします。

かういふ風に見て来ますと、日本語文法といふものを考へるといふことは、これは実際に我々がどういふ風にしてものを考へてゐるのか、我々自身で意識してゐないものの考へ方の、その形をもう一度自分で振返つて見るといふ意味を持つことになる訳です。丁度、あのギリシヤのアリストテレスが自分の言語を振返へることで、自分達の思考の形といふものを見極めた——これが、いはゆるロジック（ロゴスを学ぶ論理学）といふ学問になつたやうに、我々自身にとつても、ほんとうに日本語で考へるといふことは、実は日本語のこの形を自ら見極めるといふ、このことを抜きにしてはできないわけです。本居宣長が「大和魂を固める」と言ふのを、「排外的なシヨヴィニスム」などと言つて非難したりする人も居るんですが、それは全く見当はずれの非難と言へます。実は本当に大事な中身としては、この日本語の形といふものを、自らきちんと見極める。此れがもう一つの大事な国学の柱だと思ふのです。

実際、幕末に至るまで、国学の歴史といふものは、大変な国語学の成果を生み出した訳です。その成果たるや、丁度、当時、ヨーロッパで盛んになり始めた言語学と比べても、全く遜色のないもので、それはすでに非常に精密な学問として成り立つてゐたのです。これが明

治になって、言語学が入ってきた時に、ある意味ですっかり五六百年前に戻ってしまった。さらには、「手爾葉大概抄」以前に戻ってしまった。「てにをは」といふのは単なる「助詞」であるといふ扱ひを受けて、言語学の教科書の中でも、一番隅に扱はれる。さういふ扱ひになってゐる。しかし、改めてもう一度、日本語で我々ほどのやうに思考してゐるのかといふ基本から考へるとすれば、実は我々が「てにをは」をどう使ひこなしてゐるのか、そして、そこにどんな意味があるのか、このことが実は非常に大事な研究になるのです。

助詞「と」について

今日はそのほんの一例として、なかでももっとも地味な「と」といふ助詞を取り上げて考へて見たいと思ひます。「は」とか「が」といふのはこれは非常に大事な助詞であることは確かです。「は」とか「が」といふキィ・ワードで検索をしたら、おそらく莫大な数の論文や本が出てくるでせう。それに比べると、「と」といふ助詞は、これはもう地味で国語学の論文でもあんまり「と」についての研究は見かけません。例へば今日の朝食でいろいろ出ましたよね。「お豆腐と卵焼きと鮭とおみおつけとお漬物」。かうやって数へて行く。「と……

と……と」と繋いで行く。「と」といふ意味は何ですかと、例へば留学生に聞かれ簡単に、「英語で言へば「and」に当たるんだよ」とそんな説明で済んでしまふ。しかし、改めて考へて見ると、どうして「と」といふ助詞で、ものが繋げるのか。これはどんな繋ぎ方なのか？——さう考へて見ると、これは案外「あれッ」、といふ事になります。ただ繋ぐといふことだったら、例へば「の」といふ、もう一つ、とても大事な助詞がありますね。「今朝の朝ご飯」「私の朝ご飯」。「の」といふもので私とご飯、今朝と朝ご飯をむすんでゐる。「の」が繋ぐのと「と」が繋ぐのとどのやうに違ふか。留学生に聞かれたら、どう答へていいのか。確かに繋ぎ方が違います。例へばこんな時、言語学者は簡単に分類してしまふわけです。「と」は並列の「と」であつて、「の」は所有を表すと。でも、「今朝の朝ご飯」——、これを所有と説明したのでは可笑しいですね。もう少し丁寧に説明しようとすれば、「の」で繋ぐ時は「の」の後に来る「朝ご飯」といふのが主役になつてデンとあるわけです。そこに、「今朝の」とか「私の」といふ飾るものを幾らでも、くっ付けて行くことが出来る。「私の今朝の朝ご飯」といふそんな風な形で、「の」といふのは決して対等に結ぶのではなくて、主役が一つあつて、そこにいろんな飾りを付けるやうな形で言葉を繋いで行く。それに対して、「卵焼きとお豆腐」と言ふと、どっちが偉いでもない、どっちが主役といふでもない、どち

らでも同じ資格で平等に「卵とお豆腐と鮭」と並べて行くわけです。

かういふ並び方と、一寸似てゐるものがあります。例へば「おせんにキャラメル」。今ではあまり聞きませんが、昔はありましたね。「おせんにキャラメル、えーおせんにキャラメルは如何」——これは丁度「と」に似てゐますよね。「おせんとキャラメル」と言ふのと、ほとんど変らない。しかし遂に「私は今朝、卵焼きに鮭を食べました」と。「おせんにキャラメルが好きです」とも言はない。何か「に」といふ時には、丁度「梅に鶯」といふやうに、非常に動きがある。物売りが動きを強調して「おせんにキャラメル」と言つてゐる時には、非常にピッタリする。「おせんとキャラメル」と言はれたのではあまり手が伸びない。「おせんにキャラメル」といふと、何かふつと手が伸びる。そんな微妙な違ひが有ります。「と」といふのはごく地味にそこにボンと置く。そこに置くことで並列併置することが出来るわけです。

置いておかないと並べることが出来ない。いろいろなものが流動してゐて、するするものが逃れて行つてしまふのでは「並べる」ことができない。まづ列を作るには、そこに一人一人がボンと立つことが大事なんです。そのボンと立たせる、それを果すのが「と」である。そんな風に言へるかもしれません。さういふ意味では非常に地味な働きと言へます。これだ

けでは、別に我々の思想とも何も関係がなささうな感じがします。

ところが、この「と」といふのは、こんな使はれ方があります。「あなたの意見は正しいと思ひます」。思つたり、考へたりすること——これがいつでも「と」で括られる「正しいと思ふ」と——。これを「正しい、思ひます」と言ふと、これは何か、日本語を習得してゐない人の話といふ感じがします。意味は通じるけれども、日本語らしくない。きちんと日本語として語らうと思ふと「と」が要る。「私は正しいと思ひます」。実は我々が思つたり考へたりするといふのは、どういふことかといふと、流動してゐるままでは考へにならないんですね。その流動してゐるものを「と」といふ形で掴まへる。その掴まへる形を、それとして表現するのが「と」といふことになる。さう考へて見ると、地味な「と」といふ助詞の働きといふのは大変重要なものと言へるわけです。我々は無意識のうちに「と」を使って考へてゐるんですね。「と」のお蔭で、いろいろなことを客観的に考へられてゐる。たしかに、誰も、「と」のお蔭で自分はそのものが考へられてゐるなんて少しも考へない。もう無意識の内に「と」を使ひちらしてゐる。ところが、実は、すっかり縁の下の力持ちで「と」が支へてくれてゐるのです。

これは、もちろん「と」だけではありません。「てにをは」の全てが、さまざまに、その

ひとつひとつが個性的な機能を持って、われわれの思考全体を支へてくれてゐる。さういふ無意識の内に我々の考へを支へてゐる言葉の群れが我々の足元には、満ち満ちてゐるのです。

をはりに

かう振返つて見ると、我々にとつての日本語は、ほとんど未知の大陸と言つていいくらのいろんな不思議に満ちた世界であつて、しかもその不思議に満ちた世界は、全て我々の内に全部丸ごとある。さつき話したやうに、一寸をかしな使ひ方をすると、すぐに我々自身わかるんですね。このやうに、我々が無意識の内に蓄へてゐる無限の日本語の知識に基づいて間違ひが分るわけです。かういふ風に我々は言葉の海の中を泳ぎながら、それを我が物として、その内を泳いでゐる中で、歌を作り、論文を書き、ものを考へてゐるのです。此れはもう全部ひと繋がりのことなんですね。我々の思想の源泉といふのは、正に我々が日常使つてゐる言葉そのもの内にあるわけです。そのことに気が付いて見ると、改めてもう一度、日本文化の底力といふものについての自信が湧いて来るのではないかといふ気が致します。

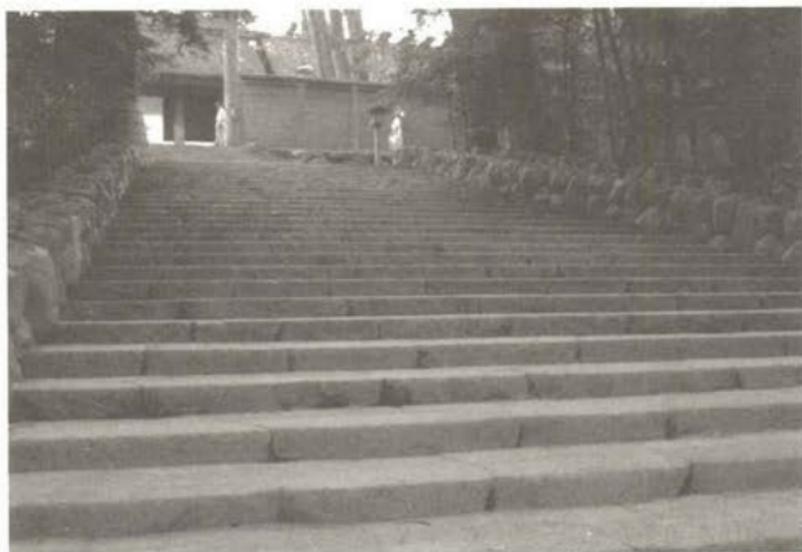
講義

日本の国柄

—「憲法第一章の淵源」を考へる—

拓殖大学日本文化研究所客員教授

山内健生



一 所謂「靖国問題」

—世界どこの二ヶ国關係に存在しない異常な事態—

二 歴史の連続性を考慮しない憲法論議は無意味だ

三 国家安定の要諦「統合」を考へる

—アメリカ合衆国を例に—

四 日本の国柄

—「党派を超えて御即位を仰いだ！」—

五 明治の立憲制は生きてゐる！

—そして、明治は「古代」につながつてゐる—

六 「公議を尽くし国民と喜び悲しみを共にしたい」

—幕府政治との違ひ—

七 御製に仰ぐ「一貫する大御心」

—憲法第一章の淵源—

八 昭和天皇と今上天皇

今日は「日本の国柄」、即ち「わが国の歴史的特質、国の個性」について、皆さんと考へて見たいといふことでここに立ちましたが、直接その話に入る前に、どうしてもお話しいたいことがありますので、その点から始めたいと思ひます。

一 所謂「靖国問題」

— 世界どこの二ヶ国関係に存在しない異常な事態 —

① 侮るべからず！ 「第四権力」の影響力

例へば「政冷経熱」といふ言葉があります。この文字に触れない日はないと思はれるほど、連日の紙面で目にする言葉だと思ひますが、言ふまでもなく現在の日中関係が経済交流は順調であるのに政治面では首脳相互訪問が途絶えたままの冷たい関係になつてゐるといふことを意味してゐます。

平成十三年十月、小泉純一郎首相が北京を訪問して江沢民国家主席（当時）と会談して以来四年間近く、国際会議の折に江主席や後任の胡錦濤主席とは何度か短時間の会談をしてゐ

ますが、中国首相を含め首脳の来日はなく、こちらからの訪中もないわけですから、確かに政冷経熱といふことになるのでせう。その他、アジア・サッカー決勝戦（平成十六年八月）の際の君が代吹奏に対する度はづれたブーイングや今年（平成十七年）四月の反日デモ騒ぎは耳目に新しいところでは、「表現の自由」なき国のことですから、当局が内々に承諾黙認してゐる動きと見ていいと思ひます。

中共（中国共産党）政権が、「反日」によつて国内の引き締めをはかつてゐることは識者の指摘するところで（例へば宮崎正弘氏によれば、一九九三年頃から江政権は中国全土に二百三箇所の、史実と無関係の反日歴史記念館を建て、さらに現在も七箇所を増設してゐる——『日本文化』第二十二号）、先々さらに要注意ですが、わが国の大新聞が日中関係の現状を報道し論評する際に（テレビもさうですが）、必ずと言つていくらゐるに繰り返すのは「小泉首相の靖国神社参拝によつて、ぎくしゃくしてゐる日中関係は……（或いは「日韓関係は……）」云々といふ言ひ方です。首相の参拝が関係悪化の原因だと言はんばかりです。例へば北京での反日デモが暴徒化して日本大使館の窓ガラスが割られた後でも朝日新聞の社説タイトルは「八方ふさがりの日本外交 小泉首相の責任は重い」といふものでした（四月十二日付）。その結果でせうか、首相の靖国神社参拝は「やめた方がよい」と答へる人が「続けた方がよい」の三十六%を上回つて五十二



%になってしまひました！ かうした数字に一喜一憂することはどうかとも思ふのですが、やはりある傾向を示すものとして気になるところです。

右は朝日新聞の全国世論調査の結果（六月二十八日付朝刊）です。これまで「周辺諸国への配慮」を理由に最も強く首相の参拝に反対してきた朝日としては反対派が五十%を超えてホツとしたことでせう。

ここで特に指摘しておきたいことは、マス・メディアのもつ大きな影響力のことです。「第四権力」といふ言ひ方をご存知でせう。立法・行政・司法の三権に勝るとも劣らない大きな力をマス・メディアは持つてゐるといふことを指す言葉です。さうしたメディアが、戦死者の慰霊といふ国家独立の根本に拘はる聖域に当然のことのやうに外国政府が容喙する「世界のどこの二ヶ国関係にも存在しない異常な事

態」に対して、先方の言ひ分に理ありと言はんばかりに「配慮」の必要性を説きつづける姿は異様ではないでせうか。毎日新聞も「日中間の首脳相互訪問は、小泉首相の靖国神社参拝が原因で三年半も途絶えている…。靖国参拝は小泉首相の個人的信条から発した問題なのでから、首相が智恵を出すしかない」（五月二十四日付社説「これ以上冷やしてはならない」と述べてゐます。似たやうな言ひ方は産経新聞以外の他紙の論評にも日常的に目にする事ができます（読売新聞も六月四日付の「国立追悼施設の建設を急げ」と題する社説で「A級戦犯」が合祀されてゐる靖国神社参拝をすべきでない」と述べてゐます）。

蛇足までに述べますが、実は昭和六十年まではこの件で国外から何か言ってくるといふことはなかつたのです。よく「A級戦犯」といふことが言はれてゐますが、それは法律概念ではなく軍事的力関係の強弱から生み出された政治概念に過ぎません。所謂東京裁判は我々がふだん考へる裁判ではないのです（罪刑法定主義への背反といふ「法の支配」の無視、検察官と裁判官と死刑執行人が戦勝国といふ「裁判」に偽装されたリンチ、共同謀議といふ「幻想的予断」による復讐劇、等々）。ですから「処刑」された「A・B・C」級の方々は、国会での法律改正によつて弔慰金や年金など戦歿者と同じ扱ひにしてゐるのです。この延長上に、昭和五十三年、「A級戦犯」も靖国神社に合祀されましたが、その当時、国外からは何も言はれませんでした。

国内事項ですから当然です。

ところが、昭和六十年八月の中曽根康弘首相の参拝を機に、対日方針を転換して中韓両国はともに干渉的申し入れをしてくるやうになったのです。ところが圧倒的多数のメディアは無責任にも、それを拡声器的に垂れ流すのみでした。今もよく覚えてゐますが、「A級戦犯の合祀はどうかならないか」といふのが当時の読売新聞の社説のタイトルでした。そのため、中曽根首相は翌年の参拝を見送り、それが悪しき先例となつて（橋本龍太郎首相が自らの誕生日である平成八年七月二十九日に参拝したのを除き）総理の参拝が十五年余り手控へられてしまつたのです。平成十三年四月の自民党総裁選挙で靖国神社参拝を公言して当選した小泉首相でしたが、その参拝についても、当初は八割近い支持を得てゐたにも拘はらず、いまや「政冷の原因」をなつてゐると過半の国民が思ひ込むまでになつてしまひました。野党ばかりか与党の有力政治家までが、そして「経熱」の差し障りになつては困るとばかりに一部財界人までもが、新聞論調に唆そそのかされたのか、首相の参拝にクレームをつけてゐます。国益を守るべき立場の外務省はずうつとフラフラしたままです。

かうした日本国内の動きを片目に見て中韓両国はさらに対日攻勢に拍車をかけてゐるといふのが現在の日中・日韓関係の真相です。

②現代日本の病理 — マス・メデИАによる「毒化作用」 —

かつて竹本忠雄先生（筑波大学名誉教授）は、マス・メデИАによるイントクシケーション（intoxication＝酔はせること、酩酊状態、陶酔、中毒）といふことを指摘されました。前述の朝日の世論調査の結果や与野党政治家の言動を見ますと、メデИАに「酔はされて」事態を見る目が曇らされてゐる酩酊ぶりが浮かび上がって参ります。日本を警戒しその立ち直りを妨げやうと手練手管を弄するのは彼の^か国の全くの自由なのですが、その政略に同調する新聞論調や、政財界人の声は到底理解できません。外国政府が自らの国益から自由に発言してゐるやうに、わが首相が国内で何をしよう^と何処に行かう^と全くこちらの自由なのです。戦歿者への追悼行為に国外からの圧力が影を落とすようでは独立した主権国家とは言へません。

「理解が得られるやうに誠意を以て説明せよ」と説く向きもありますが、無駄とは言ひませんが、アジアでの覇権確立を狙って日本を叩^{たた}かうとする戦略から出てゐることですから、どんなに説明しても「日本の立場を理解する」とは絶対的に言はないでせう。否、説明しようとするほど言はなくなるでせう。仮に理解したとしても「判らない、理解できない」

と言ひ続けるはずです。理解を求めて近づくことはむしろ逆効果です。その都度、同意できない、取り止めてほしいと言はれるだけです。わが国としては、その度に内政干渉的発言を繰り返させることなるわけですから決して恠巧なやり方ではありません。

ことは戦歿者にどう向き合ふかといふ国家存立の根本義に関係することで、もともと歴史認識は外交のテーマにはなり得ない事柄ですから、国際社会の常識に従つて肅々と参拝を続けるのみです。そして、折に触れて国交開始の原点（日韓基本条約、日中平和友好条約）に立ち戻れば済むことなのですが、朝日の世論調査でも「周辺国への配慮の必要」如何を質問して参拝を「やめた方がよい」と答へた「五十二％」の内の「七十二％」が配慮の必要を回答したと強調してゐます（全体では三十七％）。竹本先生は *innoxiation* を「毒化作用」と表現されました。かれこれ思ひ巡らすと、無責任メディアの垂れ流す「毒」がかなりの程度まで国内に広まってゐるとしか言ひ様がありません。

何か言つてきたとしても新聞がベタ記事で報じ、社説で日本の国内事項に口出ししない方がいい！ と、国際関係の常識に沿つて論評すれば収まるはずなのですが、その逆で「周辺国に配慮せよ、耳を傾けよ」と大騒ぎをしてゐるのですから内政干渉は当分続くでせう。その意味でも、所謂「靖国問題」は日本の問題なのです。

仇敵を探し出し、もし死んでゐたら墓を暴き、死屍を鞭打ち、焼いて灰にして飲み込む。また仇敵の肉を喰ひ皮をシーツにしてその上に寝る「食肉寝皮」の行為を『隋書』『唐書』などの正史の中で「孝行」として称へる大陸の文化的風土は、毛沢東による文化大革命（一九六六年から十年ほど中国全土を混乱に陥れた政治闘争）の時は校長の目玉をくりぬいて喰ふといふ人肉宴会を生み出してゐます（鄭義著、黄文雄訳「食人宴席」ほか）。

それに比べて、たとへ戦つた敵であらうとも事後は、敵も味方も同じく弔はうしてきたのがわが武士道文化（大阪府千早赤阪村の寄手塚身方塚、神奈川県藤沢市遊行寺の敵味方供養塔、高野山の敵味方供養碑など）ですから、天地ほどの開きがあります。日支事変による両軍戦歿将兵の冥福を祈念するべく松井石根大将が凱旋帰国後建立した昭和十五年開眼の興亜観音（熱海市）は、かうした武士道精神の線上に位置するものでした。

「周辺国の理解が得られないのだから取り止めた方がいい」などと軽々しく動くのではなく、この際はじっくりと腰を据ゑて彼我の間に横たはる文化の違いを先づは認識することが大切なのではないでせうか。

イタリア在住の作家・塩野七生ななみ女史（大長編『ローマ人の物語』—新潮社刊—の著者）が、文藝春秋八月号掲載の「帰国中に考えたこと」と題する一文を次の一節で締めくくつてゐます。

よくよく考へて見るべきでせう。

「最後に一言。もしも小泉首相が今年も靖国参拝を決行すれば、日本と中国と韓国ではニュースになるだろう。しかし、止めれば、世界中でニュースになるだろう。」

二 歴史の連続性を考慮しない憲法論議は無意味だ

なぜ首相の靖国神社参拝を例にマス・メディアの現状を批判したかと言ひますと、何らの定見も識見もなく、それでゐながら連日、紙爆弾を落としまくつてゐる「第四権力」の大きな影響力に気づいてほしいと思つたからです。知らず知らずの中にその虜とりになつてゐるかも知れないからです。名前を出すのは差し控へますが、責任ある立場の一部政財界人の発言を耳にすると他人事ではありません。そのマス・メディアは国柄、即ち「国家の基本的性格」を考へようとする際にも、またある種の先入観を広く国民に与へて伸び伸びとした思考の働きの枠をはめてゐるやうに思はれてなりません。

例へば「平和憲法」といふ四文字を見て何を連想されますか。それがそのまま日本国憲法

を指してゐることに、誰もが疑念を抱かないのではないでせうか。これはもともと旧社会党（社民党）や共産党が掲げてゐた「憲法を守れ！」といふことを言はんがための極めて一面的な政治スローガンだったはずなのですが、マス・メディアが長年にわたつてこれまた肯定的に垂れ流した結果、いまや自民党を含む全政党が好ましいこととして多用してゐます。国会での大臣答弁にも出てくることもあります。かうした平和憲法賛歌は、いまや高校教科書の記述にまで及んでゐて、例へば「：第九条で戦争の放棄、戦力の不保持、交戦権の否認を定めており、平和憲法とよばれている」（第一学習社刊）などと記載されてゐます（もともと日本国憲法は米國を主体とする占領軍当局が起草したものであることは何人も認めざるを得ない事実です。ただ「内容は素晴らしい」などと言ふ人がかなりをります。外国製の憲法を拝跪はいかすることは本当は屈辱的なことなのです。その第九条はポツダム宣言に発する「武装解除」状態の固定化制度化を狙つたものであると言つたら驚かれるかも知れません。しかし、事實は旧敵國日本への占領統治の一環として「押し付けた」ものでした。そして「非武装」を謳ふことで、日本國民の自立自存意欲に楔くわを打ち込まうとしたものなのですが、その考察は他の機会に譲ります）。

なぜ「平和憲法」なる言ひ方が問題なのかと言ひますと、「平和」は何人にとつても一応は反対できないことですから、平和と憲法が結びつけられ、平和憲法といふ言葉が行き渡る

ことによつて、無意識のうちに「平和憲法」を肯定し、その時代を好ましき善き時代であるとして「全肯定」し、平和憲法以前の時代を戦争の悪しき時代として「全否定」するといふ観念の見方にとらはれてしまふからです。これでは国家の歴史的連続性といふ憲法を考へる際に不可欠な視点が抜け落ちてしまひます。

最近やうやく政党間でも憲法改正論議が活澆になつてきたことは歓迎すべきことではありませんが、しかしながら当然のことのやうに平和憲法以前を顧みようとはしません。主権喪失の被占領期に占領軍が強要して、帝国憲法の改正といふ体裁で登場したのが「日本国憲法」ですから、憲法改正論議のベースに帝国憲法（平和憲法以前）を据ゑるべきは理の必然のほうですが、さうはならないのです。帝国憲法を憲法改正の起点にせよ！と言つたら、何を今さら時代錯誤なことを主張するのかと驚かれる人の方が多いのではないでせうか。それだけ「平和憲法」以前を否定する観念が行き渡つてしまつたのです。

憲法改正に一番積極的なはずの自民党の党内論議でさへ、日本国憲法の「国民主権、基本的人権、平和主義」の基本理念を継承するとして、「日本国憲法」の条文の手直しから出発してゐます。平和憲法そのものへの疑念表明を避けてゐます。平和憲法以前（帝国憲法）を僅かでも肯定的に捉へることはタブーとなつてゐます。これが政界を覆ふ平和憲法賛美から導

き出されてくる憲法論議の枠組みなのです。

憲法は国家の基本法ですから、歴史否定の革命国家でもない限りは、まづはその国の歴史的特質を法典化するものです。「国民の権利と義務」は、さうした特質をどう護持して行くかといふところから生まれてくる概念です。ですから、戦争とか平和とかといふ次元を超えて、或いは平時あらうと戦時であらうと変はることなく貫くものを見定めることから憲法論議がスタートされなければならないのに、初めから思考に枠が嵌められてゐることになりま

す。伸び伸びと論議する中にも歴史の連続性に顧慮することが憲法の場合は何より大切なのですが、さうはなつてはをりません。言ふならば憲法改正を口にすることはタブーではありませんが、論議の内容は依然として大きな制約下にあるといふことです。

三 国家安定の要諦「統合」を考へる

—アメリカ合衆国を例に—

前述のやうに成り立ちからして問題を内包してゐる現憲法ですが、それはひとまづ措くとして話をすすめます。

ご承知の通り、憲法第一章第一条には「天皇は、日本国の象徴であり、国民統合の象徴であつて…」云々と記されてゐます。「統合」とはどういふことを言ふのでせう。小学校中学校高校と三度繰り返されてゐる憲法学習では、国民主権・基本的人権の尊重・平和主義の「三つの基本理念」には時間を割きますが、「天皇を国民統合の象徴としてゐる」ことの意味合ひについてどれだけ時間が割かれてゐるでせうか。統合とは「ひとつに統^トべ合はせること」と辞典には出てゐます。先づは統合について考へて見ませう。

昨年（平成十六年）秋の米国大統領選挙で、開票結果を踏まへて発せられた両候補のスピーチが「統合」を考へる際に恰好の材料を提供してくれます（産経新聞から引用）。

（ブッシュ大統領の勝利宣言から）

米国はその意思を表明した。国民が寄せた信頼と信任を、私は厳粛に受け止めて
いる。…

目標達成には米国民の広範な支持が必要だ。だから、私の競争相手に投票した人々に語りかけた。新しい任期は国全体が心を通わせるための新たな機会だ。米国は一つであり、一つの憲法と一つの未来を共有している。われわれが手を携えてともに努力すれば、米国

の偉大さに限りはない。

(ケリー候補の敗北宣言から)

ブッシュ大統領と話して、彼とローラ夫人の勝利を祝福した。われわれは国の分裂の危機と団結の必要性を話し合った。癒しが始まることを望んでいる。：

米国の選挙に敗者はいない。後悔や非難、怒りや恨みを捨てて努力しなければならない。団結と一層の思いやりが必要だ。ブッシュ大統領にはそうした価値観をさらに推進してほしい。私は党派を超えて協力すると約束した。：

米国の大統領選では、敗北を認めた方が電話で当選者に「おめでたう」と伝えることが慣はしださうで、その後それぞれ宣言を発表することです。両者のスピーチに「統合」の意味と大切さが雄弁に語られてゐます。アメリカ合衆国といふ人工国家の国柄も巧まらずしてそこに示されてゐます。

稀にみる接戦といはれ、そのため両陣営とも相手候補を非難するネガティブ・キャンペーンを大々的に展開したため選挙後、その亀裂は埋められるのだらうかと気遣ふ声があったほ

どでした。しかし、終つて見れば「米国は一つだ」「党派を超えて協力する」と、互ひに国家の統一と国民の団結の必要性を確認し合つてゐます。もしこのことがなされなければ選挙戦での政見政策をめぐる対立はそのまま国家の分裂につながりかねません。いかに厳しく相手を論難したとしても、事後、口に出して「一つの国家であること」を確かめ合ふところに、統合されたアメリカ合衆国の姿を現実に見ることができません。

もう一度、両者の宣言に眼を通して見てください。ブッシュ（共和党）、ケリー（民主党）の両候補には政党政派を超えて存在する「アメリカ合衆国」の姿が見えてゐたのではないでせうか。大袈裟に聞こえるかも知れませんが、それは「心の眼」でしか見えないものです。「米国は一つであり、一つの憲法と一つの未来を共有している」と大統領は言ひ、ケリー氏は「われわれは国の分裂の危機と団結の必要性を話し合つた」と言つてゐます。両氏の心眼には間違ひなく党派の相違を超越した「アメリカ合衆国」が見えてゐた！ どんなに激しく現政権を非難攻撃したとしても、それは政見政策であつて、「アメリカ合衆国」そのものではない。むしろ「アメリカ合衆国」を大切に思ふからこそ、かうすべきではないのか！ と相手候補に強く迫ることになるのです。

このことは何もブッシュ、ケリー両氏に限つたことではなく、合衆国民一般が広く弁へ

てゐる公民的教養のはずです。ですから前述のやうな宣言が国民に向かつて発せられるわけです。激しい論戦を繰り返しながらも、あらためて「統合」を確認して国家の統一を保持持統していく。団結の必要性を折々に公に言葉にして確かめる。これがアメリカ合衆国の個性であり「国柄」と言つていいでせう。統合の大切さが念頭にあるから、むしろ心おきなく論争ができるわけです。

建国以来二百三十年といふ若い国であり、世界各地からの移民を受け入れることで成り立ってきた米国は現在でも年間数十万人の移民を入れてゐます。例へば髪・瞳・肌の色、言語、習慣、文化など様々に違ふ多様な国民を抱へてゐますから、小学校で始業前に星条旗に向かつて行はれる「忠誠の誓ひ」から始まって、いろんな場面で「一つの米国」を言葉に出して確認してゐるのです。

四 日本为国柄

——「党派を超えて御即位を仰いだ!」——

わが国の場合、米国のやうに「日本は一つだ」「日本の未来は一つだ」などと公的な場で

口にすることはふつう考へられませんが、言葉にするまでもなく、長い歴史が「一つの日本」を生み出してゐますから、敢へて言ふこともないからです。それどころか、逆に国家の統合を形象してゐる日の丸・君が代に「異」を唱へる教員集団が少数ながら存在しますが、さうした動きを意味ありげに過大にメディアは取り上げます。公立学校の卒業式での国旗掲揚、国歌斉唱に反対する一部教員の動きです。国旗国歌の指導は学習指導要領に明記されてゐますから、指導要領の見直しを対外的に求めるならばまだしもフェアでせうが、それをしないで児童生徒を巻き添へにしています。国家の統合が当り前のこととなつてゐるわが国ならではの「甘え」としか言ひやうがありません。かうしたこの国にも見られない公立学校を舞台にした極めて意図的政治的活動を「思想信条の自由」の名のもとで好意的に採り上げるのも、わがマス・メディアの歪んだ習性です（日の丸・君が代が国旗国歌として扱はれるやうになるのは幕末から明治初期の開国期ですが、その源流はどちらも千年以上遡ります）。

なぜ統合が大切かと言へば、統合が確保されない逆の場合を想像して見れば容易にお分りです。「言論の自由」も「公正な選挙」も「三権の分立」も「財産権の保障」も「治安の確保」も、統合が実現して初めてその実質が保証されるからです。日々、われわれが枕を高くして眠れるのは統合が実現してゐるからです。米国が一番分りやすい例でしたが、そのた

め世界各国が統合の確保にどれだけエネルギーを注いでゐるかを日の丸・君が代を軽侮することを善しとしてゐる人達は一度考へてみる必要があります。グローバル化の時代に生きるとはさうことをいふのです。

ところで、米国のやうではなくとも、わが国でも統合が公式に確かめられることがあります。

天皇陛下におかせられては 菊かおるきょうのよき日に 即位の礼をあげさせられますことは 国民ひとしく慶賀にたえぬところであります

ここに衆議院は 国民を代表して謹んで慶祝の誠を表します

これは今上天皇の「即位の礼」(平成二年十一月十二日)に際して、衆議院が平成二年十一月六日に採択した賀詞です(参議院は翌日採択)。即位の礼当日、議長から奉呈されました。この際に、共産党のみが反対しましたが、他の自民党・社会党・公明党・民社党・社会市民連合の各政党は賛意を示しました。まだ中選挙区制の時代で、社会党が野党第一党として百二十

名以上の議席を抱へ与党自民党に激しく論戦を挑んでみました。しかし、陛下のご即位についてとはともかくにも、与党の自民党や他の政党と足並みを揃へて祝意を表したのです。共産党を別として各政党は、まさに「党派を超えて均しく今上陛下のご即位を仰いだ」のです。

これが「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は主権の存する日本国民の総意に基く」といふ第一条から導き出されてくるわが国の姿なのです。かうしたことは学校での憲法学習できちんと教へるべきでせう。「三つの基本原則」以上に大切なことで、その大前提ですから。従つて、共産党は天皇を統合の象徴として仰ぐといふ憲法精神からはみ出た違憲政党となります。この時だけでなく、共産党は国会召集の際の開会式にも、陛下が臨席しお言葉を述べられるのは「憲法の掲げる国民主権の原則を守る立場」に反すると欠席を続けてゐますが、憲法条文のつまみ喰ひと言ふほかはありません（もともと「日本共産党」は、モスクワに本部を置いたコミンテルン（国際共産党）の指示と指導で、その日本支部として大正十一年に発足した「天皇制廃止」を狙ふ革命政党ですから、無理ありません。従つて、議席は少数であっても要注意です。現在はソフトな物言ひをしてゐますが、そもその成り立ちからして共産党は他の政党とは異質なのです）。

賀詞に賛同したからと言って社会党（今の民主党の一部や社民党）や公明党の日頃の主張が、

自民党もさうですが、そのまま理解できるわけではありませんが、さうした次元とは別に、ともかく共産党以外は公的に祝意を表明したことは記憶しておくべきでせう。

ご参考までに、参議院が奉呈した賀詞も掲げておきます。

天皇陛下におかせられては 菊花かおるきよしの佳き日に 即位の礼を挙行せられますことは 国民のひとしく歓喜にたえないところであります

天皇陛下 皇后陛下の万歳をことほぎ このたびの御盛典が 末永く 我が国の進展に 光を添えるものでありますよう お祈り申し上げます

ここに参議院は 国民の至情を代表して 院議をもって 恭しく慶賀の誠を表します

五 明治の立憲制は生きてゐる！

—そして、明治は「古代」につながつてゐる—

前に述べたやうに日本国憲法は「…帝国憲法第七十三条による帝国議会の議決を経た帝国憲法の改正を裁可し、ここにこれを公布せしめる」（憲法「前文」の前に掲げられてゐる昭和天皇の上諭の一節）といふことで制定されました。帝国憲法の改正が現憲法ですから、憲法は続いてゐるのです。そして「第一章 天皇」といふ形式で始つてゐることも共通してゐます。憲法改正論議について述べた際にも触れましたが、「国家の歴史的連続性」に思ひ巡らすといふ大切な視点が今のわが国で忘れられてゐる（忘れようとしてゐる）ことが、やはり問題だと思ひます。教科書でも日本国憲法と帝国憲法との相違ばかりを強調してゐます。

しかし、六法全書を見ればすぐ気づくことですが、憲法だけではなく「民法」「商法」「刑法」などの法治国家の根幹をなす法律は、帝国憲法下のものがそのまま引き継がれてゐるのです。もちろん何度も改訂されてはゐますが、法治国家としては所謂「戦前」「戦後」の切れ目はありません。かうした事実にかちんと向き合へば、憲法改正論議の中味も随分と変つ

てくるはずです。

現在（平成十七年八月）、衆議院が解散されて九月十一日の投票日に向けて各政党が舌戦を展開してゐます。それは「第四十四回総選挙」です。その第一回は明治二十三年（一八九〇）七月十二日で、そこから数へてゐるのです。平成二年（一九九〇）十一月に議会開設百周年式典が陛下をお迎へして挙行されましたが、その起算点はやはり明治二十三年十一月の第一回帝国議会の召集においてゐます。このやうに明治の立憲制度は現在も生きてゐるのです。それは形だけではないかと思ふ人がゐるかもしれませんが、さうしたフレームには重大な意味合ひがあるのです。日本国憲法が曲がりなりにも「憲法」として通用してゐるのも、帝国憲法の「改正」であつたとするその建て前にあります。実質は占領軍の強要でしたが、もしそれだけだつたとしたら占領の終結で廃棄されたことでせう。さうはさせないために「帝国憲法第七十三条の改正条項に基づいたもの」とする擬制が施され、その結果、わづかであっても「憲法」としてのレジティマシー（legitimacy 正当性）が加味されてゐるのです。

現在のわが国が「明治の日本」と深く繋がつてゐるとの觀念が、せめて行き渡つてゐたら政治も教育も、もっとピシッと背筋が伸びるのではないか思ひます。

さて、その明治時代ですが、鎖国から開国へと外交が大転換し欧米の文物を積極的に受容

して「文明開化」の花が開いた時代と考へられがちですが、「(明治維新後の)日本の近代化のすがたは、実は、西欧諸国のイメージではなく、古代の日本の国家としてのあり方を『インスピレーション』として築かれたといふ面も忘れてはなりません」とは、昨夏の合宿教室での京都大学教授・中西輝政先生の御講義でした。今日のわが国の骨格の直接的な基礎である明治の国づくりが「古代の日本の国家」をイメージしてゐたといふ御指摘です(『日本への回帰』第四十集)。全くその通りであると思ひます。例へば明治四年(一八七二)に廢藩置県が断行されますが、八世紀の律令国家がイメージされてゐたはずです。旧藩主(知藩事)は東京に集められ、代つて新政府の役人が県令として派遣されます。これはかつての都から国司が赴任した律令国家と重なります。さういふ制度的なことだけではなくもつと根本的に、現在の言葉でいへばナショナル・アイデンティティ(国家的同一性)といふことが、日本の国はどのやうな国なのかといふことが、江戸時代の歴史研究・古典研究の深まりもあつて幕末までに行き渡つてゐました。例へば、律令制における官職やその補任昇進の次第を述べた北畠親房の『職原抄』(十四世紀半ば成立)は江戸期に入つても盛んに研究され注釈書が多く刊行されてゐます。かうした事實はわが国の法制史が明らかにされただけでなく、「国の基本的あり方」(大義名分)を明らかにすることになつたのです。

明治維新後の改革を見ますと専ら欧米の思想学問の受容といふ面が目立ちます。しかし、事実をきちんと押さへて行くと、その根底に「歴史への回顧」といふ重大な要素があったことが浮上して参ります。安心して、外来の文物に飛びつくことができたのは、ナショナル・アイデンティティが揺らぐことなく確立してゐたからです。この点を少し考へてみませう。

六 「公議を尽くし国民と喜び悲しみを共にしたい」

—幕府政治との違ひ—

江戸幕府末期から明治元年にかけての「大政奉還の上表」↓「王政復古の号令」↓「五箇条の御誓文」↓「国威宣揚の御宸翰」と続く流れをみますと、国柄の自覚が高まり、即ち「統合」の中心に天皇を仰ぐといふことが広く自覚され、明治維新が旧幕府と新政府の対立対峙ではなかつたことが分ります。確に戊辰はしんの役（鳥羽伏見の戦から五稜郭の戦までの一年半近い討幕派と旧幕府軍との戦闘）はありましたが、国を大きく二分しての抗争ではありませんでした。前將軍徳川慶喜よしのぶが大正二年まで存命し、明治十三年には正二位に復して、さらに爵位を授けられてゐるなどといふことは、諸外国での革命劇では考へられないことです。

大政奉還はご承知のやうに、明治元年の前年の慶応三年（一八六七）十月、第十五代將軍徳川慶喜が政權返上を朝廷に建白したことです。その上表の中に「…愈朝權一途に出申さず候ては、綱紀立ち難く…政權を朝廷に帰し奉り、広く公議を尽し、聖断を仰ぎ、同心協力、共に皇國を保護 仕 候得ば必ず海外万国と並立つべく候…」（…確かに朝廷の權威による御命令が一本化されないと、國家の秩序を保つことができない。…そこで御委任されてゐる政權を朝廷にご返上申し上げ、広く天下の議論を尽くした上で、天皇のご裁断を仰ぎ、心を一つにして力を合はせて、ともに日本の國を護つていくやうにすれば、必ずや世界の各國と肩を並べることができはすだ…）とあります。

右を承けて翌々月發せられた王政復古の头号令には「徳川内府從前御委任の大政返上、將軍辭退の兩条、今般断然聞し食され候…自今…諸事神武創業の始に原き、縉紳、武弁、堂上、地下の別なく、至当の公議を竭し、天下と休戚を同じく遊さるべき勸慮に付き各勉勵…忠報國の誠を以て奉公致すべく候事…」（内大臣徳川慶喜が天皇から御委任されてゐた政權を返上し將軍職を辭退したいといふ二つの申し出を、この度きっぱりとお聞き入れになられた。…今からは…すべて初代の神武天皇が建國の大事業を始められた精神にもとづき、公卿・武家・殿上人・平民の区別なく公明正大に議論をつくし、國民と喜び悲しみを一つにしたいと天皇はお考へなので、各々が努力し

真心を尽くして国に報いる誠意をもって奉公しよう……とありました。

幕府政治といふのは一口で言ふと、將軍家との親疎による「分け隔て」を当然とするものでした。徳川家の旧臣である譜代大名は信用され要職に就きましたが、外様大名は常に警戒され幕政の埒外うちがわいにおかれておりました。武家諸法度を見れば一目瞭然で、大名達は相互に監視し合ひ密告することが奨励されてゐたのです。それは国内に幾重にも壁を作り風通しを悪くすることで持続した「不信」と「分断」の体制でした。「戦国の乱世」の芽を摘むためには意味がありました。黒船来航によって、一丸となって諸外国と交際する時代には向かなかつたわけですから、幕府が退場するのは当然でした。そしてそこに「立場の別を超えて公議公論を尽くし、天下と均しく喜び悲しみを共にしたい」とする天皇政治が浮上して来るのもまた自然なことでした。もともとその征夷大將軍は朝廷から任ぜられるものでしたし、天皇を国の中心に仰ぐといふ古代からの国の姿は、武家政権の時代であつても変ることはありませんでした。將軍の下にあつた各大名も律令制（八世紀）に発する官職名を公的に名乗つてゐたのです。かうした事実があるからこそ、大政奉還の上表がなされたのです。

さらに「諸事神武創業の始もとつに原もとき」と、神武天皇の建国が回想されてゐることも、見逃せない点です。西洋列強が軍事力を伴つて東洋諸国に浸透侵略してくる西力せいりょく東漸とうぜんの国際環境の

もと、下手に国論が分裂したら、それに乗じられて植民地にされかねない情勢下、国政の中心に天皇を仰ぐといふ遙か「国初以来の伝統」を再確認して独立喪失の危機を乗り切らうといふのです。「一つ」になれる歴史を持つてゐたことは、まことに幸せなことでした。

明治天皇が天地の神々に誓はれた五箇条の御誓文(明治元年三月十四日)は新政の基本方針を明らかにしたのですが、その冒頭に「広く会議を興し万機公論に決すべし」とあることはご存知のほうです。同じ日に、書簡の形式をとった出された勅語が国威宣揚の御宸翰です。その中に「…上は列聖を辱しめ奉り、下は億兆を苦しめん事を恐る。故に朕ここに百官諸侯と広く相誓ひ、列祖の御偉業を継述し、一身の艱難辛苦を問はず、親ら四方を經營し、汝億兆を安撫し、遂には万里の波濤を拓開し、国威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置ん事を欲す…」(…代々の天皇を辱め申し上げたり、人民を苦しめることを恐れる。それ故に私は公家・諸大名と互ひに誓ひ合ひ、歴代の天皇の御偉業を受け継ぎ、わが身の困苦はものともせず、自ら政治の任にあたり、人民をいたはり、つひには遙か彼方の大波を越えて、海外にまで国の威光を世界に行きわたらせ、国の基礎を富士山のやうに安定した強固なものとしたい)と、お述べになつてをられます。このやうに「百官諸侯と広く相誓ひ」公論に基づくことで「国の威光」を輝かせたいとする点で、武家政治とは根本的に違ふのです。

さらに左記のやうに述べられた箇所があります。実に印象的な一節です。

今般朝政一新の時に膺り、天下億兆、一人も其処を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日の事、朕自身骨を勞し、心志を苦め、艱難の先に立、古列祖の尽させ給ひし蹤を履み、治績を勤めてこそ、始て天職を奉じ億兆の君たる所に背かざるべし。

(このたびの一大改革に際し、天下の万民の一人であつても相応しい扱ひを得られない時は、すべて私の責任であるから、日々の政事に臨むあたり、わが身を削り、わが心を責めて、困難の先頭に立つて、神武天皇を初め御歴代の天皇方が御尽力されたことを手本と仰いで、今の政に勤めてこそ、初めて皇位を踐む者と言へよう)

七 御製に仰ぐ「一貫する大御心」

— 憲法第一章の淵源 —

幕末の志士宮部鼎蔵(熊本藩の出身、吉田松陰・真木和泉らと交り池田屋事件で自刃)に

いざ子ども馬に鞍おけ九重のみ階の櫻散らぬその間に

といふ歌があります。この歌は時の孝明天皇（明治天皇の父君）の

矛執りて守れ宮人九重のみ階の櫻風そよくなり

といふ御製（天皇が詠まれたお歌）を「聞知して感奮興起し」、それに和して（荒木精之「宮部鼎蔵先生の詩歌」）詠まれたものと考へられてゐます（夜久正雄先生は「心中奉答したものであらう」とされてゐます）。天皇のお心を知つて発奮し国事に奔走せんする鼎蔵の胸中がうつつに偲ばれる歌です。さうした思ひはひとり鼎蔵だけのものではなかつたのです。川田順著『幕末愛国歌』といふ名著がありますが、国文研叢書の小田村寅二郎編『日本思想の系譜』にも、五十人近いの当時の代表的人物の歌が収められてゐます（「幕末志士の歌」の項ほか）。その解説の中で夜久正雄先生は（徳富蘇峰の名著『近世日本国民史』に拠りながら）、幕末期は、老若男女武士とはいはず町人とはいはず、神道家、僧侶、儒者、あらゆる人々が、国を思ふ一念で結ばれて、いのちがけで国事に働いたと記してゐます。そして孝明天皇のもとで、「幕藩体制

の士農工商といふ階級差別は崩れ去つて、天皇を中心とする国家の、精神的実質が復活したのである」とも解説してゐます。「国を思ふ一念で結ばれて」とは、まことに適切な評言だと思ひます。文字通り身命を賭して奔走した志士達の遺歌を読めば、それが決して大袈裟な言ひ方ではないことが理解されるはずです。その中心にあられたのが孝明天皇だったので。

「維新の大業を立派に完成した其力は、薩摩でもない、長州でもない、其他の大名でもない。又た当時の志士でもない。畏多くも明治天皇の父君にあらせられる、孝明天皇である」(徳富蘇峰著「近世日本国民史」第六十一卷)

ペリー来航から幕府退場まで足掛けわづか十五年でした。波乱に満ちた幕末史の中で、こゝに通商条約の調印問題での朝幕関係の緊張(安政の大獄、「国論の分裂」の萌)を目にされた孝明天皇の御祈念はひと際切なるものがありました。

あさゆふに民やすかれとおもふ身のこころにかかる異国の船
国民のやすけきことをけふここにむかひて祈る神の御前に

武士もこころあはして秋津すの国はうごかずともにをさめむ

神ごころいかにあらむと位山おろかなる身の居るもくるしき (位山＝皇位の意)

天がした人といふ人こころあはせよろづのことにおもふどちなれ (どち＝共、仲間)

澄ましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせじなよろづ国民

かうした孝明天皇のお歌を拝誦しますと、幕末期、なぜ朝廷が国の中心として再び脚光を浴びるやうになつたのかの真相が浮び上がってくるやうです。畏れ多いことですが、国と民との平らぎをひたすら祈つてをられるお姿が臉に浮かんで参ります。

譜代大名と外様大名の領地を隣り合せにして「隣国に於きて新儀を企て徒党を結ぶ者有らば、早に言上致す可き事」(武家諸法度) などとしてきた武家政権とは異質の精神世界です。さうした幕府では、黒船来航に対処して「公議」を尽くし国論をまとめることはもともと不可能だったのです。

右の御製の中で「愚かなる身にとつて皇位に留まつてゐることは苦しい」とも告白されてをられますが、かうした厳しいご内省と「国民のやすけきこと」をご祈念なされる御姿勢は孝明天皇(第百二十一代)の場合だけではありませんでした。

後嵯峨天皇（第八十八代）

河辺なるあらぶる神にみそぎして民しづかにと祈るけふかな

伏見天皇（第九十二代）

世をまもる神のこころをかへりみておろかにたらぬ身をぞ恐るる

後醍醐天皇（第九十六代）

世をさまり民やすかれと祈るこそ我が身につきぬ思ひなりけれ

後土御門天皇（第百三代）

ともすれば道にまよへる位山うへなる身こそくるしかりけり

後奈良天皇（第百五代）

愚かなる身も今さらにそのかみのかしこき世世の跡をしぞ思ふ

靈元天皇（第百十二代）

おこたらず祈る手向たむけの言の葉はおろかなるをも神やうくらむ

桜町天皇（第百十五代）

思ふにはまかせぬ世にもいかでかはなべての民の心やすめむ

後桜町天皇（第百十七代）

おろかなる心ながらに国民のなほやすかれとおもふあけくれ

御製を拝読して参りますと、厳しいご内省を伴った「民やすかれ」の深きご祈念が、武家政権の時代にあつても一貫して継承されてゐることが仰がれます。大政奉還を建白して自ら引き下つた徳川慶喜公の見識も評価すべきと思ひますが、それを決断せしめたものは変らざる「民やすかれ」の祈り、即ち大御心ではなかつたでせうか。

明治天皇の「国威宣揚の御宸翰」に「今般朝政一新の時に膺あり、天下億兆、一人いちじんも其処そのところを

得ざる時は、皆朕が罪なれば……とありましたが、それは歴代天皇の御製に拝するお心と表裏するもので、その歴史的背景の深さに慄然とさせられます。そして、そのお心は明治時代はもちろんのこと、それ以降もいささかの変わりもなく現在の平成の御代に至つてをります。

明治天皇（第二百二十二代）

とこしへに民やすかれといのるなるわがよをまもれ伊勢の大神
ひとりしてしづかにきけば聞くままにしげくなりゆくむしのこゑかな

大正天皇（第二百十三代）

国民の上やすかれと思ふまはあつさもしばしわすられにけり
天の下くまなくてらす秋の夜の月を心のかがみともがな

昭和天皇（第二百二十四代）

日日のこのわがゆく道を正さむとかくれたる人の声をもとむる
わが庭の宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝朝

今上天皇（第二百二十五代）

波立たぬ世を願ひつつ新しき年の始めを迎へ祝はむ

豊年トヨトシを喜びつつも暑き日の水足らざりしいたづき思ふ

国がためあまた逝きしを悼みつつ平らけき世を願ひあゆまむ

人々の幸願ひつつ国の内めぐりきたりて十五年経つ

八 昭和天皇と今上天皇

昭和天皇が、終戦直後の昭和二十年九月、わが国を占領統治するために乗り込んできた連合国軍司令官マッカーサーに「国民が戦争遂行にあたって政治、軍事両面で行ったすべての決定と行動に対する全責任を負う者として、私自身をあなたの代表する諸国の裁決にゆだねる」とお述べになったことはご存知のことと思ひます。これを耳にしたマッカーサーが「明らかに天皇に帰すべきでない責任を引き受けようとする。この勇氣に満ちた態度は、私の骨のズイまでもゆり動かした」と記してゐることも有名なことです（「マッカーサー回想記」）が、

かうした傷ついた雛鳥を庇はんとする親鳥の如きご言動も、昭和天皇の偉大さを物語るといふだけでなく、一貫する大御心の然らしめるところと拝して初めて真相に迫れるのではないでせうか。

平成七年は「終戦五十周年」といふことで、その一、二年前から朝日新聞を初めとする主要マス・メディアは、平和条約（国交協定）締結の経緯を全く無視して、盛んに戦争謝罪の国会決議が必要だとのキャンペーンを展開し、各政党もそれ動かされてゐました。いかにも反省の意を表すかに見えますが、祖父達を悪者することで自分らへの風当たりを弱めようとするとしか言ひやうのない醜い動きでした。先人の労苦を忘れて今日の都合しか念頭にない人間の間に許し難い動きでした。

さうした中、今上天皇は激戦の地・硫黄島に行幸されました（平成六年二月）。その折の御製を拝誦しますと、戦歿者に正面から真向つてをられるご姿勢が拝察されます。

精根を込め戦ひし人未だ地下に眠りて島は悲しき

戦火に焼かれし島に五十年も主なく菟麻は生ひ茂りぬ

（菟麻Ⅱ和名とうごま）

玉碎戦に近い苦闘に殉じた将兵を「精根を込め戦ひし人」とお詠みになられて、祖国ために最後の最後まで身を挺して戦った人達を真つ正面から偲んでをられます。精根とは「何かをなさんとして集中された精進力」のことです。戦死した二万百二十九人のうち、まだ半数以上の方の遺骨が灼熱の地下に眠ったままなのです。まことに悲痛きはまりないお歌です。



憲法第一章第一条に記されてゐる「統合」の意味することについては前述しました。さらに、なぜ憲法第一章が「天皇」の条項になつてゐるのか、なぜその中で「日本国の象徴」「日本国民統合の象徴」と記されてゐるのかについての拙見も、すでに述べました。「日本の国柄」に近づく糸口になりましたでせうか。「国柄」を理解する鍵は、日本歴史を貫く大御心の系譜をたどることを措いて他にありません。憲法第一章は第一条から第八条までありますが、その中には例へば「天皇は、国会の指名に基いて、内閣総理大臣を任命する」「天皇は、内閣の指名に基いて、最高裁判所の長たる裁判官を任命する」(第六条)との条文もあります。これらは、いつの時代も変ることなく国の中心に天皇を戴いてきた伝統、「日本の国柄」の

然らしむる所なのですが、その実質である大御心を仰ぐことがなければやがて形骸化してしまひます。制定の経緯からして現憲法に多くの問題が内包されてゐることは多言を要しません。その憲法であつても、「わが国の歴史的特質を尋ねる」といふ視点に立てば、その条文から古くから連続してゐる国の姿が浮かび上がって参ります。その点をまづ明確にするところが肝要だと思ひます。さうなれば、憲法見直しの方向性も、自づからはつきりしてくるはずです。憲法の条文をどう受け止めるかは、偏ひとへにわれわれ国民の姿勢如何にかかつてゐるのです。

(補記) 歴史的な視点に立つて憲法第一章は読むべきであると説きましたが、皇室典範をめぐる論議の際も全く同様です。現代的今日の発想に立つ前に、まづ遡つて史実を正確に辿り、そこに浮上してくる不文ながら確立された「男系による皇位継承」といふ伝統的原则を最大限尊重し、そのために今、何をなすべきかを考へるといふのが一番自然のはずです。「…左の物を右に移さず、右の物を左に移さず、左を左とし、右を右とす…」(『倭姫命世記』やまとひめのみことせいき) とあるやうに、人智におぼれて慎みを忘れてはなりません。

講義

我らが道統と学問

福岡県立太宰府高等学校教諭

占部賢志



思想混迷の大正期

沼波瓊音の登場

貧苦の中の学問浪人

俳諧研究から「新国学」構築へ

齋戒沐浴して認めた瑞穂会「趣意書」

愛娘の死

黒上正一郎先生との邂逅 — 「千三百年來唯此一人」 —

思想混迷の大正期

本日、ここで取り上げますのは、本会の源流にあたる学生団体の「一高瑞穂会」並びに「一高昭信会」の結成にかかはる消息です。

瑞穂会が旧制の第一高等学校（以下、「一高」と略す）に誕生したのは大正十五年二月でした。従って、本会が発足して今年で五十年目を迎へますが、その前身の瑞穂会から歴史を辿れば八十年に及びます（次頁の表をご参照下さい）。

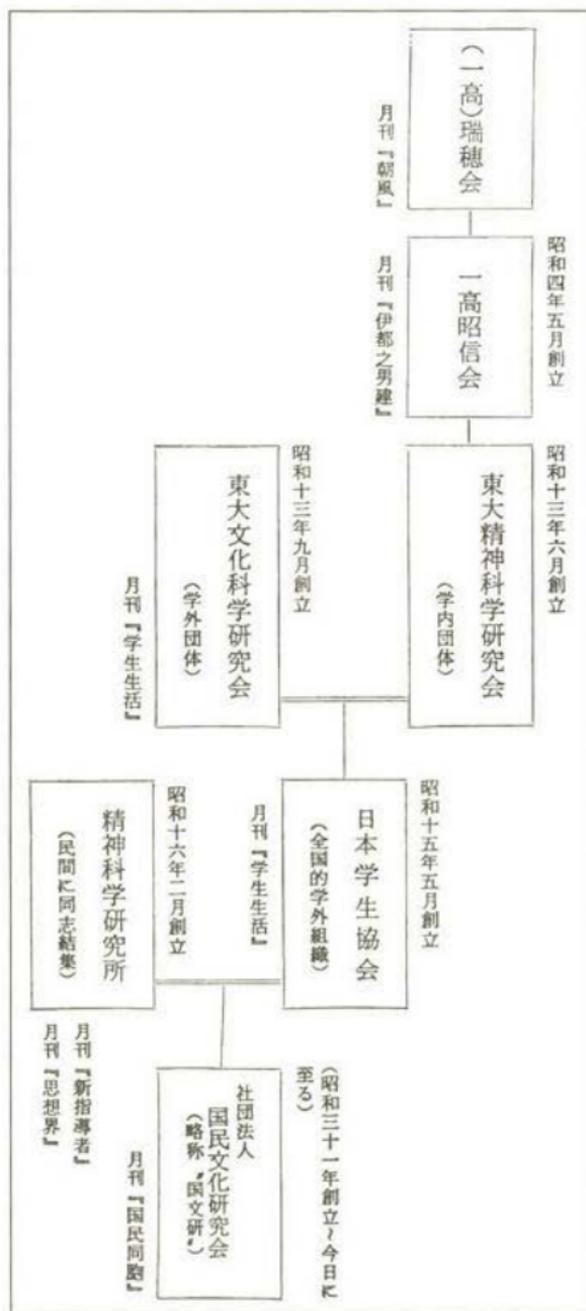
そこでまづ、なにゆゑ一高に「瑞穂会」が誕生するに至ったのか、大正期の時代状況を概観してみませう。

大正時代は決して牧歌的な時代ではありませんでした。この時代は、先代の明治時代に対する冷笑や偶像破壊の風潮、社会主義思想の蔓延、また教養主義の台頭と百花繚乱の様相を呈してゐました。

かつて竹山道雄氏はその激変ぶりを、「精神の基本的態度としては、徳川時代と明治の變化よりも、この時期の区切りの方が大きかった」（『明治精神の變化』）と指摘したほど、我

が国の近代思想史から見ても実に重大な転換期だったので。幕末維新期をも凌駕する混沌の時代だったと言って差し支へありません。

そもそも唯物論は明治後期に我が国に流入したのですが、明治四十三年の大逆事件以降は鳴りをひそめてみました。それが大正期に息を吹き返すのは、ロシア革命を経て台頭した社





会主義、マルクス主義運動と結びついて以降です。

堺利彦や山川均らが『社会主義研究』を発刊し、「我々の旗印とは何ぞや、曰くマルクス主義である」と宣言したのは大正八年のことでした。やがてコミンテルンと結びついた堺や山川らは日本共産党を結党、三木清がマルクス主義哲学に関する論文を発表、知識人や学生に甚大な影響を与へて行きます。

また、高等教育機関及び労働運動などに広く影響をもたらした新人会の結成は、大正七年のことでした。吉野作造らの影響下、東京帝国大学の学生を中心に「吾徒は現代日本の合理的改造運動に従ふ」（綱領）との目的を掲げ、伝統的思想との戦ひを宣言します。

このやうに、時代はたしかに質的な転換を見せ始めるのです。大正七年は米騒動の年でもあります、

我が国の都市騷擾事件はこれ以降に、大きく変貌します。

民衆による騷擾と言へば、江戸後半の天明年間や幕末時に頻発した「打毀し」^{うちこは}が知られてゐますが、あの頃は米屋や商家に押し入っても、家財道具類は破却するものの、「盗まない、燃やさない、殺さない」といふ三つの掟が守られてゐました。打毀しのねらひは御救米や御救金を支給させるところにあつたからです。

この不文律は幕末・明治を経て大正七年の米騒動に至るまで継承されてゐます。かうした闘争の掟が公然と破られたのが、大正十二年の関東大震災直後における騷擾の時でした。我が国の都市騷擾史におけるモラル崩壊が始まつた年でもあつたのです。

さらに軍人を冷笑する空気も広がりを見せます。意外に思はれるでせうが、我が国に「軍国主義」なる言葉が流行し始めたのは、実は大正十一年の軍縮直後からです。「軍人は肩身がせまく、外出には平服を着、電車の中などでは『軍人は立つてもらうじやないか』とか『拍車^{はくしゃ}が邪魔になる』とか小言をいわれた」(前掲書)とは、竹山道雄氏の証言です。

また、男女の露骨な痴態などを題材にした小説類が流行し、エロ・グロが世を覆ひ始め、風紀の頹廢も進みます。

沼波瓊音の登場

かうした激変の様相を見せる大正期は、従来にまして大学が急増します。それまでは多種多様な高等教育機関が存在してゐたものの、あくまで専門学校の範疇に属するものであつて、正規の大学として認められてゐたのは、東京・京都・東北・九州・北海道に設けられた五帝国大学のみでした。

ところが、大正六年に内閣直屬の審議機関「臨時教育會議」が設けられ、ここで取り上げられた高等教育拡張政策によつて、翌七年に「大学令」が公布される。公私立大学や単科大学の設置が広く認められるやうになるのはこの大学令を画期とします。さういふ意味で大正期はインテリ量産時代の幕開けでもあつたのです。

しかも、高等教育機関が拡充していく時期は、先に述べたやうな時代思潮を背景としたものであり、その影響をもろに受けてしまふ。竹山氏は「インテリの離反は年がすすむにつれていちじるしくなり、ついには活動的なインテリはほとんどこぞつて反体制となつた。国立大学の教授までが、思想によつて影響しようとする場合にはつねに反抗的であつたというこ

とは、めずらしい例である」と回想し、とりわけ「帝国大学は幾十年かのあいだ、汗水ながしてマルキシズムのために支度したようなものだった」（前掲書）と指摘してゐます。

かうした風潮が蔓延して行く折も折、大正十二年九月一日、関東大震災の発生とともに社会は混乱の極みに達し、挙げ句にはその年の十二月二十七日に国内を震撼させる虎の門事件が惹起します。第四十八議会の開院式に向はれてゐた摂政宮（のちの昭和天皇）に対し、難波大助なるテロリストが狙撃に及ぶといふ驚天動地の事件です。幸ひにして弾丸はそれたものの、山本権兵衛内閣は即日総辞職を決議して二日後に退陣します。

世は騒然とした空気に覆はれますが、この事件を契機に大正期思想との対決に立ち向かう一高教授が登場します。その人の名は沼波武夫、俳号を「瓊音^{けいおん}」と言ひます。当時から沼波瓊音と呼び慣はされることが多く、ここでは瓊音と称することにします。東京帝国大学講師、第一高等学校教授などとして教鞭をとる、芭蕉をはじめとする俳諧研究で名望高い国文学者でした。

虎の門事件直後、教へ子の一人が先生宅を訪問したところ、瓊音先生は悄然たる面持ちで「御飯を食べにかかったが、胸につまってどうしても咽喉を通らぬ。一体日本の国は如何なると思ふか」（瑞穂会編『噫 瓊音沼波武夫先生』）と語り、あとは沈黙したまま涙を浮べてゐ

たさうです。後にも先にもこのやうな師の表情は見たことがないと教へ子の方は回想してゐます。余程思ひ詰めてゐたのでせう、瓊音先生は同じ国文学者で親友の藤村作つとむのもとを訪ねて、「もう仕事をするのがいやになつた。講義なんかしてぐづぐづしてをる時ではないと思ふ。一切の教職などを抛なげつて国家精神の覚醒に全力を捧げたい」(前掲書)と今後の身の振り方を吐露されたと言ひます。

自国を冷笑することがインテリのメルクマールとなつてゐた大正後期、邦家の危機に職を抛つてでも立ち向はうとする教師が現れたのです。この年の十月に瓊音先生が詠んだ短歌には当時の心境と覚悟のほどが鮮やかに示されてゐます。

ちはやぶる神ながらなる日の本にかへさむことにこの身ささげむ

貧苦の中の学問浪人

ここで沼波瓊音先生のプロフィールを紹介しておきませう。

先生は明治十年に愛知県名古屋市玉屋町に生れ、第一高等学校から東京帝国大学国文科を

卒業。在学中より俳句に親しみ、帝大では筑波会に入り、笹川臨風りんぷうらと交遊してゐます。卒業後は三重県第三中学校の教師として赴任しますが、翌年、村田たきとの結婚後は辞職して上京、文部省の嘱託となります。

その後文部省を辞任し、万朝報社よろづちようほうに入社して編集の仕事に携はります。この間、俳句関係の著作を断続して刊行するとともに、大町桂月らと雑誌「青年」を編集したり、みづから雑誌「俳味」を刊行するなど、ジャーナリストとして面目躍如たるものがありません。

しかるに三十四歳の時、神経衰弱に悩んで万朝報社を辞職、以後は大学図書館を書斎の代りにして国文学の研究に打ち込み、著作の出版はしたものの、精神的不安が続き、一時期は宗教に接近し、信仰生活に入ったこともあります。明治四十五年、再び大学図書館に通って研究生生活に没頭、万朝報社退社以降は信仰三昧の時期を除いてほぼ学問浪人の如き日常生活でた。

大学図書館を利用しての研究生生活ぶりについては、先生が残した数多くの短歌に詠まれてゐます。みづから収入の道を断つたわけで、本を買ふ余裕などまったくない貧苦の生活にあつたわけですから、図書館は唯一の友でした。大正二年三月のこと、暫く病床に臥した時の歌にこのやうなものがあります。

病みぬれば日々に思ふよ図書館のわが椅子けふは誰れ占むるらむと
病みぬれば図書館恋しモハメット研究者なる鼻高男も

どんなに図書館に通ひ慣れてゐたか、また愛してゐたことか。その図書館にいつも一緒に
なる彫りの深い顔をした一人の男がゐました。どうもイスラム研究に打ち込んでゐるらしい。
暫く図書館に行けないとなると、言葉も交はしたことがないその隣席の男すら懐かしく思ひ
出されたのでせう。図書館生活を恋しく想ふまことに素朴な歌です。

因みに、歌に詠まれた「鼻高男」こそ若き日の大川周明にはかなりません。瓊音先生三十
七歳、大川は二十八歳の時でした。お互ひの存在を気になげながらも、言葉すら交へずひた
すら隣席で学びの道に励んでゐた二人は、三年後、思ひがけない再会を果たし、その後は思
想的な交流を始めることになります。

さて、先生の研究は実を結び、大正九年に法政大学、東京女子大学、東洋大学の講師とし
て教鞭をとることとなりました。引き続きいて翌年には、一高並びに東京帝国大学の講師とし
て招聘され、さらに翌年には一高の教授に昇任します。

俳諧研究から「新国学」構築へ

一 高教授に就任しながら幾つかの大学講師をも兼任してゐた瓊音先生は、虎の門事件以来、思想戦に備へて身辺の整理を支度し始めます。

東京帝国大学では「俳諧史」の講義を担当してゐましたが、次第に辞任したい旨申し出ることも度々だったと言ひます。帝大教授の藤村作はこのやうに回想してゐる。

「到頭『日本精神』に関する講義をやらせるならば続けるが、俳諧の講義ばかりならば断然講師を辞するといひ出された。君のこの頃の傾向や研究を知つてゐた私としては、これはどうかして君の志を遂げしめる道を拓いてやりたいと思つて、教授会に提出したが、幸に教授会は君の性格を了解し、君の研究を信じて、まだ一個の学として十分に成立してはゐない『日本精神』に関する君の研究を自由講義として容ゆるされることとなつた」（前掲書）

実はこの講義を受講した当時帝大生だった伊藤正雄は、『新版 忘れ得ぬ国文学者たち』（右

文書院)の中で、その講座名が「国文学と日本精神」と題されたものだったことを明かしてゐます。大正十四年度に開講された講座でした。

同年度の東京女子大学に設けられた特殊講座も「国文学と日本国民の精神」といふ題目だったことは、同大学教授竹田復の追悼文に見えてゐます。このやうに大学の講義もみづからの研究課題も「日本精神」をテーマに収斂して行くのです。

かくて十五年を迎へると、帝大も東京女子大学をも辞任することを決意します。伊藤は「私も学生はこの名講義を大学から失うことを惜しんだが、断乎たる先生の決意は如何ともし得なかつた」と切なく回想し、女子大の竹田も学生達は瓊音の特殊講義を「非常に感激して居りましたが、御病氣の爲めに之れを終りまで継続し得なかつた事は遺憾に堪へません」と嘆いたほどです。

しかし、この頃すでに先生は思想混迷の時代に立ち向かふための研究並びに学生との研究会を組織し、これにすべてを賭ける覚悟を固めてゐました。帝大にも念願の講座を開設出来たわけですから、今しばらくは兼任したい思ひもあつたでせうが、この頃から変調を来し始めてゐた身ではとても学校の掛け持ちは無理でした。

当時同僚だった石村貞吉教授はかう述懐してゐます。

「親しく国史の研鑽に没頭し、考古学等まで熱心に涉獵攷究せられ、新国学を起すの意志があつたことは、知人の均しく承知せらるる所であらう。其攷究の態度、熱烈を極めて、夜深更に及んで時に夜を徹することも珍しくなく、しかも昼は教壇に立たれて居た。其時の話に、『身体がフラフラして恰も舟の中に居る様で、時に安定を欠くの思がする。』といつて居られた」（前掲書）。

齋戒沐浴して認めた瑞穂会「趣意書」

かうして瓊音先生は、大正十五年度以降は一高教授としてのみ教壇に立つこととなつたのです。すでに瑞穂会は同年二月十一日紀元節の当日を選んで呱呱こゝろの声を上げてゐました。先生みづから書き上げた「趣意書」を紹介しませう。執筆に際しては数日のあひだ齋戒さいかい沐浴もくよくして筆をとつたださうです。

まづ冒頭にかう書き出されてゐます。

「破壊主義の跳梁、唯物論の瀰漫、軟文学の跋扈、風紀の頹廢、これ実に日本国の現状にして、同時に我が向陵の現状なり。手を懐ふところにしてこれを傍観するは人に非ず。ただ口に憤り筆に慨して止むは丈夫の事に非ず。我等今深く反省して既往の怠慢を悔ゆ」

これが先生の時代認識でした。では、かうした風潮に対してどう対峙するのか。先生はこのやうに言ふのです。

「抑おと向陵を清むるは即ち日本国を清むる所以なり。向陵を強大ならしむるは日本国を強大ならしむる所以なり。我等よはひ齡なほ若く智浅く識低しと雖、憂国の至情、回天の壮志、沸ふつ々禁ずる能はず」

「向陵」とは一高を指します。当時のエリートコースとして一高は際立つ存在でした。昭和二年から昭和十五年の間で一高から東京帝国大学に入学した者は年平均で百八十二名を数へ、他の高校からの帝大進学者数が年に五十名前後だったことと比べれば、圧倒的な数だったのです。

一高教育は、そのまま国家のリーダーたる者の教育そのものでした。ですから、瓊音先生は彼ら一高生を真の日本人に育てることこそ国家の再建に直結する大事と見たのです。掛け持ちしてゐた大学の職を抛擲して一高に賭けたのも頷けませう。

では、その教育刷新の中身とは何か。かう呼びかけられてゐます。

「同志結盟ここに起つて事に従はんとす。もとより矛を執つて姦かんを斬るは我等が事に非ず。正義を街頭に叫んで衆を激するは我等が事に非ず。学窓堆書の裡、我等が為さむと欲するは、為さざるべからずと信ずるは、根本の確立なり。即ち皇国千古一貫の生命たる日本精神の正しき把持是なり」

ここに宣言した「我等が為さむと欲するは、為さざるべからずと信ずるは、根本の確立なり」といふ言葉にすべてが集約されてゐます。そしてその確立すべき「根本」とは、「日本精神の正しき把持是なり」と言はれるのです。

言ひ換へれば、根本たるべき「日本精神」が失はれつつあるからこそ主張されたとも言へるでせう。

次いで、その憂ふべき現実をこのやうに列举してゐます。

「世上学者無きに非ず。然れども学科の過度なる細分は、極めて狭少なる局部的ものしりを産むに至り、核心の体得、総括の識見、まして況んや実践窮行の如き、これ等尊き風姿は、最高学府に求むとも、纔に二三を数ふるに過ぎず。かるが故に学徒愈増して国家愈危く、図書益益刊せられて世道益墮す。盲目的なる拝外、物狂ほしき自国侮辱、歴史の無視、道德の蹂躪、正邪審判の顛倒等、四顧皆然らざるなきに至る」

たしかに「学科の過度なる細分」が高等教育にもたらした弊害は夙に指摘されてゐました。かつて高山岩男氏は大正期高等教育の重大な欠陥をかう剔抉したことがあります。

「明治以後の法学教育はもっぱら法律の知識や技術の注入に集中したため、本来学んでおくべき経・史・文などは法学教育から追放し、文学部の中に押し込めてしまった。そこでこれでは駄目だといふので、大正時代、東北・九州の両帝国大学に、文を知つて法を知らぬ偏頗な法学部と文学部に分離しない総合的な『法文学部』を新設した。まことに時宜を

得た着想であり試みだったが、見事に失敗した。高文試験、司法試験等の国家試験が旧態依然のままだったからである。…かかる欠陥教育を受けた者の中から、唯物史観や唯物弁証法の哲学にコロリと参る者が出るのも、独善的見解に走って自らを省みない者が生じるのも何ら不思議ではなかった」（『教育者への書簡』）

まさに「学科の過度なる細分」がもたらした致命的欠陥にはかなりません。人間の複雑微妙な心理や歴史も学ばず、ひたすら条文とその解釈の修得に身をやつす傾向は危ふいと自覚されてゐたにも拘はらず、せつかくの改革も結局は頓挫した。当時のかうした状況を先生は深く憂慮したのです。前述の伊藤正雄の『新版 忘れ得ぬ国文学者たち』（右文書院）によれば、当時先生は「大学が国文学科と国史学科とを分けてるのがそもそも間違いだ。二つを一つにしなれば、日本精神の研究はできぬ」と力説してゐたさうです。

また、しばしば「俳諧屋はもうやめだ」とか「俳諧はわが過去の形骸」などと洩らしてゐたとも伝へられてゐますが、これも学問を矮小化する世界には身を置きたくないといふ意味でせう。

瑞穂会結成の意図も、断片化した学問の統合をはかり、日本精神の研究に当らうとする点

にあつたと思はれます。

「かるが故に学徒愈増して国家愈危く」といふ言葉は単なる悲憤慷慨ではなかつた。高等教育の実態を鋭く洞察したところから発せられた指摘だったので。そして、その結果として出来たものが「盲目的なる拝外、物狂ほしき自国侮辱、歴史の無視、道徳の蹂躪、正邪審判の顛倒」だと言はれる。

例へば、遺稿となつた「公憤の烈火」に次のやうな一文があります。

「大震災のその夜、新聞記者が口で重要事項を報告してまはつた。彼等が『兩陛下下摂政宮殿下は御無事です。』と云つた時、私の傍に居た一人は、『そんな事はどうでもいい。』とつぶやいた。其人が今、判事を勤めてゐる。この皇室を蔑如する心を抱いて、天皇の御名に於て正邪を審判する所の官職を執つてゐるのである」

瓊音先生はエリートコースを出て判事を務める社会的指導者たる者に、このやうな皇室蔑如の心が巣くつてゐる状況に唾然としたでせう。それはやがて朴烈事件をめぐる怪写真事件が報道されるや確信となる。

この事件は関東大震災の翌日、朴烈・金子文子夫妻が大逆罪容疑で逮捕起訴され、のちこれを担当した控訴院判事立松懐清が予審取調室で密かに二人を引き合はせ、あらうことか朴が金子を膝の上に抱いてゐる姿を写真に撮った上に、そのはしたない写真が外に漏れ、新聞紙上に掲載されるといふ前代未聞の事態を指します。

当時世間の話題をさらった事件ですが、まさにかうしたところにエリートに巣くふ「道徳の蹂躪」と「正邪審判の顛倒」した倒錯状況を看過し得ぬ危機と受け止めたわけです。

愛娘の死

先生は趣意書をかう結んでゐます。

「我等敢て起つて自らこの救ふ者となり、現一高時代より始めて大学時代、独立時代に亘り、生を終るまで、会員相互真に^{ほんけい}兪頸の交りを遂げ、各々最善を尽してこの重任を果さむを誓ふ。幸に同憂の恩師先輩諸氏の熱烈なる援助を我等に与へ給ふあり。^{とらひな}纜を解かむとして順風にまさに帆を吹く概あり。^{おもひま}諸君安んじて護国破邪の征途を共にせよ」

ここに明らかなやうに、「瑞穂会」は純然たる国文学に限定した研究会でもなければ、また当時流行の教養主義に眩惑された会でもありません。時代風潮に対抗すべく生涯をかけて組織された学内研究団体として位置づけられたのです。

在野の聖徳太子研究家であり瑞穂会会員であつた黒上正一郎先生によれば、瓊音先生はこのくだりの意味を、

「青年時代、学生時代には、同志の協力といふことは云ひ易く行ひ易い。しかし妻をもち地位を得た後と雖も尚、その学生時代のごとき信念を更に開展し之を貫く人でなかつたならば、真実でない。結婚して變つたり、又地位を得て變つたり、或は苦痛に遭つて變つたりするやうな、根底なき信念では駄目である」(瑞穂会編『憶 瓊音沼波武夫先生』)

と語つてをられた由です。家族を抱へながらも敢へて貧苦の道を選択、苦悩の精神遍歴にありながらも刻苦勉励した者にしてはじめて言ひ得る真実の呼びかけです。

実は瓊音先生は七歳の愛娘澄子を亡くして間もない頃でした。国事に対する懊惱、懸命の

国史研究と息継ぐ暇もなかった渦中で我が娘の死に直面してゐた心中はいかばりであつたこととせう。以下の、亡き娘に捧げた弔歌に底知れぬ悲しみのほどが偲ばれます。

かくれんばすみ子はいづらテーブルのかけにも椅子の下にも在らず

呼ばれるればはいといらへず「なに」といひし小さき癖も思出となる

「しやほん玉消えたとはずに消えた」などわが身の上と知らでうたひし

生れ来て四十八年あはれあはれつひにまことの悲しみにあふ

すめ国のためにこそ泣け子らの為に我は泣かじと思ひしかども

昼になりぬまた夜になりぬうつらうつら澄子しのびてただ生きてあり

唐菖蒲だりや山百合花のなかに囲まれて笑む澄子の写真

澄子世をさりにし日よりあめつちのこのしづけさのたへ難きかな

〔瓊音全集〕第四卷

痛切な悲劇に際会して逃げも隠れもせず正面からしかと受け止め、悪戦苦闘の人生を生きる瓊音先生の心中が思はれ、胸塞がる心地がします。

在りし日の幼かった娘の仕草や歌声、愛らしい返事の一つ一つが、父の胸にはますます鮮明に甦る。先生はまことに耐へ難かったことでせう。「うつらうつら澄子しのびてただ生きてあり」と歌ふほかなかつた。この人生の悲劇を胸に刻んで「瑞穂会」を創設し、一高生とともに新国学の樹立に傾注したのです。

ここに言はば私事に亘る歌を紹介するのは、先生の人柄を知って貰ひたいからといふにとどまりません。本当の思想家といふものは、公と私が入り乱れる複雑微妙な人生を生きながら、そこを捩り所に決断を下して行くのだといふ厳肅なる事実に着目したいからであります。まさに人生の悲哀を身に浴びながら決然として起つた沼波瓊音といふ人の悲痛のころざしを偲びたいのです。

利害で結ぶ仲間、目的限定で集ふ団体は先生には無縁でした。祖国の運命を協同して肩に担ふ真実の友を求めて已まなかつた思想家だったのです。

黒上正一郎先生との邂逅 ——「千三百年来唯此一人」——

ところで、瑞穂会の研究内容はこのやうなものであつたか。「会規」によれば、「諸方面ヨ

リ日本文化ヲ研究シ、併セテ広ク人類一般ノ歴史、社会、政治、国際現状等ノ觀察ニ及ブ」といふものでした。先生も例会のたびに講義を担当されてゐます。

この当時の主要な講師陣を列挙しますと、歴史学関係では大森金五郎、本多辰次郎、黒板勝美、山口銳之助、村川堅固など、教育思想や法哲学の方面では入澤宗寿、寛克彦などが講師として参画してゐます。錚々たる講師陣です。

また、聖徳太子研究家の黒上正一郎先生も講師及び学生指導者として加つてゐます。黒上先生は徳島出身の篤学の徒で、阿波商業学校を卒業後、一時銀行に勤務するも数年足らずで退職、日本文化研究を志し、とりわけ聖徳太子の三経義疏を中心に独自の文化論を構築した
在野の研究者でした。

黒上先生は瑞穂会の主要会員の一人梅木紹男つぐお氏の親友でもあり、その梅木氏の紹介で対面、その太子研究のあらましを聞くに及んで瓊音先生は膝を打つて感嘆し、若き指導者として迎へ入れるのです。

この二人の邂逅については、一高生藤井虎雄氏が書き残してゐます。この頃の瓊音先生は病魔に冒されて度々病床に臥す身でした。かうした時、病床にある師を藤井並びに梅木の両学生が黒上先生を誘つて見舞ひに参上する機会がありました。この時の場面を藤井氏は深い

感動を込めてかう記してゐます。

「先生は以前より梅木君の非凡な人物であることを称へられてゐたが茲に先生は其の友、純日本精神研究家黒上氏を知るに至り、氏の聖徳太子研究は千三百年来唯此一人と批評せられたのである。丁度焦慮して居られた際に、先生は黒上氏を得て、どんなにか喜ばれたことであつたらう。先生は余程御安堵された事であつたらうと、自らも亦それを喜ぶ」

（瑞穂会編『憶 瓊音沼波武夫先生』）

同じ頃のこと、教へ子の梶原千代といふ人が瓊音先生宅を訪問した時、かう語つてをられたさうです。

「梶原さん、私は此頃、生命といふものは一代だけではなく、必ず後に伝はるものと思ふ。永遠に残るものだと思ふ。此頃ほんとにさう信ずる……」（前掲書）

時代思潮に対して激しく憤りながらも、瓊音先生には斯くの如き澄み切つた心境が発露し

始めてゐた。おそらくは後事を託すに足る黒上先生や梅木氏ら青年学徒との邂逅のしからしむるところだったはずです。かういふ歌を詠んでゐます。

國思ふ人と語らふその時ぞ我なほ生きてありとぞ思ふ

黒上先生はかくて瑞穂会に身を投じ、郷里徳島と東京を往復しながら、聖徳太子の研究成果を講義する若き指導者となられます。病魔に冒されたみづからの運命を悟りつつあつた瓊音先生にとつて若き黒上先生の参画は、どれほど嬉しかったことでせうか。のち病状がいよいよ悪化したとき、手紙で呼び出した藤井氏に向つて「黒上君を徳島から呼んで呉れ」と懇願されたと言ひます。

かくて、瓊音先生歿後、会員学生諸氏は黒上正一郎先生を指導者に仰ぎ、会名も「一高昭信会」と改め、学風改革の灯火を掲げ続けて行くことになります。

（本稿は合宿時の講義に多少の補足を加へたものです。なほ、これ以降の東京帝国大学「精神科学研究会」、全国組織「日本学生協会」をはじめとする高等教育の学風改革運動の経緯については、せ

ひ小田村寅二郎先生の遺著「昭和史に刻むわれらが道統」をお読み頂きたい。

講話

ふみ

書と、人の声

——み祖のいのちなつかしきかな——

（株）国民文化研究会副会長

（株）宝辺商店相談役

宝 辺 正 久



み霊を祀るとは

寺尾君の自決

吉田さんの戦死

み霊を祀るとは

この合宿教室の開会式は「平時戦時を問はず祖国のためにいのちを捧げられた全ての祖先の御霊に対して」黙禱を捧げるところから始まりました。間もなく行はれ合宿教室恒例の慰霊祭もその御霊たちをお祀りするものです。ここに「御霊に対して」といふのは御霊に向って、いますが如く、といふことです。明治新政府の参議、外務卿で副島蒼海そうかいといふ方がをられます。西郷隆盛と共に征韓論を唱へ、のち明治天皇のお側にあつて永く侍講に任ぜられた方です。その副島蒼海先生の語に、「不誠無物」誠ならざれば物無し、といふことばがあります。が、「若し一の誠といふものが無い時には、君臣もなければ父子もなく朋友もなく、国家もなく神明もなしと言ふことだ」とありますが、御霊に真向ふといふのは、亡き人の「誠」「まごころ」に真向ふといふ心持ではありませんまいか。

明治天皇の御製二首をお配りした資料に書き出しておきました。

のこしおく書をしみればいにしへの人の声をもきくこちして（明治三十七年）

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけり（明治四十一年）

残された書、言葉に、その人の声を聞く心持がすると明治天皇が述懐されてゐるのです。

吉田松陰は刑死の前、江戸獄中から故郷に送られた手紙に、自分の愛用してゐた硯と去年差し上げた手紙を神主（霊代）として下さいと書かれました。まごころの籠ったものにその人の声を聞くと歌はれた明治天皇の御製にひとしほ感ずるものがございます。

聖徳太子の勝鬘經の御注釈の中に全く同じやうなおことばがある、と黒上正一郎先生が言つてをられます。（黒上先生は国民文化研究会の一番最初の起点であつた第一高等学校昭信会の創始者で、昭和五年三十一歳歿。遺著に「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」があります）。即ち、勝鬘夫人の両親が、むすめ勝鬘に手紙を送つて大乘への帰依をすすめたところ、勝鬘はそれを読んで直ちに「我佛の音声を聞く」と返事した。どうして手紙を見ただけで声を聞くと勝鬘は言ったのか、について太子は「声は以て意を伝へ、書は以て声を伝ふ」と注釈された。それを黒上先生は「書の言葉によつて、生きたる人格の声を聞くべきことを太子は示された」のだといはれ、太子は「經典の言葉に生きたるいのちの表現を求め」られたのだ、と繰り返して教へてをられます。私たちは亡くなられた方々の遺された言葉の中にその人のいのちを求



め、いのちに触れたいと思ふ。それがみ霊を祀るといふことであらうと思ひます。

もう一つ付け加へて申しますが、私たちは慰霊祭に当って「戦時平時を問はず」祖国のためにいのちを捧げられた御霊を祀る、と言つてゐます。数多くの戦死者と共に、戦場には立たなかつたけれども、国のいのちを祈り、国を思ひ、国を護らうと、身を顧みずその生涯を捧げた（黒上正一郎先生もその中のお一人ですが）実に沢山の方々が私たちの回りにをられます。最近読んだ本の中に、小林秀雄の言葉が引いてありました。「歴史を貫く筋金は、ぼくらの愛惜の念といふものであつて、決して因果の鎖といふやうなものではない。」——心に響く言葉でした。戦時平時を問はずわが国を一繋りひとつながの歴史として顧みる時、その経過その変化の、原因と結果を鎖で繋い

だものが歴史であらうか。歴史を貫く筋金といったらそんなものではない。そこに生きた人々をなつかしみ、いとほしむ、愛惜の念こそが歴史を貫く筋金だ、と小林さんは言つてをられる。愛惜の念が祭のこころであり、御霊を祀ることは国のいのちに繋る筋金のやうなものです。

寺尾君の自決

先の大戦で亡くなられた私たちの友人、先輩のことを申し上げます。その一人は寺尾博之君、その遺詠一首を書き出しました。

倒れたる友を嘆かずいつの日かあもたどりゆく道と思へば

これは出征する日（昭和十八年十二月十日）の半年前、寺尾君が高知高等学校を出て東大農学部^{農学部}に在学中、佐賀高等学校から東大文学部に学び、夫々母校後輩に信友を求むべく協力し合つてゐた江頭俊一君が病に斃れた。それを嘆き悼みつつ、自分も君の志を継ぎ、一身を捧

げようと述べた歌でありませう。生涯を貫く覚悟を詠ひ上げた歌であつたと思ひます。

私は寺尾君らと一緒に大竹海兵団に入り、海軍予備学生となつたとき別れて、彼は州崎航空隊に行き九州軍需管理部で終戦を迎へます。ここで陸海軍士官数人が結盟して徹底抗戦を計りますが成らず、大詔渙発の大御心を知らされて上官の海軍技術中佐長島秀男さんと共に、八月二十日未明、福岡市南郊、油山の東方に真向かふ草原に坐して割腹自決されました。

遺書に「肇国三千年未ダ夷狄ノ侮リヲ受ケザル無窮国体ヲ防護シ奉ル能ハズ 臣ガ罪当ニ逃ルベカラズ」と言ひ、「大御言葉ノマケノマニマニ国家再建ノ微力ヲ致スベケレドソノ確信無ク 一死以テ臣ガ罪ヲ謝シ奉リ……願ハクハ魂魄トコシヘニ祖国ニ留メテ 玉體ヲ守護シ奉ラム……」とあります。「一死以テ謝シ奉ル」申しわけございません、とのみ念じて自らいのちを断たれたのです。

終戦以来丁度六十年が経ちました。先頃（平成十五年）加納祐五先輩が「すずろごと」（『国民同胞』所載）といふ一文を草されました。

陛下は、戦争終結の詔書の中で、ポツダム宣言受諾を決意した所以と、非命に斃れた国民への御軫念を述べられ、然もなほ「堪へ難キヲ堪へ忍ビ難キヲ忍ビ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」と仰せられた。その上で次のお言葉がある。「朕ハ茲ニ二國體ヲ護持シ得テ」と。

これはどういふことであらうか。それにつづいて「忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ」。このお言葉をよくよく味はひ考へることによつて漸くその深い御心のうちを仰ぎうるやうになるのであった、と加納さんは述べてをられます。続いてかう言はれてゐる。「曠古（こうこ）前例のない）敗戦の日にあつてさへ、陛下の国民に対する御信頼はいささかも揺ぐことなく……国民はこの信頼に必ず応へてくれるのだといふゆるがぬ御確信の表現であると拝受した」と。

「赤誠ニ信倚シ」の信倚とは、信じ寄りかかるといふお言葉です。陛下が国民のまごころに信じ寄りかかると言つてをられる。国民の赤誠、まごころを陛下は確信され、その国民と私は一体であるとお述べになり、そのことこそこの難局の中に護持し得てゐる國體だと表白され、瀬戸際に立つ日本国民にお諭しになられたのだらうと。私はさう理解しながら加納さんの文章を読んだ時、寺尾君の赤誠と、いや果ての願ひが天皇陛下のお胸のうちに抱きかかへられてゐると感じました。

長島中佐と寺尾少尉の「自刃之處」と書かれた五メートルの石碑が今年（平成十七年三月）の福岡地震で倒壊したのを地元の篤志の方が復元して下さいました。私たちは昭和二十年代から寺尾君の慰霊祭を、この油山で、この石碑の前で営みながら、会（国民文化研究会）

を興し、会を続けてきたのです。私たちはその遺書を読み、友の死に繋がらうとするこの歌を詠み、彼の生きたことばを聞かうとしてきたのであります。

吉田さんの戦死

もう一人、吉田房雄さんのことを申し上げます。私が大学に入った年（昭和十七年）の秋、軍服姿の吉田さんを囲んで十数人が写真館で一緒に写真を撮り、上野駅頭にお送りしたのが、吉田さんにお目にかかった最初の最後でした。内地を出立される直前のことだったのかも知れませんが、吉田さんは昭和十三年、新潟高校から東大法学部に進まれ、小田村寅二郎さん（国文研前理事長、故人）、夜久正雄さん（亜細亜大学名誉教授、ご健在）といふ大先輩たちとの中間に在られた方です。国文研の前身・日本学生協会（理事長田所廣泰氏）の創立が昭和十五年ですから、創立時の幹部学生でもあられたわけです。そして十六年秋、田中耕太郎法学部教授の仏領印度支那出張を阻止すべく批判したかどで退学処分を受けられました。遺詠一首をお手元の資料に書き出してをります。

山桜花もろともに散りはてしみ祖おやのいのちなつかしきかな

足掛け五年目にかかる支那事変は、「戦争は本来短期で終結させるべきもの、日清日露戦争の如く」といふ鉄則を顧みようとせず、「体制を改めなければ勝てない」「計画経済体制こそ歴史の必然」といふ硬直した、或る決定的な意図を持った戦争論に導かれる泥沼戦争でした。当時の要路者発言や総合雑誌に氾濫する戦争論、計画経済論、東亜共同体論などは先輩たちが連日、雑誌に講演にその不可を訴へられたことでした。そして十六年十二月、米英に對する戦争が勃発したことは、まさかと思つたほどの衝撃でしたが、同時に天日を仰ぐやうな思ひで「天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐ふメル大日本帝國天皇ハ、昭あまのニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス」といふ御詔勅に感動したのです。同時にハワイとマレー沖海戦の戦果報道があり、全国民また決戦に赴く決意に湧いたのです。然し御詔勅で木端微塵になるはずの戦争論はその骨組みを変へず、長期戦論と計画経済革命路線の不可を訴へ続けられた先輩たちの思想言論戦はいよいよ果敢に展開されたのです。

吉田さんのこの歌は、日米開戦のすぐ後、召集令を受けて宇都宮部隊に入營される三日前の日付（十七年一月二十九日）で先輩小田村さん宛に書かれた手紙に、

「万感交々胸中を去来致しまして言葉もございません。元気にやって来ます」といふことばと一緒に書かれた歌です。

「山桜花もろともに散り果てし」、真珠湾に戦死した特殊潜航艇々長古野少佐の歌「君のため何か惜しまむ若桜散つて甲斐ある命なりせば」は吉田さんの胸中に高鳴つてゐたことであらう。

「散り果てしみ祖のいのち」はこのハワイ海戦とも重なつて、吉田さんが祈念し憶念する日本のいのちそのものだったでせう。この国を護るために、みんな、いのちを捧げた、その一繋りのいのちを「なつかしきかな」といひ、吉田さんは「み祖」の中に帰つていかう、と歌はれたのだと思ひます。

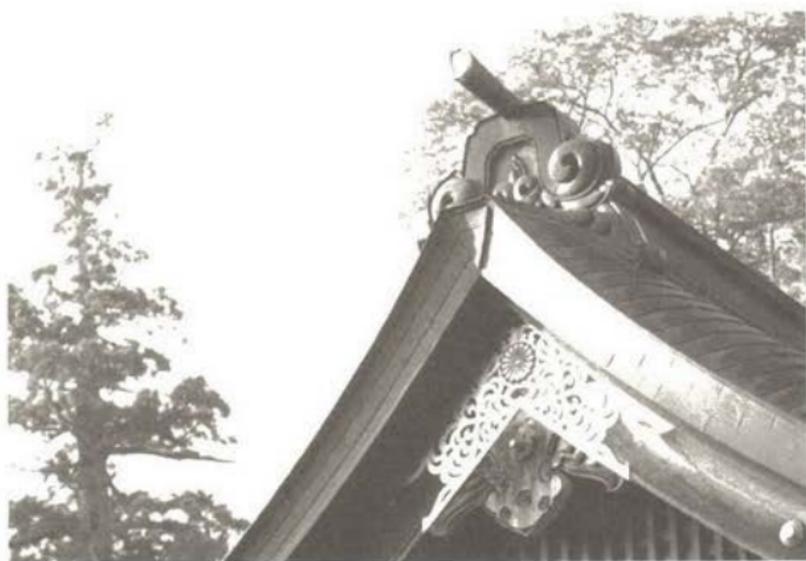
吉田さんは先輩たちと一緒に思想戦線に立つて戦つてこられたから、軍人として戦場に赴く以上のご苦勞を、先輩たちはこれからも重ねてゆかれる。「(私も)元気にやってきます」、万感をこめた吉田さんの、先輩に対するご挨拶だったと思はれます。先輩たちが東京憲兵隊に検挙され、留置され、「精神科学研究所」も「日本学生協会」も解散させられたのは十八年二月から六月の間であり、吉田さんは十九年三月十七日、ニューギニア方面で戦死されたのであります。

會員発表

治己、知彼、応変

防衛大学校教授

太田文雄



ただ今、御紹介にあづかりました太田です。

私は防衛大学の二年生でありました昭和四十二年から三年連続して、この合宿教室に参加しました。卒業後任官してからは、海外にゐたり、あるいは八月の上旬といふ合宿の時期が、ちやうど国家公務員にとって概算要求の最も多忙な時期にあたること等からなかなか全日程参加することが叶はず、短期や、しかも時々参加しかできないまま、今年の定年退官までできてしまひました。しかし振り返ってみますと私にとって、学生時代にこの「全国青年合宿教室」に参加したことは良い意味で人生の転機になつたと思つてゐます。

輪読会について

合宿終了後、地区毎に集まつて、輪読会や勉強会を始めることになると思ひますが、防衛大学の学生は平日外出ができないといふ特殊な事情から、防大だけで勉強会を毎月第三土曜日に原則として行ふことになりました。第一回目の合宿参加後である昭和四十二年の九月、防大の合宿参加者を中心とする勉強会が発足しました。当時、我々を指導して下さったのはお二人をられまして、現在国民文化研究会の理事長であられる上村和男先生と、輪読会で使

用してゐます「組織を生かす」といふ本を書かれた旧陸軍大学兵学教官、岡村誠之先生の御長男であられる岡村健さんでした。この勉強会が今日まで存続してゐる防大輪読会の母体です。従ひまして、防大輪読会の歴史は約四十年近く継続してゐることになります。

今後、皆さんも合宿が修了してから、各大学あるいは地区毎の輪読会などを持たれることと思ひますが、さうした皆さんに私が一つだけ言はせて頂けるなら「継続すること。止めてしまはないこと」といふことです。そのためには、中心となる学生の存在もさることながら、数年で卒業してしまふ学生以外に、一貫して輪読会を見守っていく人が必要となります。私は、任官してから海上自衛官として、勤務場所を洋上に、あるいは全国の基地にと転々としてましたし、さらには長い海外勤務もありました。このため、常に関東に勤務してゐるとは限らず、遠方に勤務してゐるときには、この防大輪読会を存続してくれる人が必要でした。これを補つて頂いたのが、今は亡き陸軍士官学校五八期の松吉基順もとのおぶ先生や、現在防衛施設庁に勤務してゐる山根清さん達でした。皆さん、「継続は力なり」です。一度止めてしまふとなかなか次に再開できにくくなります。このことをまづお話ししておきます。



「己を治め、彼を知り、変に応ず」

さて本題に入りますが、題目に掲げました「治己、知彼、応変」といふ言葉は、吉田松陰先生の御言葉で、私はこれほど兵法の根本原則を簡潔に言ひ表した言葉はないと思つてゐます。松陰先生も、一向宗の「南無阿弥陀仏」同様、これを「六字の名号」と呼んで兵法の根本的信条としてゐましたが、そこに松陰先生の並々ならぬ確信を感じます。この根本原則は、単に国家同士の戦ひのみならず、スポーツなどの競技、あるいは受験等全ての人生の戦ひに適應できる原則でもあると私も確信してゐます。

「口」を治める」

「口」を治める」とは「正道に随つて自分、自国を強める」といふことです。戦略であれ兵法であれ、その舞台裏は実に簡単な事実しかありません。それは「強者が弱者に勝つ」といふことだけです。従つて国家間の戦争でも個人のスポーツや受験でも、戦ひに勝つためには我を強くするか、敵を弱くするか、あるいは第三者を味方につけるか、といった方策があります。このうち敵を弱めたり第三者を味方につけるといふことは、自分や自国だけの努力では難しく、自分だけでできるのは自分の実力を高めることが最も近道です。これは当たり前前のことですが、兵法の原則などといふものは、当たり前前のことを当たり前に行ふこと以外にありません。この当たり前の原則を孫子の兵法では「経」といふ言葉を使って始計篇第一に述べてゐます。そしてさらに軍形篇第四で、「勝兵は先づ勝ちて而る後に戦ひを求め、敗兵は先づ戦ひて而る後に勝を求む」とも言つてゐますが、試合でも受験でも「必ず勝てる」といふところまで自己を強くして勝負に臨めば、間違ひなく勝利を治められますが、勝てるかどうか判らないけれども一か八かやってみようといった態度では成功はおぼつかないこと

を示してゐます。私が学生時代から稽古をしてゐます剣道でも「勝つて打て、打つて勝つな」といふ言葉があります。氣勢を充実させて中心をとり、今打てば必ず一本とれるといふ体勢で攻撃を仕掛ければ有効打突となりますが、当たるかどうかわからないけれども取り敢へず打つてみようといふ気持ちで打つても、一本になることはおほつかないといふ意味です。

国家に関して言へば、日本は素晴らしい歴史と文化を持つてゐるのに、残念ながら、それを自覚してゐない国民が多いのではないでせうか？ 例へば、今年、私は日本海海戦勝利（日露戦争）百周年である五月末、南米のチリに呼ばれました東郷平八郎元帥について話をしてきました。これは、チリのアンデス大学が日本海海戦百周年、トラファルガー海戦二百周年を記念し、日本の東郷元帥、イギリスのネルソン提督、そしてチリ海軍の英雄アルツール・プラットの三人の人柄を偲ぶ国際シンポジウムを企画したのです。アンデス大学は私立大学ですが、数百人の聴衆を目の前にして思ったことは、東郷元帥を輩出した本家である日本の一体どこの大学で、このやうな試みを考へた所があつたか、といふことです。この合宿教室のテーマの一つであります「国の歴史と文化をより深く理解する」ことよって日本の素晴らしさを認識し、それが自分の国を正すといふことに繋がると思つてゐます。

「彼を知る」

次に「彼を知る」とは「敵情や置かれた環境を知る」といふことです。私は数日前まで伊豆の下田に約一週間をりましたが、吉田松陰先生が下田に來航したペリー艦隊の船に乗り込んで海外渡航を企てたのは、この「彼を知る」といふ強烈な動機に駆られたからではないかと推測してゐるところです。

この「彼を知る」ためには、いはゆる情報（インテリジェンス）の収集・分析が必要です。

これは要するに「我は良く敵の状況がわかるけれども、敵からは我の状況が良くわからない」、平たい言ひ方をすれば「目の見へる人」と「目の見へない人」との戦ひにするといふことです。孫子は、始計篇第一では「計」といふ字を使って、「仕事を始めるにあたっては、その仕事に關係のある総てのデータを正確精密に知り検討し考察せよ。それをやらぬと必ず失敗するぞ」と諭してゐます。そして、孫子の最終篇である十三篇はインテリジェンスを扱った用間篇ですが、この用間篇の最後は「（インテリジェンスは）兵の要にして、三軍の恃たもみて動く所なり」といふ言葉で締めくくられてゐます。

さて「彼を知る」といふ作業をするに当って、最も大切なことは、あたりまへのやうです。自分の国、祖国・日本のためには今どのやうな情報が必要か？ また、どのやうな情報を漏らすと祖国・日本のためにならないか？といふ原点です。この祖国に対する忠誠心なくしてまともなインテリジェンス活動はありえません。この祖国に対する忠誠心は、私の場合はこの合宿教室を通して若いときから培はれてきたやうに思ひます。

合宿教室のテーマにあります「世界における日本」といふことに関して、今日の我が国あるいは国民に対する懸念を、そのエッセンスだけを述べるとすれば、ここ十年間、従来型の国家だけでなく非国家主体の脅威についても考慮しなければならぬ時代になってきてゐるといふことを申し上げたいと思ひます。非国家脅威とは、国際テロ・大量破壊兵器の拡散・海賊・サイバー攻撃といったもので、現在世界の多くの地域では、この非国家脅威を最大の脅威としてゐます。かうした非国家脅威の特徴は何処にゐる誰かが良くわからないことで、そこがこれまでの伝統的な国家脅威と異なるところです。そして今後の注目点としては、テロリストと大量破壊兵器が結びつくかどうか、といふところです。ある意味で、平成七年三月の地下鉄サリン事件などは、化学兵器と非国家脅威が結びついた事件でありましたし、アメリカで発生した炭疽菌入りの郵便物といった生物兵器使用のテロもありましたが、放射線

物質をまき散らす「汚い爆弾 (Dirty Bomb)」をも含めた核兵器等大規模殺戮兵器をテロリストが使用したといふケースは今のところ顕在化していません。しかし、私がワシントン駐在の国防武官をやつてゐました平成十年頃から、専門家の間で言はれてゐた言葉は、「Not if when」即ち、「もし起つたらではなく起きることは明白で、それが何時起きるかが問題なのだ」といふことが常識化してゐましたので、テロと大量破壊兵器が結びつくことは時間の問題なのかもしれません。

しかし北東アジアでは、依然として朝鮮半島あるいは台湾海峡における緊張等冷戦時代の残滓が残つてゐます。逆に言へば、我が国は十年前まで、この従来型の国家脅威のみに直面してゐた訳ですが、大量破壊兵器とその運搬手段の開発、そしてそれらの拡散、あるいはサイバー攻撃に関しては、非国家主体と国家主体の両方が引き起こしてゐるといった状況を呈してゐます。

「変に應ず」

最後の「応変」ですが、これは「敵及び味方の情勢の変化に応じて、適切な対策を立てる」

といふ意味です。「変」とは空間的に特殊性・差異のことですが、時間的には事象の変化です。孫子の兵法、始計第一篇では「権」といふ字を使って示してゐますが、権とは竿秤の分銅のことであり、測る対象に応じて変化させるといふ意味です。孫子は虚実篇第六で、「兵の形は水に象る」と言つて柔軟自在な思考力の大切さを示してゐますが、これは今日で言ふところの「創造力」でせう。この変化に対応してついでいく柔軟な創造力について、私の体験から言へば、この合宿のテーマの一つである「古典や短歌を通じて育まれる豊かな感性」から発達してきます。普通の人が見逃すやうなほんのちよつとした事象から全体の変化を察知する感性は「応変」の源であり、そこには「一葉落ちて天下の秋を知る」的感性が求められてくるのです。

最大の眼目

さて「治己、知彼、応変」の三項目のうち、何が最も大切かといへば、それは紛れもなく最初の「己れを治める」です。己を治めることによって彼を知ることにも変に応ずることも立派に成し遂げられます。松陰先生の兵学上の師でありました山鹿素行も「兵法の奥義は己れ

に克つにあり」と喝破してゐます。これは組織体の幹部としても、自己の内心における使命感の確認と任務遂行の熱意、そして外にあらはれる部下への愛情、規律、闘志がなければ満足なりダーシツプはとれないでせう。私の約四十年にわたる自衛官生活を通して言へますことは、部隊指揮官に問題のある部隊は、隊内に規律違反事故が絶えない、といふことです。さらに推し進めて、人物に問題があるかを評価する基準について申し上げれば、人類数千年の歴史によって審判を下された立派な人物とは、決して高位高官にいたり、巨万の富を築いたり、有名人であつたりした人ではなく、世のため人のため、祖国のために己を捧げた人を言ふのだと思ひます。

国の興亡史をつぶさに見てみますと、国家滅亡の原因のほとんどが外敵よりも国内問題にあつたことから、国防の根本は国内問題、さらに言へば国民一人一人に根ざす精神にあると言へます。この国民精神を学ぶことこそが、合宿教室の眼目であると思ひます。大正から昭和にかけて地質学者として活躍されました河村幹雄博士は「国防の枢機は教育にあり」と看破されてゐますが、健全な国民精神を培ふことこそが己を治める基本であると思ひます。

をはりに

さて、私は今年（平成十七年）の一月に三十九年にわたって着てゐた制服を脱いで退官した訳ですが、第二の人生を歩むに当たって、「軍人の後半生はこのやうな生き方をしたいな」と現役のときから考へてゐた人がゐます。それは、日本海海戦で東郷艦隊の作戦参謀であつた秋山真之のお兄さんである秋山好古將軍です。秋山好古將軍は、日露戦争では満州の平原でロシアのコザック兵と戦つた騎兵將軍であり、退官時は陸軍の教育總監でした。教育總監といつても今日ではあまり馴染みがないかもしれませんが、当時は陸軍三長官と言つて、陸軍大臣、参謀総長に並ぶ重職でありました。その陸軍大将閣下が退官後どうしたかといへば、故郷の愛媛に「戻り一介の中学校の校長になつたのです。この生き様を見まして「地位も財産も度外視し、ひたすら後進と故郷を愛し、祖国のためを思つて余生を捧げる。これぞ軍人の後半生だ」と思つてゐました。

今年の歌会始のお題は「歩み」でありましたが、それに詠進した私の短歌をお示しして、今日の話締めくくらせて頂きます。

余生もて母校に戻り若きらと共に歩まむ国靖かれと

本日、冒頭で御紹介いただいた際に私の著書『情報』と『国家戦略』について触れていた
だきましたが、時々「この本を読みました」と言って、私の部屋に尋ねてくる学生が
あつた。さうした学生と話した後、その学生から、「先生との出会ひが、私の人生にとつて
転機になりました」といったメールをよく貰ふことがあります。現在二十歳前後の学生
ですが、この人たちが二十年後、三十年後の日本の国防を背負つていくのだと思ふ時、
母校で後進を育成する道を選んで本当に良かったなと思ふと共に、教育の根本は「愛」
にあると痛感する毎日です。教育者が、学生や母校への愛情なくして立派な教育が
できる筈はなく、ここに本日お示しした三項目のうちの根本原則である「己を治める」といふ意味をあらためて
噛み締めてみるところです。

御静聴ありがとうございました。

会員発表

他と共なる生き方を求めて

——工業高校の生徒と

明け暮れる日々——

富山県立富山工業高等学校教諭

岸本 弘



はじめに

僕は昨年の阿蘇合宿から、この伊勢合宿に至る一年間の歩みの中で、お互ひに心を傾け合ってお付き合ひいただいた学生諸君の中のお一人、安田陽子さん（北大三年）に司会をしていただいでここに立てたことを大変嬉しく思つてゐます。僕は昨年、安田さんが所属する十三班の班付をさせていただいたわけですが、この十三班には女子学生諸君が七名おりましたので、「七媛女」といふ名前の交流報も発行しながら付き合ひを続けて来しました。そして安田さんをはじめとして五名の方に再びこの合宿に参加していただきました。

このやうに、この合宿教室で知り合へた仲間が、その後も交流を続ける中でお互ひの思ひを深め、自分の心にあふれてくる思ひがあれば、それをまた新たな一人の友に伝へずにはゐられなくなる。さうした原点にあるのがこの合宿教室であると思ふのです。

工業高校の生徒と明け暮れる日々

さて、サブタイトルを「工業高校の生徒と明け暮れる日々」と題させていただきましたが、僕は富山県の富山工業高校の教員です。そして今、来春の定年退職にいたる最後の一年を過してゐます。そのことから「明け暮れる」といふ現在進行形で書かせていただいたといふことになります。

僕は、この富山工業高校の教員生活で、二つの核をもつて努めてきました。一つは、富山工業高校金属工業科の教員といふことで、「金属工業科の生徒との付き合い」、今一つは、長く剣道部の顧問をしてきましたので、「剣道部の生徒との付き合い」、この二つのことが僕の今日までの教員生活を支えてくれました。同じことは生徒に対しても言つてゐます。「君らも高校生活の中で、何か一つ、それは何でもよいから、中心になるものを持った方がいいよ」と語りかけてゐます。

金属工業科の生徒との付き合いでは、僕が鉄のことを好きだといふことを生徒たちはよく知つてゐて、「岸本先生と言へば鉄だ」、「鉄と言へば岸本先生だ」といふやうな過大評価を



もってゐるやうです。まあ僕自身は、鉄が好きだといふことだけであつて、それほど大した知識があるわけでもありませんので、嬉しいやうな、ちよつと困つた思ひもあるのですが、自由研究である課題研究などで、「今年は浜黒崎の砂鉄から鉄を作る、古代製鉄『たたら』をやるよ」と言ふと、僕のところ
に希望者が多く集まり過ぎて困るといふやうなこともありました。

また、五月から六月にかけての暑い時期に、ちゅう鉄溶解といふ実習を三年生と行ひましたが、これは、千三百度から千四百度の鉄が実際に流れだしてくるといふ、ある程度危険性も伴ふ実習です。それでも僕が一番熱い炉前に立つてゐること、生徒たちはある程度安心感を持って、コークス投入作業に當つたり、かなり熱くて重いくわ鑄込み作業に當つてくれる

ことになります。

また剣道部の生徒との付き合いでは、いろんなことがありすぎて、何から話せばよいのか分りませんが、ついこの前の夏合宿では（僕にとっては最後の夏合宿になりますが）、僕も生徒と一緒に夏合宿恒例の九キロマラソンを走りました。夜のOBとの稽古会では、三十名を超えるOB・OGが集まってくれました。中には幼子を連れた若い母親のOGも何人かいました。高校時代の思ひ出の一角に今も僕がゐるといふことが、卒業生にとってはとても嬉しいことのやうです。

若き日の思ひ

本題に入る前に、今一つ付け加へておきたいことがあります。それは僕の前に登壇された太田文雄さん（防衛大学校教授）とは、忘れがたい大学四年の合宿で班を同じくしたといふやうなことからも、しみじみと思ひ起こされることですが、若き日の思ひといふものは、決してかりそめなものではないといふことです。

それは最近、若い頃に自分が書いた文章を読み返しながら、はっとさせられることがよく

あります。自分は、若い頃の自分に今勝てないのではないかと思ふことがよくあるのです。そして僕は今、どうすれば若い頃の自分に勝てるのだらうかと、自分を叱咤し続けてゐることも申し添へておきたいと思ひます。

他と共なる生き方を求めて

さて工業高校の生徒との付き合いの中で、常に僕の心を離れなかつた思ひを一つの言葉で表現するとすれば、それは今回僕の話のタイトルとさせていただいた「他と共なる生を求めて」といふことになると思ひます。簡単に言へば、何事も生徒と一緒にやっつてゆかうといふことになりましたが、長い教員生活を振り返つても、そのことは決して簡単なことではなかつたと、さまざまな思ひ出と共にその言葉の重みをかみしめてゐます。

そしてこの言葉は、僕自身の言葉ではなく、これからご紹介したいと思つてゐる「太子の御本」(正しくは「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」といふ書名)の著者・黒上正一郎先生のお言葉です。この御本の中で、「他と共に生きる」といふことは、「群生ぐんじやうと共なる生」、「蒼生そうせいと共なる生」といふやうなご表現で繰り返し出てきます。この「群生」とか「蒼生」といふ言

業はいづれも具体的には国民を指すものとみてよいと思ひます。また「生^{せい}」といふのは、僕は「人生」或ひは「人の生き方」と受け止めてゐます。

また本日、皆さんにお配りした『太子の御本輪読の手引き』といふ冊子は、本会の前理事長であられた故小田村寅二郎先生が、この「太子の御本」の第四編について、昭和四十二年に行はれたある女子学生達の小合宿で、ご講義をされた講義録を復刻したものです。

これは、本日司会をしていただいてゐる安田陽子さんに、約一ヶ月をかけてワープロで打ち上げていただいたといふやうな、献身的な作業があつて完成したものです。また製本については富山に在住の女子学生諸君に手伝つていただきました。若い方々の協力を得てこの冊子が完成したことを、僕は本当に嬉しく思つてゐます。それは「はじめに」のところ述べてたことと全く同じ思ひからですが、黒上先生や小田村先生の素志の継承に、若い方々にも何らかの形で関はつていただくといふことがなければ、この合宿教室が目指してゐる活動もいつかは途絶えてしまふわけで、常に若い方々と共に歩むといふ基点が、この合宿教室には求められてゐると思ひます。

國家の事業を煩となす

さてこの冊子の中で、小田村先生が特にお心を傾けて解説されてゐるところの一つに、「國家の事業を煩となす但大悲息むことなく、志益物を存す」といふ『維摩經義疏』の中の聖徳太子のお言葉があります。聖徳太子は、推古天皇の摂政であられたことは皆さんもよくご存知のことですが、天皇に代つて国政を総攬される摂政といふお立場は、今の総理大臣よりもつと重いお立場と考へてよいでせう。

その聖徳太子は、國家の事業に取り組まねばならないご自分のお立場を「煩となす」（煩はしいなあ）と告白されるのです。しかし「大悲息むことなく」（仏が衆生を救済しようとする心に倦むところがないやうに）自分もまた「志益物を存す」（生きとし生けるもの、即ち国民のためになりたいといふ思ひを捨てきれないが故に）そこから逃れることはできない。

聖徳太子のお言葉には数多く接してきましたが、今あらためてこのお言葉に接しますと、これほど聖徳太子ご自身のお立場についての思ひを、率直に披瀝されたお言葉も少ないのではないかと思はれます。学生時代から、意味もよく分つたとは言へないままに「太子の御本」

には惹かれるものがありました。それが何故であつたかといふことの一端をここにも見る思ひがするのです。

勝鬘は是れ我が女なり

限られた時間の中で、この『太子の御本輪読の手引き』の本文にほとんど触れることができないのはまことに残念ですが、次に、後ろの方で、小田村先生がこの冊子のできたいきさつについて書いてをられる「以上を書き終えてあとがき一筆」を見てみたいと思ひます。小田村先生は御長女の静代さんとコタツを囲んで、二晩でこの冊子を書き上げられるわけですが、父娘向ひ合つての徹夜の作業の中で、小田村先生の頭の中を駆けめぐつたのが、勝鬘しょうまん経義疏の中の太子のみ言葉「勝鬘しょうまんは是れ我が女むすめなり」であつたやうです。

勝鬘といふ女性むすめは父母の手紙に機縁を得て大乘の教へに目覚めてゆくのですが、その娘・勝鬘に寄せる両親の思ひが、あらためて「勝鬘はこれ我が女なり」の言葉として発せられるのです。「勝鬘は確かに私どもの娘である。あの勝鬘であればきつと……」といふ思ひがこめられてゐるのでせうね。

小田村先生は静代さんと向ひ合ってお仕事をされてゆく中で、自づと太子のかうしたお言葉に心を向けてゆかれるのですが、僕らの学問といふものも、しつかりと身近な現実生活を見つめる中に、その機縁が見えてくるものでありたいと思ひます。

大御姿はたゞちに仰ぎまつらざれども

また黒上先生は「(聖徳太子の) おほみすがた 大御姿はたゞちに仰ぎまつらざれども、おほみことば 大御言葉のたかきしらべは、とこしへの世を照します おほみごころ 大御心を、さながらに我等が胸に戴きまいたつるのである」ともお書きになって、この同じ第四編の中に、明治天皇の御製や『萬葉集』に収められてゐる防人の歌をご紹介になつてをられます。

明治天皇御製

ふみをひらきてむかしをおもふ
披書思昔

のこしおく書をしみればいにしへの人の声をもきくこゝちして

(明治三十七年)

披書知昔

あらはし、書を教へとなしにけりむかしの人のこゑはきかねど

(明治四十二年)

歌

まご、ろをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり

(明治四十一年)

また『萬葉集』の防人の歌では

忘らむと野ゆき山ゆきわれ来れどわが父母はわすれせぬかも

あきのをのほけとまろ
(商長首麻呂)

右の防人の歌は、僕が大学二年の時にはじめてこの合宿教室に参加してめぐり合った、忘れることのできない『萬葉集』の一首です。どれだけ時代を隔てやうとも、心にひびく歌のあることを、何の説明も要せず受け止めることのできた歌でした。

僕にとつての「古事記」

同じことは僕の心の中に生きつづけてゐる古事記の物語についても言へることです。僕は富山大学を卒業した次の年（昭和四十三年）に、富山大学信和会の合宿で廣瀬誠先生から、次の「古事記・倭建命の物語」をお聞きしました。僕にとつてははじめての「古事記」のお話で実に鮮烈な印象を受けました。その一節を読み上げてみます。

能煩野のほに到りませる時に、国思しのばして歌よみしたまひしく

倭は 国のまほろば たたなづく 青垣あおかき 山隠こもれる 倭し うるはし

また歌よみしたまひしく

命の 全けむ人は 豊薦たみこも 平群へぐりの山の 熊白くまかし禰が葉を 髻うす華に挿せ その子

この歌は国思しのび歌なり。また歌よみしたまひしく

愛はしけやし 吾家わがやの方よ 雲居くもゐた起ち来も

こは片歌かたうたなり。この時御病みやまひいとしや甚急になりぬ。ここに御歌よみしたまひしく

嬢子の床の辺に 我が置きし つるぎの大刀 その大刀はや
と歌ひ竟へて即ち崩りたまひき。

廣瀬先生の、一つ一つの言葉のはじけるやうな口調と共に、今も懐かしく、僕はこの節を思ひ起こすことが出来ます。

をはりに

以上、ここでお話し申し上げたことは、僕の気持ちの中では、すべて「他と共なる生を求めて」といふ思ひから発することなのです。生徒との付き合いも、この合宿で出合った学生諸君との付き合いも、またはるかに時代を隔てた防人や、『古事記』に現れた民族の英雄を親しみをもって身近に感じることも、自分といふ一人の人間の同じ心の営みから生まれて来るのです。

そしてその、いづれの対象一つを考へてみても、自分に親身になつて付き合いはうといふ気持ちが必要ならばうまくゆかないのです。目に見えるものも、目に見えないものも、こちらか

ら親身になって語りかけなければ、答へてくれることはないと思ひます。聖徳太子のお言葉を仰ぎながら、黒上先生や小田村先生が、切実な思ひで訴へてをられることもそこにあると思ひます。

ここまで語りながら気づくことですが、「他と共なる生を求めて」の「他」とは、自分と対立するところの「他」ではなく、「自分をあたたかくつつんでくれる」ところの「他」であることをしみじみと感じます。

ご清聴ありがとうございました。

短歌入門

短歌創作導入講義

榊みずほコーポレート銀行

小柳 志乃夫



- 一、はじめに
- 二、作歌の心構へ
- 三、短歌のつくり方
- 四、短歌創作の意義
- 五、短歌の鑑賞

一、はじめに

この合宿では全員が短歌を創作することになってゐます。皆さん、短歌についてどういふイメージをお持ちでせうか。百人一首のやうな難解な言葉や言葉遊びなどをイメージされる方もゐらっしゃるでせうが、短歌の世界はもっと広やかなものです。短歌を作らうといふ意志があれば、歌は誰でも作れるのです。

広辞苑で「短歌」と引くと、「和歌の一体。長歌に対して、五・七・五・七・七の五句体の歌。記紀歌謡末期・万葉集初期の作品に成立、古今を通じ最も広く行われ、和歌といえは短歌を指すに至った。みじかうた。」と書かれてゐます。日本の最初の短歌は昨日松浦光修先生が紹介された須佐之男命の詠まれた「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」といふ歌で、八俣の大蛇を退治して櫛名田比売と新婚生活を始められた、そのときの喜びの歌です。神様が新婚の喜びを歌ひあげられたのが、短歌の最初なのであって、「古今を通じ最も広く行われ」、老若男女、皆がさまざま喜びや悲しみを詠んできた、広やかな、楽しい世界が短歌の世界なのです。

歌は楽しいものです。しかし、この合宿で歌の勉強をしようといふのは、単に、皆で楽しい、いい趣味をもちませうといふことではありません。短歌を作るといふのはもっと深い意味合ひがあるのです。この点で、一つのエピソードを紹介したいと思ひます。

これは、昨年の合宿で長内俊平先生が紹介されたお話ですが、昨年（平成十六年）十月に九十八歳で亡くなられた副島羊吉郎先生が学生のと時の話です。昭和三年の春休みを利用して、当時、東京高等師範学校の生徒だった副島先生が四国のお遍路参りに行かれたのですが、郷里の先輩の紹介で徳島在住の黒上正一郎先生を訪ねられた。この黒上先生といふ方は、国民文化研究会の源流を形作られた方で、当時数へ年二十九歳だったので、始めて会った副島学生の前で、挨拶もさうさうに短歌を読み上げられた。それが、レジユメに書いてある次の歌で明治天皇の御製です。

薄暮眺望（明治三十七年）

家なしと思ふかたにもともしびの影みえそめて日はくれにけり

山家燈（明治四十一年）

ともしびのたかきところにみゆるかなかの山べにも人はすむらむ



よく味はってください。このときのことを副島先生は「私がかつて故郷の河の橋の上に立って幾度か眺めた、暮れ行く山々の景色をまざまざと眼に浮かべて、感極まった。私はその時はじめて和歌の素晴らしさを、自分の肌で感じ取ることができた。小学校国語読本にも御製は十首位出てゐた筈であるが、それまでこのやうな感動を受けたことはなかった。これが私の和歌との出会ひとなった」と記されています（『日本への回帰』第四十集二一九頁参照）。都会に住んでゐても、夕暮れの空を見ると、人恋しい、懐かしい思ひがするものですが、副島先生は「暮れ行く山々の景色をまざまざと眼に浮かべて、感極まった」と書かれてゐます。その景色とともに、その自然の中に暮らす人々に注がれる明治天皇の深い御心

が、黒上先生の声を通して、副島学生の胸にまざまざと感じられたと思へるのです。この感動は副島先生の一生を定めたやうに思ひます。

歌といふものは趣味的なものではない。もっとと人生の奥深いところにふれる、豊かな世界があるといふことを、ここではご理解いただきたいのです。

二、作歌の心構へ

短歌の勉強に当たっては本合宿の必携書である『短歌のすすめ』（夜久正雄・山田輝彦著、以下、「すすめ」と略記）を是非お読みいただきたいと思ひます。本日もこの本を引用しながら、ご説明したいと思ひます。まづ、最初に作歌の基本的な心構へについて、明治天皇の御製をご紹介します。

をりにふれたる（明治四十五年）

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも

さきほどご紹介したのも、明治天皇の御製でしたが、明治天皇はご生涯に九万三千首もの御歌をお詠みになり、歌の道、所謂「しきしまの道」に生涯ご精励になった方なのです。その明治天皇が最晩年の明治四十五年に、歌についておよみになったのが、この御製であり、ここに作歌の基本を示されてゐます。

歌をうたふ場合には、何を、どううたふか、が問題ですが、この御製はその点について、「おもふこと」を「思ふがままに」うたってみよう、とおさとしになってゐます。「おもふこと」とは、いひかへれば、自分の体験の中から題材を選ぶ、といふことになりませうし、「思ふがままにいひてみむ」とは、そのころのありのままを素直に詠んでみようといふことでせう。さらに、「歌のしらべにもならずも」とあるやうに、うまく作ることが目的ではないので、オーバーな表現やムード的な表現は慎むべきだと思ひます。

すなはち、自分の心が動いた体験——できるだけ切実な感動——を、素直に、正確に、さらにいへば、まじめに、詠むことが作歌の基本になります。

もう一つ作歌の上で注意しておきたいのが、歌は感情を詠むものであつて、理屈は歌にならないといふ点です。この理屈の排除を徹底して主張したのは明治時代に短歌革新を行った正岡子規です。例へば、幕末明治の有名な歌人が詠んだ歌に、

芳野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは桜なりけり

といふ歌があります。芳野山は奈良の吉野のことです。この歌を子規が批判してゐるので、子規は「霞の奥は知らねども」といふ表現が理屈だといふのです。作者の感動は全山が桜でおほはれてゐる、その美しい光景にあるのでせうが、素直にさう詠みあげずに、「山にたなびいてゐる霞の奥は知らないけれども」と付け加へた。それは、いはば後知恵であつて、直接の心の体験ではないのです。

さうすると、皆さんにとって、感動とは何か。心が動くとは何か、題材を何にとるかはお悩みになるところかもしれませんが、あまり難しく考へる必要もないと思ひます。『ああ、いいなあ』といった感慨があればよいのです。皆さん、この合宿に参加されて、最初は不安もあつたでせうし、班で初めて出会つた人との会話の中にはつととするやうな思ひを持つたり、或いは、先生方の熱のこもつたご講義に心動かされた方もをられたでせう。今朝の神宮の早朝参拝でも、『美しいなあ』と心洗はれる思ひもされたことでせう。さういった感慨をそのまま歌つていただければよいのです。

次にご紹介する歌は、さういふ点で、実に素直に思ひを詠みあげられた歌で、私の好きな歌です。今回はご参加になつてゐませんが、国武忠彦さんといふ先輩（現在、昭和音楽大学教授）が学生時代、この合宿教室から帰つた後、自分の大学の仲間たちと合宿を行ひ、ガリ版刷りで記録をつくつた。そのときの編集後記に記されてゐた歌です。

僕たちはやれないことをやってみたやろうとすればやれるのだなあ

友達と合宿を開き、立派な記録を作つた。そのときの喜びを、子供のやうな、実に素直な言葉で歌に詠んでをられる。この歌に、作者のこころの美しさを思ふのです。

三、短歌のつくり方

次に、具体的な歌の作り方についてご説明したいと思います。まず、「一首一文」、即ち、一首が一つの句点で結ばれる一つの文章であるといふのが短歌の原則です。これに対して、俳句は「二句一章」、即ち、一首二文を原則とします（「すすめ」四五頁）。

例へば、万葉集の防人の歌に

忘らむと野行き山行き我来れどわが父母は忘れせぬかも

といふ歌があります。東国の若い農民が祖国防衛のために徴用され、九州に派遣される。その長い旅において、忘れられない父母の姿を思って詠んだ歌です。この歌は一首一文ですが、この歌の焦点は「わが父母」といふ一点にある。

これに対して、例へば「荒海や佐渡によこたふ天の川」といふ俳句は、「荒海や。」で切れる一首二文であって、荒海と天の川という二つの異質なものの対比の中に世界を詠んでゐる。この点で、俳句はより知的なものでもあるわけですが、短歌では焦点を一つに絞って、まっすぐに詠むことが大事です。

焦点が一つであるといふことは、心が動いたその瞬間に集中して、その動きを具体的に詠むといふことであり、それがいい歌をつくるポイントになると思ひます。これが具体的になく、概括的になるとどうもダメです。平和を守らう、国を愛さう、いづれも概括です。さうではなくて、平和のありがたさをしみじみ感じた瞬間や国のことが思はれてならない、その

心の動きの瞬間、そのときに、歌ができるのだと思ひます。歌はいのちをとらへるものであり、動きをとらへるものなのです。

以上の点からみて問題がある歌を紹介します。これは「すすめ」(二六三頁)で取り上げられてゐる斎藤茂吉の歌です。

おのが身しいとほしきかなゆぐれて眼鏡のほこり拭ふなりけり

この歌は「おのが身しいとほしきかな」と「ゆぐれて眼鏡のほこり拭ふなりけり」といふ二つの文からなつてゐます。この歌の感動の焦点が私にはどうもわからないのです。皆さんはわかりますか。病氣であれば「おのが身しいとほしきかな」といふ表現も不自然ではないでせうが、めがねを拭く行為とわが身いとほしさのつながりがわからないのです。何か勇気を奮つて事を行はなければならぬのにわが身がいとほしくてできなかった、といったことであれば想像ができませんが、その場合は「おのが身しいとほしきかな」といふ露骨な表現は生れないでせう。

以上のやうに、一首一文が短歌の原則なのですが、一首二文でもいい歌はあります。最初

にご紹介した、明治天皇の「ともしびのたかきところにみゆるかなかの山べにも人はすむらむ」といふ御製も二文です。ただし、ここでは、茂吉の歌と違って、統一された感情、精神の集中があるわけです。だからこそ我々の心を強く打つのだと思ひます。

○

一首に盛り込めない感動は連作にできます。その例をご紹介します。

富山県小矢部市 岸本 弘

新潟中越地震生存者救出作業をテレビにて見て（十月二十六日・二十七日）

崩れ落ちし岩の下にもなほ人の生きてありやと搜索つづく

崩落の危険迫るもかへりみず救助作業にあたる人らは

人の命の尊きことを今さらに思はしめられテレビに見入る

奇跡とはかからむことか岩陰に幼きいのち助け待ちをり

人みな願ひむなしく幼子の母の命はつひに帰らず

今一つ残る命を救はむと冷えまさる夜も搜索つづく

なきがらを取り出すこともかなはずに岩間に眠る姉の子あはれ

一つぶの命全けく残れると亡き母と子に告ぐるすべはや

〔「短歌通信」三〇号（平成十六年十一月五日）より〕

新潟県中越地震のことがまざまざと思ひだされますね。一首一首に作者の思ひがこもってゐて、救助作業に携はる人の労苦への思ひ、幼児発見のときの感動、母とまた姉の死を悼む思ひ、それらが、食ひ入るやうにテレビに見入る作者の姿と重なって浮かんでくるでせう。

この連作を用ひて、もう少し短歌創作の技術的なお話をしておきませう。

一つは、説明的な部分は「詞書」を使ふ、といふ点です。この連作の「新潟中越地震生存者救出作業をテレビにて見て（十月二十六日・二十七日）」といふ点が該当します。

次に、「字余り」と「字足らず」です。「五・七・五・七・七」のうち、五が六になったり、七が八になるのが字余り、逆に五が四になったり、七が六になるのが字足らずです。結論的にいふと、字余りはある程度許されますが、字足らずは短歌のしらべをこはしてしまふので避けるべきです（「すすめ」六八頁）。この連作では、一首目の「崩れ落ちし」が六音で字余り

ですが、あまり気になりません。

さらに、なるべく口語より文語を用ゐるといふ点です。深い感動を表すには文語の方がいいのです（「すすめ」五二頁）。この連作の一首目は、口語で詠めば、「崩れ落ちた岩の下にもまだ人が生きてゐないかと搜索つづく」となりませうが、比較していただくとやはり口語では平板になってしまひます。

このほかの留意点としては、短歌の書き方は、一行、縦書き、歴史的仮名遣ひで書くべきですし、短歌の読み方については、声をあげて一息で読み、短歌のリズムとしらべを自分のものにするのが大切だと思ひます。これらは、一首一文といふ原則ともつながってくるものです。



以上にお話した短歌創作の方法をまとめると、作歌の過程は概ね次のやうな図にまとめることができると思ひます。

〈まとめ〉



「心がうごくこと」が出发点で、この「心の動きを見定めること」と「五・七・五・七・七の音律をととのへる」ことを何度も重ねていく、そして、言葉と心の動きがぴったりとなるやうにする、それが「うたひはらす」といふことになります。この合宿では、この図の下の段の、心の動きと言葉を合はせていく作業を、さらに相互批評の時間に皆で行ふことになつてゐます。

四、短歌創作の意義

さきほどの図にもあるやうに、短歌の創作は、自分の体験を再認識する過程を含んでをり、それは自分を知ることになります。皆が感動してゐても果たして自分の心がさう動くかはわ

かりません。泣いてもみないのに「涙ながれる」と詠めば、自分で嘘だとわかります。かうした自問自答の過程で、自分の心の動きを正確に知ることになります。それは事実を事実として受け入れていくといふことにはかなりませんし、ひいては物事を正しく考へることもつながるわけです。

もう一つの短歌創作の意義は、心を通はせるといふことです。当会の加納祐五先生は次のやうに仰つてみます。

「和歌は、人であれ自然であれ、万象からの呼びかけに対して応答する言葉なのです。かうして心の通ふところにこそ相互に親しみ和らぐ世界があり、いのちを生きるといふ直接の経験があるのだと言へるでせう」（加納祐五「人の心を種として」『日本への回帰』第三二集）

短歌が万象からの呼びかけに応答する言葉とはどういふことでせうか。冒頭にご紹介した明治天皇の御製について申せば、それは山家のちいさなともしびに、そしてそこに生きる人々の思ひに対する明治天皇の応答のお言葉といふことになりませうし、岸本さんの連作でいへば、地震救助作業に当たる人ら、或いは亡き母の心に感じてそこに歌が生れる、といふこと

でもあるのです。かうした共感の世界を体験することが歌を学ぶ大きな意義だと思ひます。この点に関して、さらに、「すすめ」の中の一文を紹介します。

「歌の歴史をみてきますと、有名な人の歌よりも、名もない人の歌の方がはるかに真実がこもっていて、永遠の光を放っているというようなことは、いくらでもあります。歌というものは、そういう平等の原則に立っているということをよく考えていただきたいと思ひます。従つて歌というものは、極端に言えば思想、イデオロギーの相違を超越する性格をもっているのです。イデオロギーが違つていても、その人の真実の感激の表白は、必ず人の心を打つものがあります。それゆえ、短歌は平等の原則に立っている、ということがはっきり言えると思ひます。」（六二頁）

「人の真実の感激の表白は、必ず人の心を打つ」といふのは大切な言葉です。真実の表白とは、まごころといひかへてもよいでせうが、人のまごころは必ず人の心を打つ。この「短歌における平等」といふ共感の世界は大変大事なものです。日本の国柄、特に天皇のご統治を考へる上では欠かせないポイントです。

五、短歌の鑑賞

最後にいい短歌を皆さんと味はひたいと思ひます。今日は戦歿学生の松吉正資さんのお歌を紹介します。松吉さんは、東京帝国大学法学部の学生で学徒出陣、海軍に入り、沖縄特攻作戦に参加され、昭和二十年五月十一日、横当島北方で、自爆、戦死されました。『短歌のすすめ』にその遺歌が多く採録されてゐますが、今日は時間もありませんので、昭和十八年十二月の出征間近のころの連作を皆さんと声に出して読んでみたいと思ひます。

友に

なつかしきふるさとの浦船出してみたてとゆく日近づきにけり

たづね来る友もなければひとり居てその日を待たむさびしけれども

また会ふと知られぬ友のみなさけをしみじみ思ふこの時にして

数ならぬわれを上げます友どちなさけにこたへいさみてゆかむ

大君の大みめぐみと友の恩おもへばこの身惜しからめやも

友をしのぶ深い思ひがあふれてしみじみと心にせまる歌です。この「なつかしきふるさと」は山口県の大島です。この故郷について、同じ時期に次のやうに詠んでをられます。

故郷雜詠

みんなみに向きてひらける入海の波たひらかに風あたたかし
いりうみの岸べにならぶ家並のうしろにつづき山そびえたり
秋晴れのみ空にかぶ白雲のかげをおとせりその山はだに
海かこむ山のふもとの蜜柑畑みかん熟れたり遠目にしるく

静かな、澄んだ、そしてなつかしい歌です。蜜柑畑に今や黄色く熟れたその蜜柑は、ふるさとにすむ人々の生活やそのあたたかなおもひを象徴するやうな感が致します。そして、最後の絶唱です。

述懐

ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人のなさけのあたたかきかな
数ならぬ身にはあれども吾を送る人のおもひにこたへざらめや
うつそみはよし碎くともはらからのなさけ忘れじ常世ゆくまで

今、靖国神社をめぐって大きな議論が沸き起こってゐますが、戦死され、ご祭神と祀られてゐる方々を直接ご存じの方はご高齢になられ、少なくなつてゐます。しかし、ご祭神の心はかうした遺された歌のしらべとともに伝へられてゐるのです。我々がかうした歌を詠んで、具体的にそのお心を自分の心の中に蘇へらせていくといふことが大変大事なことだ、と思ひます。

短歌入門

創作短歌全体批評

——和歌と友情——

和国民文化研究会副会長

元電源開発環境立地本部本部長代理

長内俊平



はじめに

五十鈴川の水

歌を作る骨

友情の大事

ブラジル人・ナタリアさんの言葉

真心とは

再び友情の大事を

「篤く三宝を敬へ」の大み教へ

文化とは「かまりこ」である

自ら親和の體驗なくして……

続けて会員の歌を

はじめに

お配りしてある部厚い歌稿は、昨夕皆さんから提出された歌を国文研の年輩の方々が選歌され、それを若い会員の方々が清書して印刷製本して呉れたものであります。

出来上ったのは今朝の六時であります。さう云ふ目に見えぬ努力が、この合宿教室を支へてゐることを、あらためて皆さんと共に感謝いたしたいと思ひます。

さて皆さんから提出された歌はやはり、お伊勢様を詠まれたものが多く、その次がお神楽のこと、先生方のお話のこと、そしてお父さんお母さんやお友達のことを詠まれた歌が多うございました。

早速學生さんの歌から始めたいと思ひます。

実は戦死した弟が残して呉れたもののなかに、和綴ちの『古事記』と『論語』があります。私の宝物として大事にしてゐるものであります。先日その論語を繙いてをりましたところ、「子人と歌ひて善ければ、必ず之を反さしめ、然る後に之に和す。」（述而第七）といふ孔子様のお姿を伝へる言葉に出会ひました。

論語は難かしい事ばかり書かれてゐるのではなく、読んでみてとても楽しくなることも多いのです。

その孔子様に習ひ、今日は私の心に響きました歌を中心に話を進めて参りたいと思ひます。初めは第一班・英国国立アストン大學二年・山田裕介君の歌です。

日本の心のふるさと伊勢に立ち祖先の声聞き我が國を思ふ
帰国して初めて気付く日本語のその美しさその奥深さ

といふ歌です。いい歌だなあ、と思ひました。

異国に留學していて久しぶりに日本へ帰つて来ると、日本の善さが沁々分るといふことでせう。ただ第一首目の「祖先の声きき」がよく分らないですね。きっと祖先の声が聞えて来たのではないかと思ひますので、これは班別の相互批評でよく皆と話し合つて、自分の氣持に合ふ様な歌に直して下さい。

二首目の歌は「帰国して初めて気付きぬ日本語のその美しさ奥床しさを」とでも直されたらどうでせうか。



五十鈴川の水

どれもいい歌ばかりで選ぶのが大変ですが、次は第二班・京都大學四年、中原有輝君の歌を誦んでみませう。

神の地を清むる五十鈴のせせらぎに己の心も洗はるることし

と言ふ歌です。五十鈴川を詠まれた方は随分多うございます。

私達の先輩で、桑原暁一さん（国文研叢書『国史の地熱』ほかの著者―昭和四十八年歿、享年六十二歳―）といふ尊敬する方が居られ、重い病床にあられ、字を

書くこともままになられぬなか、かじかんだ字で「五十鈴川の水をくんじちくれ」（汲んで来て呉れ）と書かれたのを見て、私達の畏友関正臣さん（この方も三年前八十歳で逝去されました）が、お伊勢様まで五十鈴川の水を汲みに来て持ち帰った時は、既に桑原さんが逝くなられた後だったと言ふことがございました。関君は桑原さんの霊前にその水を供へて慟哭されたと聞いてをります。

次は防衛大學校四年・森浩典君の

神樂觀かぐらていざ立ち上がろうとするけれど足が痺しびれて少しも動かず

といふ歌です。こんな経験は誰でもしてゐる筈ですが、歌に詠むのは恥かしいから詠まないで置かうと思はれた方もをられませう。

しかし森君は、短歌創作導入講義で紹介された、

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも

〔をりにふれて〕明治四十五年

といふ明治天皇のみ歌のまにまに、正直に詠まれたのでせう。次の様に直すとよい歌になると思ひますが如何でせうか。

神楽終りいざ立ちあがらむ思へども足の痺れてうごきとれずも

次は第三班・防衛大學校四年・船山尚志君の

内宮の御垣のうちに参るれば心のうちを洗わる心地す

といふ歌です。いい歌だと思ひました。次の様に直されたら如何でせうか。

内宮の御垣のうちに詣づれば心のうちを洗はるる心地す

この歌は孔子さまだったら「もう一度やりなさい」と言つて、その後について一緒にうた

はれただらうと思ひます。

次は廣島大學二年・井上智博君の次の歌です。

病にて何を眺むらむ我が友は所々を過ぐるまにま隨に

この歌には「伊勢に来るまでのバスの車窓より」といふ詞書がついてをりますが、きつと仲の良い友人が入院してゐるのでせう。伊勢に向ふバスの窓から過ぎてゆく景色をみるに、けも友の上が思はれてならない、といふことでせう。よい歌だと思ひますが、次の様に直したら、もつとはつきりするのではないでせうか

病床にて何眺むらむと過ぎてゆく景色を見つつ友の上を思ふ

歌を作る骨こつ

歌を作る骨については、小柳志乃夫さんが導入講義でも述べられましたが、私の経験では、

一番の骨は良い歌を声に出して繰り返し誦することでありませう。

さき程孔子様のことを申し上げましたが、私共は若い頃は野道を辿るときは、一人で或は友人と共に、昨夜の会員発表で岸本弘さんが紹介して呉れた

忘らむと野ゆき山ゆきわれ来れどわが父母は忘れせぬかも

といふ防人の歌などを、よく朗詠して歩いたものでした（編注・ここで講師は、この歌を声高らかに朗詠。盛大な拍手）。

さき程も申し上げた論語のなかに「南容（孔子様のお弟子さん）、白圭を三復す。孔子其の兄の子を以て之に妻す。」（先進第十一）といふのがございました。「白圭」と言ふのは、支那の紀元前千年頃の詩を、孔子様が集められた「詩経」のなかにある、白圭（磨きあげた白い清らかな玉）を詠んだ大雅の部のなかにある一詩です。

「詩経」といふのは皆様も御存じの「桃の夭々たる 灼々たるその華 之子千婦く 其室家に宜しからむ……」など我が國の万葉集の心に通ふ様な詩が三百五篇編まれてゐるものがあります。そのなかの、白圭を詠んだ詩をお弟子さんの南容が何度も何度も誦するのを聞いて

て、孔子様は自分の兄さんの娘さんを南容に妻めあはせたといふのです。

よい歌を誦してみると、そんなよい事も起るのです。宝石店に就職すると、ひたすら本物だけ見せると聞いてをります。決して本物と贗物にせものを並べて見せることはせず、ダイヤモンドなら徹底して本物のダイヤモンドだけ見せる、さうしてをりますと、贗物が出た場合、直ちにそれを見分ける目を身につけると言ふのです。

その様に、これは良い歌だ、これは良くない歌だと比較して説明するよりも、只管ひたすら良い歌を皆で一緒に稱することが良い歌を詠む骨こつであると存じます。

いま一つの骨は、自分も歌をよく詠むことであります。昨夕、会員発表で登壇された太田文雄さんが「継続は力なり」と言はれましたが、兎に角折にふれて歌を詠むことであります。近ごろ「勿体ない」といふ日本の言葉が素晴らしい、と外国の方に言はれて、「勿体ない」といふ言ひ方が、もて囃はやされてゐる様であります。が、「勿体ない」といふ感情は、自分でもそのことで苦勞した、といふ深い體驗ぎあひがなければ身に付かないのです。

私は戦後、道路に落ちてゐる馬糞拾ひから百姓を始め、苦勞を致しましたので、今でも米一粒も粗末には出来ません。

歌も同じです。自分も苦勞して歌を作る、さうしますと、「この歌は素晴らしい」といふ

ことがよく分る、それを積み重ねることだと思ひます。

友情の大事

しかし自然を観て、さあ歌を詠まうと見つめてゐても、なかなか歌は生れて来ません。一番いい方法は、お父さん、お母さん、恋人、そして友達に便りを書くことです。

佳い景色を見たり、おいしいものを食べたたりした時など、「あ、この景色をお母さんにも観せたいなあ」「あ、このお酒を青砥宏一君や宝辺正久君にも飲ませたいなあ」と思ひますとすぐ歌が生れて来ます。その時に歌を一首書いて送る。送られた友からは、それ位の歌なら俺でも詠める、——一寸冗談ですが——とすぐ歌の便りを返して来ます。

黒上正一郎先生のお歌は、友達へ送られた歌が殆どです。夜久正雄先生は「黒上先生のお歌は友情の歌である」と言つてをられます様に、日に何通も友人（黒上先生は教へ子達を皆友人と呼ばれ、お便りの宛名は、何歳も歳下の人にも何々兄と書いてをられます。——「黒上正一郎先生のおうたと消息」——）に歌を添へたお便りを出してをられます。先生のお歌は後で紹介させて頂くこととして次へ進ませう。

次は第四班福岡教育大四年・馬場健君の歌です。「長谷川三千子先生とお話をせし折に」といふ詞書のある歌ですが、この歌もよいと思ひました。長谷川先生もお食事中でもあつたにも拘らず、馬場君を心の通ふ若いお友達と思はれたのでせう。質問に答へて下さるお人柄が温く伝はつて来る様な歌です。

一寸私が手を入れましたものを誦してみませう（傍点は手を入れたところを示します。以下すべて同じ）。

質問をしたしと思ひて食事をばとらるる先生に話しかけゆく
わが問ひに手を止め顔を向け給ひ頷かれつつ話聞かるる
わが問ひを正確に聴き応へ給ふ先生の言葉に心晴れゆく

次は亜細亜大学四年・本間隆宏君の歌です。この歌も心に残りましたので誦し上げませう。

早朝参拝せし折に

朝日さす神宮の森に空高く聳ゆる木々を仰ぎつつ歩きぬ

五十鈴川に群れ飛ぶ秋津ながめをればなどか懐しき心地するなり

ただ、なぜ懐しくなったのかが、よく分りません。或は遠い祖先から流れてゐる血が騒いだのかも知れませんが、幼い頃が思ひ出されたのかも知れませんが。どうか班員の方々とよく話し合はれて、自分の思ひに近づける様に直して下さい。

次は第五班・長崎大学三年・山本眞矢君の歌です。「神楽奉納の三つ目の舞ひが朝鮮から伝はつたものと聞いて」といふ詞書が付いてをります。

朝鮮ゆ伝はりて来しといふいにしへの舞ひは日本に今も残れり

これもよい歌だと思ひました。

また同じ班の早稲田大學修士一年・野村亮君の

正宮の御前に立てば自ずより心も体も引きしまる思ひす

もよい歌だと思ひますが「自^{おの}ずより」は「自^{おの}づから」に直した方がよいでせう。

次は第六班です。この班では、下関市立大學一年・横手健太郎君の歌が心にとまりました。

太い幹時代の流れを見て来た木今日も木蔭を人が行き交^かふ

木の気持になつて詠んでゐる良い歌だと思ひました。「人が行き交^かふ」といふのが好^いいですね。その様子を木が何百年も見^みてゐるわけです。

ブラジル人・ナタリアさんの言葉

次は第七班です。いい歌が多いですが、九州工業大學二年・秋田崇文君の歌に心を引かれました。

英靈に労をねぎらうことばかける少女の手紙に涙あふれし

といふ歌です。この歌は、初日の合宿導入講義で、布瀬雅義さんが話された、ブラジル人のナタリア・恵美・浅村さん（十七歳）の美しい心と言葉に感動して詠まれた歌です。今もなほその折読まれたナタリアさんの「あなた方（筆者註・お国に命を捧げられた英霊）に今私は一生懸命に祈ります。そしてあなたの生命いのちをもらって今生きているよ。本当に有難うございました……」「……あなた方は自分の國日本を守るために、そして自分の家族の命を守るために、自分の命をかけました。あなた達は敵にふくしゅうをする気持ちより、自分の國の誇りをまもるための『死ぬこと』をえらびましたね。私はそれは本当にげんしゆくな気持ちであると思います。」などの言葉を読んで感動した思ひをそのまま詠まれた歌です。次の様に直したらもつとよくなるのではないでせうか。

英靈に感謝の言葉を捧げます少女の手紙に涙あふれぬ

次は第八班・成蹊大學一年・亀澤矢汐君の「野外研修のときに」といふ詞書のある

神域の漂ふ空気に正されてゆがんだ背筋もしやんとしにけり

賽銭を投げ入れそこね蟬の声神罰ありやと背筋も冷へけり

といふ歌です。私は賽銭を上げませんでした。矢汐君は偉いと思ひました。緊張した所爲でせう。捧げた賽銭が賽銭うけの罅かたひを越えてしまったのでせう。

この歌の素晴らしいこと。亀沢君の眞心が伝はつて来る歌です。

眞心とは

本居宣長は、「そもそも道は、もと學問して知ることにあらず、生れながらの眞心なるぞ道には有ける。眞心とはよくもあしくもうまれつきたるままの心をいふ」(玉勝間二三)と言つてをられ、更に「人のまことの情こころといふ物は女童をんなわらべのごとく、みれんにおろかなる物也。それをつとめてなほしさがざりつくろひて、かしこげにする所は、情こころをかざれる物にて本然の情にあらず」(紫文要領)とも言つてをられます。

明治天皇の御製にも

かざらむと思はざりせばなかなかにうるはしからむ人のこゝろは（「心」明治卅七年）

とございます。

亀沢君は心の清らかな青年だと思ひます。その折の姿が目には浮ぶ様です。次の様に直した
らどうでせうか。

神域に漂ふ空氣に自づからゆがめる背筋も正されにけり
賽錢を上げ入れそこね蟬の声に神罰ありやと背筋も冷えけり

決して神罰はあたりませんから大丈夫です。なほ、「しやんとしにけり」といふ表現は、このままでもよい気がしますが、あとで班の皆さんとよく話し合つて下さい。

次は第十一班です。先づ、(株)寺子屋モデル・黒岩礼子さんの

神楽奉納の折

美しき雅楽の音色に神々のつどひまします心地ぞしける

といふ歌です。黒岩さんといふ方は、すごい方だと思ひました。目の前に神々が集まつてをられるのを感じられたのでせう。

佐賀大學二年・梶山雅代さんの

拍手を打ちて祈れば心から安らぎにけり神の御前で

の歌もよかったし、早稲田大學二年・原川翠さんの

杉の木々伊勢を見守り千余年手で触れたればたましひありけり

も心に残りました。原川さんは杉の木に手を当ててみたら生命があると感じたんですね。すごいいと思ひます。

次は十二班です。先づ長崎大學三年・三荻祥さんの

天照らす神のおはしし宮の屋根にさしのぼる日の照り輝けり

といふ歌です。丁度、内宮様をお参りに行きました時は、あの千木・鯉木に朝日が照り輝いて、何とも言へぬ壯巖な気になりましたね。よい歌だと思ひましたが、「神のおはしし」を「神のおはします」と直したらどうでせうか。次は、同志社大學四年・大田和子さんの

朗々と思ひを述べる師の声は我を引き込み筆も止まりぬ

と言ふ歌です。この歌は昨夕の会員発表で太田文雄さんに続いて話された岸本弘さんのことを詠まれたんですね。いい歌だと思ひますが、「朗々」とのあとは「歌（又は文）稱み給ふ師の声は」としてはどうでせうか、班に帰って皆さんと話し合つて下さい。

いま一人、北海道大學三年・安田陽子さんの

昨日は名前も知らぬ面々と共に笑ふる今日は嬉しき

といふ歌です。この方は、岸本さんが紹介された『太子の御本輪読の手引き』をワープロで打って呉れた方でせう。歌の気持はよく分り共感を覺えますが、「面々」といふのは一寸失礼な表現ですので「み友ら」或は「方々」と直し、

昨日まで名前も知らぬみ友ら（方々）と笑ひ合ひうる今日ぞ嬉しき

としたらどうでせうか。

再び友情の大事を

この合宿教室は第五十回といふことになってをりますが、実は遡れば昭和四年に第一高等学校（今の東大）に「昭信会」、東京高等師範学校（今の筑波大）に「信和会」といふ同信団体が生れたのが、濫觴らんしやうだったのです。この会は、明治天皇と聖徳太子の大御教へを仰ぐ信に結ばれた、黒上正一郎先生と梅木紹男さんといふお二人の深い友情から生れたものなのです。その会で先生から教へを受けられた方々が中心となって、昭和十五年に信州菅平で「全日本

學生「夏季合同合宿」が開かれ、それに参加（小生十八歳）したのが、私がこの会との繋がりを持つ初めだったので（詳しくは小田村寅二郎著『昭和史に刻むわれらが道統』をご覧下さい）。

その黒上先生と梅木さんとの友情がどれ程のものであったかは、そのお歌を誦むとよく分るのであります。そのお歌はあとで稱ませて頂きますが、安田さんの歌をよんでをりますと、昨日まで全く知らなかった方達と、こんなにも心を開いて語り合へる友となれたよろこびが伝はって来る様に思はれるのであります。

次は第十三班長崎大學四年・平山恵理さんの

早朝参拝

玉砂利を踏む音ばかり聞きながら朝の静かな宮に参でる

これもいい歌と思ひましたが、

玉砂利を踏む音のみぞ聞えくる朝の静かな宮に詣づる

としたら如何でせう。

次は九州大學二年・穴井ひろこさんの歌です。

お父さん心配かけてごめんなさい素直に言えない感謝の気持ち

この歌もいい歌だと思ひました。「お父さん心配かけてごめんなさい」、と心のなかでは思つてゐるのに、お父さんの目の前では、なかなかはつきり言ひ出せない。こんな経験は何方どなたでも一度や二度はある筈です。

私もさうでした。私が高等工業學校へ入つた時、父は小學校の教員で母も學校の看護教員をしてをりました。私達兄弟四人の中等教育を受けさせるだけでも大変な家計の中で、私に高等教育を受けさせて呉れたのであります。

ですから學校が休みになつて家へ帰るときは「お父さん、お母さん只今帰りました」と言つて両手をついて礼をしようとして心に決して帰りますが、なかなか出来ないのです。二年生になつた夏休みに、清水しみずの舞台から飛び降りる思ひで、正座して手をつき「お父さんお母さん只今帰りました。有難うございます」と言つたら、涙が溢れて来て止らないのです。いつ

もはただ「父さん!!母さん!!」と呼んでをるのに「お父さん!!お母さん!!」とたった一言「お」をつけて言ふことが、いかに難しいことか身に沁みて知らされました。朝起きたら「お父さんお母さんお早うございます」。夜は「お休みなさい」と挨拶するのは当り前のことですが、前の日にどんないやなことがあつても翌朝、いつもの通り「お早うございます」と爽やかな挨拶をすることは、そんなに容易なことではないですね。それを実行するのが「學問」といふものではないですか。學問とは身に付くもので、頭に付くものではないと私は思つてをります。

穴井さんは合宿から帰ったら必らず「お父さんごめんなさい」と言はれるものと信じてをります。ただ歌の方は下の句を「素直に言へぬこのもどかしさ」とした方が良い様に思はれますが、皆で考へてみて下さい。

次は第十四班麗澤大學四年・黒川英恵さんの

小包の封を開けたら母さんと故郷のかほり溢れんがごとし

本当によく分ります。小包を開けた途端にお母さんと故郷のかほりがあふれ出たといふこと

でせう。

文化とは「かまりこ」である

この「かほり」といふのは、津軽では「かまりこ」と言ひます。幼い頃抱かれた母の懐ふところのふくよかな心の安らぐあの何とも言へぬ懐かしい匂ひとでも言ふべきものを私達の方では「かまりこ」と言ふのです。お國にはそれぞれお國の「かまりこ」があります。日本の文化とは何か、と聞かれたら「それはわが國の『かまりこ』です」と言ひ切ってよいとさへ私は思つてをります。さう言ふものを「かまりこ」と言ふのです。

この歌はよい歌ですが次の様に少し直したら、もっとよくなるのでは、と思ひますが如何でせうか

小包の封を開くれば母上と故郷のかほりあふれ出でけり

次は第十五班立命館大學四年・前田多恵子さんの歌です。「早朝参拝にて」といふ詞書が

あります。

参道を玉じやりふみしめ歩を進む流れる汗も心地良きかな

この歌もお伊勢様を詠んだ歌ですが、下の句を次の様に直したらどうでせうか。班員の皆様とまた話し合って下さい。「…流るる汗も清しく思へて」

次は同じ班の大阪大學三年・金沢仁子さんの

慣れぬ初日君が代歌ひて涙浮かぶ素直な幼少思ひ出しけり

も良い歌と思ひました。ただ結句を「思ひ出されて」としたらどうでせうか。

この外よい歌が澤山ありますが、時間の関係で割愛させて頂きました。

さて、次は社会人の方々の歌へ進む順番であります。時間がありませんのでどうか班別相互批評で、思ふ存分心を開いて語り合ひ、和歌を詠むことはこんなに楽しいものかと感ずる体験をして帰って下さることを祈ってをります。

今晚は恐らく夜を徹して相互批評を続けられる班も出て参るだらうと思ひます。どうぞ時を惜しんで語り合ひ、二人とないよい友を得て帰られることを念じてをります。

それでは最後に国文研の方々の心に残る歌を誦み上げて全体批評を終りたいと思ひます。最初は来年の合宿の運営委員長を勤められる藤新成信さんの歌です。

事前合宿にて御垣内参拝をせし折に

神さぶる宮居の庭にゐならびてこの合宿の無事を祈りぬ

五十回重ね継ぎ来し先輩らのいたつきを偲び手をば合はすも

来る年もまた重ねなむ新らしき命育むご遷宮のごと

何か藤信さんの緊張した精神が伝はつて来る様な歌です。

次は今回の合宿運営委員長である山口秀範さんの歌です。

二日目朝の集ひにて

「神宮」で合宿せむと定まりて一年は経りけふを迎へつ

それぞれのはひ割ききてこの夏もみ友ら集ひぬ南ゆ北ゆ

神路山望む廣場の大ポールに日の丸掲かげむとの念ひはかなふ

台風の過ぎてすがしき朝空に目にも著しるけき國旗はた翻る

いまの世に我らが誘ひに応へたる一人一人を尊みおもふ

三泊はつかの間なれど一生の友求まぎ給へ若き君らよ

三首目と四首目の歌は、朝の集ひの廣場には非日章旗を掲げたい、との運営委員長の願ひが叶った喜びの歌です。いづれも心うつ歌でありますが生の友をさがし求めて下さいといふ最後の歌にはことにも心を打たれました。

「篤く三宝を敬へ」の大み教へ

學問する上での一番の大事は何か、それは、聖徳太子様が憲法第二條で「篤く三宝を敬へ、三宝とは佛法僧なり……」とお示し下さってをられます様に、佛・法・僧即ち良き師・そのお言葉・そしてその教へを勵まし合ひながら研鑽して向上を目ざす、よき友を大事にするこ

とに盡きるだらうと思ふのであります。

この合宿教室の目的は一言で申し上げますと、一生の友即ち我が身に替へても思ふ様な友を得て帰ることにあります。その友情の道しるべとして、黒上先生が梅木紹男さんの葬式に向はれる折に詠まれた歌を稱よみ上げませう。(昭和四年五月、黒上先生三十歳―「黒上正一郎先生のうたと消息」八十八頁)

君ありと思ひて急ぎしそのかみのわが帰り途はたのしかりしを

あゝ帰つたら梅木君に会へるといふ喜びの溢れたお歌でせう。

ありし日に君病みまし、岐阜の野を思ひぞ出づる汽車の旅路に

君病むとききてとどろく胸おさへ旅いそぎたる昔しのばゆ

うつしよに君なきあとはいかにして我世に生きんと思ひし日もあり

國のため末すまはなりなむよき人を身にかへてもと祈りぬ我は

黒上先生は、「どうぞ私の身は差し上げますから、梅木さんの病気を直して下さい」と祈られたのです。そしてその年の十二月七日に、一高で梅木さんの追悼式が行はれたあとに先生は梅木さんの写真を抱かれたまゝ、梅木さんが在りし日に詠まれた

時雨日の夕暮近く渭の山の山の上高く鳶は輪をゑがく

しづしづと羽ひろげつ、鳶一羽時雨の雲のをぐらきに飛ぶ

悠々とせまらぬ舞よ鳶の舞よ雲の去來のその中の舞よ

時雨日の雲の動きは悠々とひたすらみつむる心に迫る（『うたと消息』一三三頁）

と言ふ歌を、ことにも三首目の「悠々とせまらぬ舞よ……」の歌を何回も何回もうたはれつ、梅木さんを偲ぶ話をなさつたさうであります。そしてその晩に風邪をひかれて、故郷徳島へ帰られ再び上京することなく、梅木さんのあとを追はれる様に翌昭和五年九月廿一日に卅一歳でなくなられたのであります。なほ梅木さんの詠まれた歌のなかに「千里万里何かあらなむ友しあれば世の荒波も我はおそれじ」（『うたと消息』一三三頁）があります。

自ら親和の體驗なくして……

さういふ先生方の信に基く深い友情からこの合宿教室は生れたのです。

山口君が「友求ぎ給へ若き君らよ」と詠んでをります様に、身にかへてもと思ふ様な友を得て帰つて欲しいのであります。それが學問の一番の要諦であらうと存じます。

黒上先生は、信和会の趣意書のなかで、

「自ら至誠の信念なくして他に道義を説く事能はず、自ら親和の體驗なくして他に協力を教ふることは出来ぬのである。……」（『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』二四五頁）

と言つてをられます。

「皆さんどうぞ、あなたのお友達を大事にする様に若い人達を大事にして下さい」と言はれたとき、その受けとめ方は、各自の體驗の深浅によつて異なるでせう。生命に替へても思ふ様な友を持ったことのある人と、さうでない人とは、その受けとめ方に雲泥の差があり

ませう。

明治天皇の御製に

つぎつぎにあがるをみれば雲の上に入りしひばりや友をよぶらむ

〔雲雀〕明治四十四年

といふみ歌がございますが、明治天皇様は、次々に上る雲雀を御覧あがになられて、雲の上に入った友が、野にまだゐる友を呼んでゐるのだらうと詠んでをられるのであります。私はこの御製を稱するたびに胸の潤むのを禁じ得ないのであります。

明治天皇様には、深い友情の御體驗がおりになるから、この様なみ歌を詠まれたのでありませう。私達だったら、どうでせうか。

明治天皇の御製には

あかずしてくれゆく春はあひおもふ友にわかるるここちこそすれ
まどゐしてたれあそぶらむ高どのにつねより多くみゆるともしび

〔惜春〕明治四十五年

〔樓上燈〕明治卅四年

など「友」を詠まれたみ歌を多く拝します。

若い皆さんは、自分の眼に見えてゐるものは、誰でも同じに見えてゐるものだと思つていらつしゃるかも知りませんが、さうではないのです。各人の心の鏡に写つたものしか見えな
いのです。

さういふ物をうつす鏡となる自分の心を美しく磨くことが學問するといふことだらうと思ふのです。そしてそれは各自の工夫と努力に待つしかないのでありますが、その中心をなすものは、「神祭る昔の手振り」と「しきしまの道」の実修であると信じてをります。

その次は拓殖大學客員教授・山内健生さんの歌です。

今林賢郁兄、五十周年記念出版『名歌でたどる日本の心』を紹介す

よき本とみ手にかかけて語りゆく君がみ声を聞くはうれしも

「日本の心」を記せし書ふみなりと語るみ声に力こもれり

ふたとせのいたづき稔りていまここに形となるがわれもうれしき

とりどりの執筆メンバー十四人統べ率ゐるは君がみ力

わが書きし「時代の概観」見事にも師のみ筆にて生れ変れり

装丁も品よく仕上る記念出版われらの思ひは形となりぬ

まづはまづ小田村（寅一郎）先生！と思ひ立ち師の御霊前にささげまつりぬ（八月廿日）

まことに心に沁みる歌であります。なほ第五首目の、師のみ筆とは、小柳陽太郎先生のことであり、小田村先生とは、この合宿教室を戦後に開かれる爲、中心となって努力された方で、本会の初代の理事長でいらつしやいます。

続けて会員の歌を

次は元日産自動車株式会社・古川修さんの歌です。以下時間の関係で一度だけ誦させて頂きます。

皇大神宮・早朝参拝（八月廿七日）

夜は明けて友らとゆけば宇治橋の鳥居の見えて宮の近づく

朝空に輝く鳥居を見あぐれば宮居の森の眼にはしるけし

清らかな五十鈴の流れは美しく蝉鳴きしきる御手洗場辺りに

幾星霜経に来し杉の大木は我らに迫りて靈氣はなちぬ

正宮の前に並びて友どちと共に祈りぬこころをこめて

次は、國文研事務局・茅野輝章さんの歌

北島治樹君と再会して

「合宿に参加します」との彈はづみたる君の言葉は力強しも

なつかしや夜の更くるまで語りたる正大寮りやうの昔の思ひ出されて

(筆者注・「正大寮」とは東京にある当会の學生寮のことです)。

にこやかに声かけくれし懐かしき君のかんばせたくま遅しく見ゆ

次は、本会会長・小田村四郎さんの歌です。

内宮早朝参拝

さはやかに澄みきる朝の気を吸ひて心すがしく宇治橋わたる

透きとほる五十鈴の川の清流に手を差し入れて心清めつ

杉木立茂れる中の木洩れ日を受けつつ玉砂利を踏みしめ歩む

玉垣の奥深く鎮まる大宮を畏みをろがむ友らと共に

八年後に迫れる次の御遷宮のつつがなかれと祈りてやまず

その次は、当会副会長・宝辺正久さんの歌です。

内宮参拝

五十鈴川に手を浸しつつ心深き亡き人のこと友と語りき

森かげの参り路友と共にゆけば筑紫の友の偲ばるるかな

大杉も大楠の木も正宮のみ前のみちに高々と立つ

み垣前に立ちてぞ拝むアマテラスオホミカミのみ名唱となへまつりて

年古れる宮のみ屋根の金色の鯉木光る上る朝日に

宇治橋の橋板に立ち川の音聞くがすがしき朝詣りかも

この歌の第一首目の「心深き亡き人のこと」とは先程申し上げた、桑原さんと関さんのこととであります。また第二首目の「筑紫の友」とは、今回「短歌創作導入講義」をして下さる予定だったのに病のために参加出来なかった当会副会長・小柳陽太郎さんのこととあります。その小柳さんから合宿に寄せられた歌を最後に誦し上げませう。

台風一過すみわたるみ空仰ぎつつ友集ふらむ遠き伊勢路に

長き月日伊勢の集ひを夢に描き今日を迎へけむ友らしぞ思ふ

玉砂利をふみゆく友らの足どりを遠偲びつつ胸迫りくる

ふり仰ぐ杉の木立を流れゆく雲すがやかに目にしみにけむ

今日もまた五十鈴の川の川水の流れゆくらむ神代ながらに

久々の友なつかしく語りあふ伊勢路はるかに偲びやまずも

なき友のみ霊よはろに天下り守りたまへよけふのつどひを

といふ歌であります。我々に寄せられる思ひが切々と伝はって来る歌であります。

友を思ふ歌は、昨日短歌導入講義で紹介された松吉正資さんの歌が載ってゐる「いのち捧

げて』『続いのち捧げて』（どちらも国文研叢書）を中心に、十九年前に亡くなられた青砥宏一さんが、全国の友らと呼び交した歌を集めた。『青砥通信鈔』（昭和六十二年刊）などに溢れてをりますので、是非繙いて下さることを切望いたします。

最後に今回出版された『名歌でたどる日本の心』の最後の方に『いのち捧げて』のなかの幾首か載つてをりますので、そのうちの「友を思ふ歌」三首を紹介して私の話を終りたいと思ひます。

加藤信克（元東北正大寮生・ルソン島にて戦死・享年廿七歳。陸軍軍医少佐）

すなほなる幼心を一すぢに守りて生きむと友よ思はずや

ひやくたけれいし

百武禮之（東大在学中學徒出陣・タイ国バンサイヤにて敵機の銃撃を受けて戦死・享年二十五

歳・陸軍少尉）

大空をさわわたる月のくまもなきこよひは友もいねがてぬらむ

てら おひろゆき

寺尾博之（東大在学中學徒出陣・九州軍需管理部に所属して終戦を迎へたが、八月廿日未明・福

岡市南部・油山の中腹、東方に眞向ふ草原に座して上官、長島秀男海軍技術少佐とともに自決・享年廿五歳。海軍少尉

倒れたる友を嘆かずいつの日かあもたどりゆく道と思へば

であります。

御清聴有難うございました。

一年の歩み

——第五十回合宿教室までの一年——

第五十回合宿教室運営委員長

頼寺子屋モデル代表世話役社長

山口 秀 範



平成十六年八月九日、「第四十九回全国学生青年合宿教室」が終了した直後、その反省会と共に翌平成十七年の開催地について検討がなされた。ここでは、第五十回といふ大きな節目を迎える合宿を伊勢の地で持ちたいとの意見が強く表明された。そして近年、大学の夏休み入りが八月にずれ込んで来た事、更に休暇中も諸行事が相次ぎ「四泊五日」の参加勧誘が愈々難しくなつてゐる事なども懸案とされた。

一方、この合宿中には当会の五十一年目以降を考へる委員会が併設されてゐたが、そのメンバーを加へる形で次のやうに「第五十回記念合宿」へ向けた「運営委員会」が結成され、以後はこの運営委員相互の連携と各地区での協力体制が推進力となつていった。

○運営委員長 山口秀範 ○各地区委員 (関東以北) 小柳志乃夫・山根清・大日方学

(関西) 絹田洋一 (北部九州) 酒村聡一郎・藤新成信 (南部九州) 吉村浩之・久保田真

運営委員会

一、第一回 (平成十六年九月四～五日)

(株)ワイドレジャーのご厚意により同社の黒川温泉保養施設を借用し、各地を代表して集つ

た委員により夜を徹した会合が持たれた。そこで、来るべき「伊勢合宿」の呼び掛けを「日本人の心のふるさと伊勢神宮で学ぼう」として、各地で『古事記』に親しむ研鑽の場を設けていくことを目標と定めた。開催時期は旧盆明けとし、従来より一日短い「三泊四日」で所期の成果を上げるべく、日程の工夫・講師選定などに腐心、招聘講師は、埼玉大学教授の長谷川三千子先生に決した。

二、第二回（平成十七年二月五～六日）

夏季合宿開催地、伊勢市の「神宮会館」にて諸施設の下見を兼ねて開催した。同時に、新学期からの各地・各大学での勧誘と学生指導のあり方について、学生リーダーも交えて対策を練った。

三、第三回（平成十七年六月四～五日）

各地区の勧誘状況や勉強会等の様子、合宿までの諸準備と役割分担など、「合宿教室」を間近に控へて遺漏なきやうにと細部の詰めも確認された。今年度は全国での会員・学生の動きを伝える「同信交流報」を月刊『国民同胞』紙に折り込んでもらひ、六号まで発行した。

これにより運営委員間も情報の共有化が図られ会議を円滑に進めることが出来た。以下、この「同信交流報」からの抜粋により一年の活動記録を辿ってみたい。

秋から冬にかけて……

東京では、九月二十三日（編注・平成十六年）に国文研恒例の同人先輩・先生方のみ霊をお祀りする「慰霊祭」が東京大神宮で斎行された他、多摩川河川敷でのパーベキューパーティー（参加者三十四名）が行はれた。さらに、「青山墓地を巡り・明治の先人に学ぶ」催しも盛況であった。当日の様子は次の通り。

さる十一月六日（土）、名越二荒之助先生のご案内で乃木神社・青山霊園を巡拝。当会からは学生・OB計二十名ほどの参加でしたが、先生のお話を聞かうと他団体の方も多く来られ、総勢百名ほどになりました。佐野宜志君（亜大）ほか学生諸君は下見や案内小冊子の作成など準備を行いました。当日は参加者のあまりの多さにびっくり。天気もよく、名越先生の名解説で、乃木將軍・小村寿太郎・加藤友三郎・デニソン・金玉均・ブレークニー・後藤新平・副島蒼海・元田永孚のお墓を回り、広瀬武夫の墓前では唱歌「広瀬中佐」

を全員で斉唱。解散後に当会会員と合宿教室に参加した学生は小田村寅二郎先生のお墓にもお参りしました。(小柳志乃夫記)

福岡では、八月二十二日(編注・平成十六年)「油山の慰霊祭」(国文研の道統に連なる寺尾博之海軍少尉自決の地でのお祭り)で合宿後の研鑽が開始された。そして十月九日には九州大学構内の大教室に中川昭一経済産業大臣をお迎へして学生が大臣と語り合ふ場が実現した。その模様は次のやうに報告された。

当日は、台風二十二号の影響を受け強い雨風だったにも関はず、三百三十名(学生二百三十名、社会人百名)の参加がありました。講演はその演題「青年よ大志を抱け——国を守り抜く気概を」に相応しく、近隣諸国からの領土侵犯や拉致問題、日本経済の将来、教育改革など、今つきつけられてゐる課題と、わが国の進むべき道につき語って頂きました。また学生からの様々な質問に真つ向からお応へ下さり、現役の大臣に直接思ひをぶつけてそのお人柄を感じ取るといふ貴重な時間を過しました。

予定時間を超え、立ち見の聴衆が出る中で講演会は盛況裡に終へ、引き続き「熱く語らう後夜祭」と銘打って九大中央食堂で懇親会を開催しました。そこでは、各大学・グルー

プの紹介の後、福岡地区の勉強会の案内、そして今夏合宿参加者による合宿勧誘など、講演会の余韻冷めやらぬまま四十五名で大いに語り合ひました。

現職の大臣が、九州の学生に語りかけるためだけに日帰りの日程で臨まれる。その気概がスタッフを、そして参加者をも動かしたやうに思ひます。(古川広治記)

他地区でも青森・富山・関西・佐賀・熊本などで例会や小合宿が開催され、会員と学生が共に学び合つた。

地区合宿

とくに各地で実施された地区合宿を列記すると次のやうになる。

東京地区 十一月二十六～二十八日(編注・平成十六年)

横浜市「野島青少年研修センター」

学生二十五名・社会人十名

(主要テーマ) 日露戦争を学ぶ

福岡地区

十二月二十六～二十七日

朝倉郡「夜須高原自然の家」

学生十四名・社会人六名

(主要テーマ) 日露戦争の偉人に学ぶ

関東地区

三月二十五～二十七日(編注・平成十七年)

渋谷区「代々木青少年センター」

学生二十四名・社会人八名

(主要テーマ) 学問と友情

福岡大学

三月十九～二十日

福岡市「福大セミナーハウス」

学生二十二名・社会人三名

(主要テーマ) 熱い思ひをぶつけ合へる仲間作り

九州工大 七月八～十日

都城市「国立病院長官舎」

学生十名・社会人四名

(主要テーマ) 霧島で古事記を読む

東京の「正大寮」を初め、早稲田大・亜細亜大・防衛大・東京大・独協大や、福岡の九州工大・福岡大などでは学内で読書会が積み重ねられてをり、日頃の研鑽を踏まへて学生主体の合宿研修が右のやうに次々と企画された。そこでは地域を越えて相互に学び合ふ姿も見られた。以下に学生たちの思ひを綴った感想文と短歌を抄録したい。

早稲田大四 穴井宏明

本間隆宏君(亜細亜大三年)の発表を聞いて

見し夢に乃木将軍が出るほどに思ひをはせて君は学べり

將軍を鑑にしつつ生きむとぞ語りし言葉に思ひ溢るる

九州工大修士一 結川高志

話しつつ感極まれる友を見て我も思はず涙ぐむかな

東京大四 武田有朋

日の本を守らむとして君と民と心合はせし戦ひなりき

我もまた先人にならひてみ友らと我らが祖国を守りゆくべし

(以上は十一月の東京地区合宿)

福岡大三 長友泰道

十月に大学の先輩である穴井俊輔(福岡大四年)さんと初めて会い、今回の合宿に参加するまでわずか二ヶ月。まさか二〇〇四年の最後にこんな経験をするとはいきませんでした。九州工業大学の皆さんの発表や、はるばる東京から参加された学生の話の話を聞いていると、日本の魅力に引き込まれて行きました。そして自分が生を受けた日本という国は今日まで当り前のように存続してきたのではなく、先人の方々の多くのご苦勞があつてこそ今の自分の生活があることに気づかされました。このようなことは、普段の学生生活では考えることも

ありませんし、感じさせてくれるものもありません。その点でこの冬合宿は、僕の人生にとつて大きな刺激を与えてくれるものでした。

九州工大一 秋田崇文

日露戦争時に日本の未来を真剣に考え、日本の為に尽力した人々の姿に触れる事が出来て本当によかったと思います。日本の為に自己犠牲をいとわない彼らの姿は、日本人としての義務感というより、本当に自分達の国を愛しているから自然に行動出来たと感じました。そのような日本人が居た事をとて嬉しく思い、それを受けて自分はこれから先どうしていかねばならないかと考えさせられる合宿でした。

九州工大二 林 祥人

以前は九工大の学生だけで行なっていた合宿も今回は福岡の他大学、さらには東京からも学生の参加があり、どんどん輪読の輪が広がってきたように思えます。今ある繋がりも初めは些細なことがきっかけで出来たものですが、今では強い繋がりとなっています。これからこういういった繋がりを大事にして活動の輪をもっと広げていきたいと思っています。

(かな遣ひママ。以上は十二月の福岡地区合宿)

明治大三 小柳雄平

松吉正資先輩の歌を誦して

寝ながらに歌をよみあふ先輩のみ姿おもへば胸にせまりく
友のこと詠みたるみ歌誦しゆけば声のつまりて涙出づるも

防衛大三 森 浩典

合宿で肩を並べて学び合ふ友あることぞありがたきかな

(以上は三月の関東地区合宿)

高千穂河原

国立都城病院長 小柳左門

高千穂の河原に立てば風強く林の上を霧流れゆく
霧深き古宮処訪ひくれば枝葉ゆるがし風荒ぶかも
晴るるかともればたちまち風のむた霧たち渡る古宮の跡

(以上は七月の九州工大合宿)

春から夏へ

当会の五十周年目を迎える今春三月二日に当会福岡事務所の移転開所式が行はれ、会員・賛助者・支援者など百名近くのご参加を得た。この事務所には「NPO法人教育オンブズマン福岡」と「懶寺子屋モデル」がスペースを共有し、以後九州地区の様々な活動の一大拠点となっていく。

一方五月二十二日東京の靖国神社参集殿では、八年目となる「国民文化講座」が開催された。講師はジャーナリストの櫻井よしこ先生で、「日本外交の課題——このまま減ぶな日本」と題する講座には三百三十名が集ふた。当日の参加者で、その後「伊勢合宿」にも申し込まれた静岡県の高校教師日氏から主催者宛に頂いたお手紙を掲載したい。

先日の国民文化講座で櫻井よしこ先生の話をしかに聞くことができました。また、靖国神社へ昇殿参拝を許され、感激に耐えません。日本人としてのプライド、大切にしていかなければならぬものをはっきりと確認しました。そしてこれは教師としての自分になくてはな

らぬものです。

櫻井先生も著書の中で言われているように教育の重要性が今置き去りにされているように思われます。教師達は一生懸命なのですが、その責任感ゆえに焦り、心を混乱させている人々が多いのも事実です。教育に「日本の心」を取り戻したいとおもっています。国民文化研究会に参加させていただくことによって、自分の心を磨こうと思っています。(かな遣ひママ)

新しい友を、学内で身近に語りかける仲間を、そして心の通ふつき合ひを求めて、全国各地で「日本人の心のふるさと伊勢神宮で学ぼう」と大きく書かれた合宿教室のパンフレットが手渡されていった。半世紀営々と積み重ねられた国文研の「MAN TO MAN運動」(一人から一人へ志を伝える)は今年もあちこちで展開され、やがて「第五十回全国学生青年合宿教室」の開催は目前に迫ったのである。

合宿教室のあらし



第一日目

(八月二十六日・金曜日)

第五十回全国青年合宿教室は、「日本人のふるさと伊勢神宮で学ぼう」との呼び掛けのもと、三重県伊勢市「神宮会館」にて開催された。「神宮会館」は、神路山のふもと伊勢内宮のお膝元に位置してゐる。早朝の内宮への参拝を日程に組み込んだ三泊四日の伊勢での合宿教室である。北は北海道から、南は鹿児島に至る全国各地から参集した参加者は、長旅の疲れもものともせず、受付をすませるとただちに開会式に臨んだ。

参加者

(学生班 四十大学) (洋数字は参加者数)

- 北海道大学 2 東北大学 1 早稲田大学 8 東京大学 4 獨協大学 4 防衛大学校 2
亜細亜大学 2 慶應義塾大学 2 日本大学 2 麗澤大学 2 明治大学 1 明星大学 1
東京理科大学 1 東京芸術大学 1 一橋大学 1 拓殖大学 1 成蹊大学 1

お茶の水女子大学1 東京純心女子大学1 京都大学1 大阪大学1 同志社大学1

立命館大学1 大阪教育大学1 広島大学1 九州工業大学5 福岡教育大学4

福岡大学3 九州大学3 長崎大学3 佐賀大学2 中村学園大学1 下関市立大学1

九州造形短期大学1 福岡女子大学1 九州女子大学1 西南女子学院大学1

崇城大学1 鹿児島大学1 英国国立アストン大学1 高校生1

計 七十四名（うち女子二十六名）

（社会人参加者） 五十六名（うち女子二十一名）

（招聘講師） 二名

（国民文化研究会） 七十五名

（事務局） 五名

（写真） 一名

（見学参加者） 六名

総計 二百十九名

開会式は午後一時半から講義室で行はれ、亜細亜大学四年佐野宣志君の開会宣言の後、主

催者を代表して小田村四郎会長は「記念すべき五十回目の合宿教室を日本人の心の故郷である伊勢の地で開催することができた。昭和三十一年の第一回以来の半世紀、経済復興を成し遂げたが精神面での頹廢は逆に深刻化してゐる。靖国神社の参拝は当然のことであつたし自国の歴史を謝罪するなどといふこともなかつた。今年は戦後六十年であり日露戦争勝利百年である。この合宿では六十年前、百年前の先人の心組みを真剣に顧みて貰ひたい。一人の国民として年齢や学年の差違を超えて語り合ひ学んで欲しい。そして合宿が終るときには終生の交りを結ぶことのできる心の友となるよう努めて戴きたい」と挨拶した。続いて明治大学四年の小柳雄平君が「新たな出会いを楽しみに伊勢にやってきた。班別の輪読や討論を通して文章を深く読み味はひ意見を交換することで良き友達を作ることが出来る。今年も一生付き合へる新たな友をつくりたい」と参加学生を代表して合宿に取り組む決意を述べた。

次に山口秀範合宿運営委員長は「今の日本で最も軽視されてゐる、目に見えないものを信じる力」を養ふべく努めてもらひたい。皆さんにとってこの合宿が、夏休みの一歩充実した思ひ出になることを確信してゐる。どうか精一杯取組んで欲しい」と問題提起をしつつ激励した。

8月28日(日) 第3日	8月29日(月) 第4日	第五十回(平成十七年)全国学生青年合宿教室「日程表」
(起床) 洗面	(起床) 洗面	
早朝参拝 朝の集ひ 朝食		
朝食	朝食	
講義 山内 健生 先生	講義 占部 賢志 先生	
班別研修	参加者による 全体感想自由発表	
	地区別懇談	
昼食 休憩	感想文執筆 第2回短歌創作	
	昼食 (班別懇談)	
創作短歌全体批評 長内 俊平 先生	閉会式 上村 和男 理事長	
	解散	
班別 短歌相互批評		
夕食 入浴 休憩		
講話 宝辺 正久 先生		
(慰霊祭の説明) 大岡 弘 先生		
慰霊祭		
班別研修		
夜の集ひ		
就床		
消灯		

	8月26日(金) 第1日	8月27日(土) 第2日	
5:30	<p>(注意)</p> <p>↓</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>参加者は、一班七名前後の 班に所属します。 会場入口受付、所属する班 を確認のこと。</p> </div> <p>随時受付</p>	(起床)	
6:00		洗面	
7:00		早朝参拝 朝の集ひ 班別散策 (写真撮影)	
8:00		朝食	
9:00		講義 長谷川三千子 先生	
10:00		質疑応答	
11:00		班別研修	
12:00		昼食 休憩	
1:00		開会式 小田村 四郎 会長	短歌創作導入講義 小柳 志乃夫 先生
2:00		オリエンテーション 山口秀範合宿運営委員長 庭本秀一郎指揮班長	「名歌でたどる日本の心」紹介 今林 賢郁 先生
3:00	合宿導入講義 布瀬 雅義 先生	野外研修	
4:00	班別研修	神宮参拝 神楽奉納	
5:00		(短歌提出)	
6:00	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩	
7:00	(神宮のビデオ)		
8:00	講義 松浦 光修 先生	会員発表 太田 文雄 先生 岸本 弘 先生	
9:00	班別研修	班別研修	
10:00			
11:00	就床	就床	
	消灯	消灯	

開会式後、一呼吸おいて早速、住電エレクトロニクス(株)社長の布瀬雅義先生による「自分の頭で考へ、自分の心で感じ、自分の言葉で語らう」と題する合宿導入講義が行はれた。先生は「講議内容を覚えてそれだけで頭を一杯にして帰っても意味がない」と学生時代の体験を振り返り、この合宿で学ぶ心構へについてまづ語られた。そして小泉首相の靖国神社参拝を批判する朝日新聞の社説や所謂「百人斬り競争」の捏造報道を例示しつつ、「自分の頭で考へること」「自分の心で感じること」の大切さを説かれた。そしてブラジルの日系人少女が江田島や靖国神社を訪れた際に戦歿者について記してゐる文章を紹介しつつ「自分の言葉で語ること」とはどういふことなのかを自らに照して考へてもらひたい、班別研修においても友の言葉からその思ひを正確に掴む努力をかさねてもらひたいと説かれた。

講議終了後、参加者は各班室に戻り、導入講議について班別研修を行った。まづ皆で講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを話し合ひ、さらに班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて、話し合ひがすすめられた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも続けて行はれた。初めのうちは初対面のせむか、緊張して意見も少く発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、意味の取り違ひを指摘し合つたり、時には共感し合ひながら、相互の心の交流を深めて

行った。

夕食休憩のあと、「神国日本―神話と神宮―」と題する講義が皇学館大学助教教授の松浦光修先生によって行はれた。先生はまづ「世の中には手で触れることも目でみることもできないものが厳然としてあり、それは心で見るとは触れないのです」と指摘され、太古の神話が、世界で我が国だけに今も生き続けていることを、伊勢神宮参拝時のアーノルド・トインビーの感動やアンドレ・マルローの驚嘆などを紹介しつつ語られた。また『日本書紀』が伝へる「三大神勅」に触れた後、天皇陛下の祈りについて「祈りとは国民の幸福を願ひ、愛を注ぐ行ひである。この皇室がなくなったら、日本はどうなるか。どんなに物に恵まれやうとも無意味になる」と説かれた。そして「正しいことを知ったならば、勇気を振ひ口に出して初めて意味がある。消えかけたかに見える日本の道を次の時代にもう一度美しく甦らせよう」と結ばれた。

第二日目

(八月二十七日・土曜日)

例年合宿の一日は朝の集ひから始まるが、今回の伊勢合宿では、それに先立ち五時半に起

床して、班単位での内宮参拝から日程が始った。早朝の清らかな空気を吸ひつつ、玉砂利を踏みしめ一歩一歩参道を進み、参拝した。この折の感動は普段の生活ではなかなか味はへないもので、多くの参加者がそれを歌に詠んだ。参拝後、宇治橋の袂たもとの広場で、国旗掲揚と体操を行った。その後、学生による「心に残る和歌」の紹介がなされた。朝の集ひで紹介された歌と紹介者は左の通りである。

第二日目の朝（八月二十七日） 東京大学四年 武田 有朋

若山牧水 「友を思ふ歌」

いま来よと言ひ告げやらば為し難き事をして来む友をしぞおもふ

第三日目の朝（八月二十八日） 早稲田大学四年 井川 茜

明治天皇 「歌」

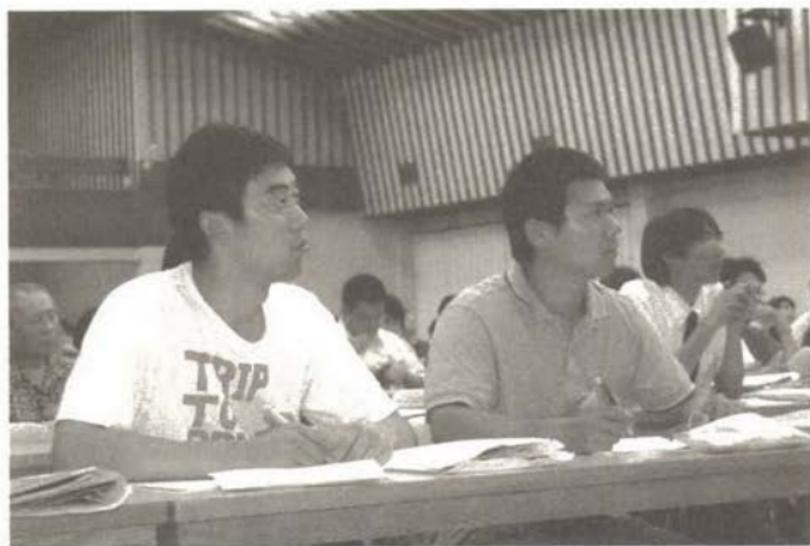
まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり

第四日目の朝（八月二十九日） 九州工業大学二年 瀬木裕太郎

明治天皇 「をりにふれて」

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ

午前は、まづ埼玉大学教授の長谷川三千子先生による「日本人の思想の源」と題する講義から始った。先生は、まづ日本人の思想の源泉は遠いところにあるのではなく、日本語といふ言葉の中にあることを、言葉と思想がいかに密接な関係にあるかを述べられた。日本人は漢字と云ふ文字をもった中国語と遭遇したことから、中国語には日本語の「てにをは」にあたるものが少ないことに気づいて、「てにをは」の規則を研究したのが、日本における文法研究の出発点であったと説かれた。「てにをは」は、玉を貫く緒のやうなものであり、文法とは無意識の思考の構造を形造つてゐるものであると指摘され、「日本人の思想の源」が日常使つてゐる言葉そのものにあることに気がつくとき、日本文化の底力に自信が湧



いてくるのではないかと述べられた。

午後は短歌創作を兼ねた外宮参拝（御神楽奉納）を前に、（株）みずほコーポレート銀行勤務の小柳志乃夫先生の短歌創作導入講義を聴講した。はじめに短歌とは詠まうといふ気持ちがあれば小学生でも詠めると前置きされ、歌の世界は日本人が古今を通じ色んな思ひを託してきた「広やかな世界」であり、趣味的な歌を詠むのが目的ではないことを明治天皇の御製に触れながら紹介された。そして人生を深く味はふことになるのが短歌創作であると指摘された。作歌の際の心構へについて、理屈は歌にならないことや作歌には真剣に取り組むべきであり、感動を詠むのが基本であると語られた。作歌上の留意点を指摘した後、戦歿学徒松吉正資さんの遺歌を鑑賞して終へられた。

短歌創作の心得についての講義を聴いた後、国文研五十周年を記念して出版された草思社刊「名歌でたどる日本の心」について、日鉄ブランド設計顧問 今林賢郁先生から出版の経緯やその内容について紹介された。小柳陽太郎副会長（元九州造形短期大学教授）を中心に十四名の会員が二年がかりで編んだものであって、須佐之男命から昭和天皇までの日本歴史を貫く「日本の心」が辿られてをり、是非ともこの本を手にして私達の先祖達の美しい心を感じてほしいと訴へた。

その後、班単位でバスに分乗して、豊受大神をお祭り申し上げる外宮に向かった。神域では班毎にお宮を参拝し神楽殿に入った参加者は正座してお神楽を奉納したが、この折のお神楽の体験は、正座の記憶と共に、得難いものとして、参加者の心に残り、多くの歌が詠まれた。神宮会館に戻った参加者は夕刻までの間も指を折りながら短歌創作に余念がなかった。

夜は学生時代にこの合宿教室に参加した二名の会員が登壇して、自らの体験と学問とのかはりを参加者に語りかける会員発表が行はれた。はじめに防衛大学校教授の太田文雄先生は「治己、知彼、応変」とのテーマを掲げて、国家同士の戦ひのみならず、人生万般に適應できる原則は、吉田松陰先生が示した「治己、知彼、応変」に尽きると語られた。それはそのまま、合宿教室で「自国の歴史と文化を深く理解すること」「敵情や自己の置かれた環境を知って世界における日本のあり方を学ぶこと」そして「古典や短歌を通じて豊かな感性を養ふこと」につながっていると指摘され、歴史を顧みれば、国家滅亡の真因は外敵の侵入によるといふよりも国内問題にあったことが理解される、即ち国防の根本問題は国内問題であり、国民一人一人に深く根ざしてゐると語られた。

次いで「他と共なる生き方」を求めて」と題して富山県立富山工業高校教諭の岸本弘先生が黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』についての小田村寅二郎先生

の輪読御指導講義録を中心に語られた。そして自らの教員生活の中で聖徳太子のお言葉がどのやうに生きてゐるかを、勤務校の金属科の生徒や剣道部の部員との付き合ひの日々を紹介しながら話された。また太子のお言葉、明治天皇の御製に触れながら、「他と共なる生」を願はれた深いお心を偲びつつ、「防人の歌」、そして『古事記』の倭建命の節を声高らかに朗読し、一つの文章に心底から向き合ふことの大切さを示された。

第三日目

(八月二十八日・日曜日)

午前の日程は「日本の国柄―新旧の不思議な共存―」と題する拓殖大学客員教授の山内健生先生の講義からスタートした(本書に収めるに際して、サブタイトルを「憲法第一章の淵源」を考へる」に改題)。先生は、冒頭で偏向マス・メディアによる「毒化作用」によって国全体が酩酊状態にあるのではないかと無責任メディアの存在を指摘された。ついで国の「統合」の意味を説かれ、憲法が明治時代からの連続性を強調するなかで誕生してゐる事実を抜きにしてはその本質は分らない、さらに明治維新は太古からの「国柄」の自覚が行きわたることによって成就したものであることを語られた。そして、今上陛下の御即位の折の諸儀式に触れ、「悠

遠な神話の世界につながり、御先祖を大切にされてをられる。これが易姓革命とは異質の万世一系の国柄といふことである」と述べ、この敬神崇祖のご精神は皇室の伝統であることを歴代天皇の御製に仰がれた。最後に「神宮の式年遷宮では二十年ごとに全てを一新するが、太古の建築の形を受け継ぐことは、太古の心を受け継ぐことに他ならない」と国史の連続性を指摘して締め括られた。

午後は、前日の外宮参拝の折に主として詠まれ、夕食前に提出された各参加者の短歌にもとづいて創作短歌全体批評「和歌と友情」が元電源開発環境立地本部本部長代理の長内俊平先生によって行はれた。先生は、参加者全員の歌を印刷して収めた「歌稿」を手に各班から一首づつ取り上げて批評を加へながら、「和歌と友情」の世界についてご体験を交へて



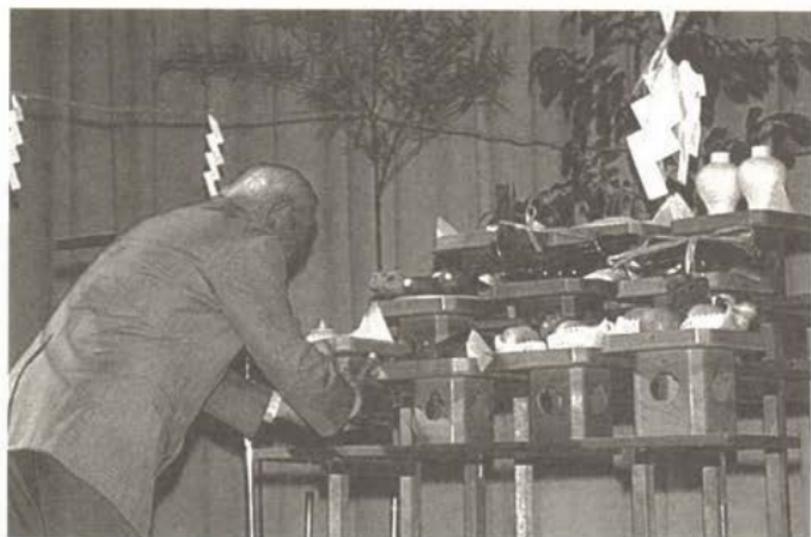
述べられた。その中で、歌は自分で苦勞して一所懸命作ることによって、素晴らしい歌が分るやうになると説かれ、「友」をお詠みになった明治天皇の御製、信友梅木紹男さんの死を惜しまれる黒上正一郎先生のお歌、国文研会員の歌に触れながら「和歌と友情」の広やかな交流の世界を語られた。そして、班での短歌相互批評では、相手の気持ちになって話を聴いて、お互ひに作者の気持ちに即したものとなるやうに直し合ふことで、またとない友達を得て下さいと述べられた。

全体批評の後、各班に分かれて班別短歌相互批評が行はれた。歌をつくったのは初めてといふ参加者が多かったが、皆、一人一人の歌に心を寄せて、作者の思ひに添ふ正確な表現を求めて心を砕いていった。人の思ひを正確に受け止めること、自分の気持ちを伝えることが如何に難しいかを実感させられたが、お互ひの心が通ひ合ふひとときでもあった。

夜は慰靈祭を前にして、国民文化研究会副会長の宝辺正久先生による「書と、人の声—み祖のいのちなつかしきかな—」といふ講話をお聞きした。先生は、冒頭に副島蒼海の「まことまごころが無ければ一切のものは無い」といふ言葉を紹介され、まごころを持って御霊と向き合ふことの意味を示された。そして、まごころについて、人の声のこもった書かみは人の命の象徴であつて、戦時・平時を問はず命を捧げた方々に対して、その人の命と真向ふ事が

慰霊祭の柱であると説かれた。そして歴史を貫く筋金は愛惜あいせきといふ思ひであつて、その愛惜の中に亡くなられた方々の志も命も一つに繋がって行くと話され、終戦直後、天皇陛下に申し訳ないと自刃された同年輩の寺尾博之さんを偲ばれた。

慰霊祭は講義室で厳修された。祭儀に先立って慰霊祭の意義と祭の次第、参列の心構へについて、元新潟工科大学教授の大岡弘先生によって懇切な説明がなされた。ついで講義室の壇上に設けられた祭壇の前に参加者は整列。祓詞に代へて、長内俊平副会長が三井甲之先生詠の「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」の和歌を朗詠し、磯貝保博副理事長による御製拝誦、山口秀範合宿運営委員長による祭文奏上が行はれた。その後「海ゆかば」を斉唱。小田村四郎会長が拝礼



し、上村和男理事長の拝礼に合はせて参加者一同が拝礼した。

左は奏上された「祭文」と拝誦された「御製」である。

祭文

我ら日本人の「心のふるさと」と 古より仰がれ来し 　ここ伊勢皇大神宮のお膝元
「神宮会館」に集へる 　社団法人国民文化研究会 　理事長上村和男を始めとする 　我ら
二百二十余名は 　「第五十回全国学生青年合宿教室」にて研鑽を重ね 　はや三日目の夜を
迎へぬ

今し天つ日は隠ろひ 　涼風すずかぜのさやけき今宵 　この会館の講義室を齋庭と定めまつりて
とこしへにみ国守り来たりし 　遠つみ祖おやたちや 　み国のために尊きみ生命を捧げ給ひ
し 　あまたのはらからのみたまを招まねぎまつりて 　海の幸山の幸種々のためつものを供へ
み祭仕へまつらむとす

顧みれば今より五十年の昔 　故小田村寅二郎大人命を始めとする同信の師らみ友らは

戦後の混乱と占領政策の爪痕深刻なりし時代の中で 祖国日本のまことの独立を果たすためには 次代を担ふ学生青年の育成こそ急務と 「合宿教室」開催に立ち上り給ひし その日よりはや半世紀は過ぎ この夏開きたる第五十回目の記念の集ひも酣たげなほとはなりぬ

先の戦に御国敗れし日より六十年を閲したる昨今も 我が国の政治 外交 教育 マスコミ各界の 基軸を失ひし混乱は 依然として目を覆ふばかりなれど 心ある国民の中に国の生命を甦らせむとする数々の新しき動きの見え初むるは 頼もしき曙光なり

一昨日より開きたるこの集ひにて 長谷川三千子 松浦光修両先生を始めとする御講義に耳を傾け 天皇の大みうたや記紀万葉の輪読 はたまた短歌の創作・批評にと心を尽し力を協せて学び合ひつつ み祖たちの言霊こもるみ言葉を味はひ 老いも若きももろともに わが国の良き伝統を身につけ ともに御国の運命を担ふべき友どちとなりみ祖たちに連なりて 祖国日本をとことはに栄ゆかしめむと誓ひまつらむ

またみ祖たちより承け継ぎ来たりし 「しきしまの道」を今の世にいやさらに伝へ広めむとの念ひから 我らが会の設立五十周年に因みて編める 新しき書『名歌でたどる日本』の心』をみ前に捧げて 二年を費せしこの書の上梓を告げまつらむとす

畏かしこかれども　いましみ祖たちのみ靈よ　願はくは　麗しきこの大和島根の内外うちとに満つ
る　まがごとどもを打ちそけつつ　言靈の幸はひ皇神の厳しき御国を　守らむと努むる
我らが上を　みそなはし　かつ導きたまへと　参加者一同に代はり　山口秀範　謹み
敬ひ　恐かしこみ恐かしこみも白す

御製拝誦

明治天皇

をりにふれたる

明治三十八年

ひさかたのあめにのほれるこちして五十鈴の宮にまゐるけふかな

をりにふれたる

明治三十八年

何ごとにもなすべき時になさざればおくれをとらむこともこそあれ

教育

明治三十九年

いかならむ時にあふとも人はみな誠の道をふめとをしへよ

日

明治四十二年

さしのぼる朝日のごとくさはやかにもたまほしきはこころなりけり
をりにふれたる

明治四十三年

思ふこといふべき時にいひてこそ人のこころもつらぬきにけれ

昭和天皇

朝海

昭和八年

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

伊勢神宮に参拝して

昭和二十九年

伊勢の宮に詣づる人の日にましてあとをたたぬがれうれしかりけり

伊勢神宮参拝

昭和四十六年

外国とらくにの旅やすらげくあらしめとけふは来ていのる五十鈴の宮に

十一月八日内宮にまゐりて

昭和四十九年

冬ながら朝暖かししづかなる五十鈴の宮にまうで来つれば

歌会始御題「祭り」

昭和五十年

わが庭の宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝々

今上天皇

「水」(歌会始御題)

昭和六十一年

外国とくこの旅より帰り日の本の豊けき水の幸を思ひぬ

戦後五十年遺族の上を思ひてよめる 平成八年

國がためあまた逝ゆきしを悼いたみつつ平らけき世を願ひあゆまむ

「草」(歌会始御題)

平成十三年

父母の愛でましし花思ひつつ我妹と那須の草原を行く

入院の日々に

平成十六年

入院の我を氣遣ひ訪ひくれし思ひうれしく記帳簿を見る

「歩み」(歌会始御題)

平成十七年

戦なき世を歩みきて思ひ出づかの難き日を生きし人々

夜の集ひ

いよいよ合宿の「最後の夜」を迎へた。参加者は全員一堂に会して、しばしの談笑の時間をもつた。班ごとに大学ごとに様々な出し物が続いた。フィナーレは「進めこの道」(三井甲之作詞、信時潔作曲)の大合唱となつた。

第四日目

(八月二十九日・月曜日)

最終日は、まづ福岡県立太宰府高等学校教諭の占部賢志先生による「我等が道統と学問」と題する講義が行はれた。先生は、現代の我々の心に棲み着いてゐる「自分を時代から切り離して客観視する思考方法」の問題性を指摘され、現在の祖国軽視につながると言つてもいい大正期の歪んだ学風と、それと果敢に闘つた一高教授沼波瓊音先生けいおんの学問と生涯、沼波先生による一高瑞穂会創設の歴史を具体的に語られた。伝統断絶から来る思想の混迷と道德の頹廢が顕著になつた大正期に、日本の心とは何かを究明する「日本精神」といふ講座を東京帝大に創設し、さらにその研究と学生の育成に身命をかけて取り組むため「一高瑞穂会」を結成され、その瑞穂会において、後に「一高昭信会」を結成することになる黒上正一郎先生

との運命の邂逅が生まれ、現在の国民文化研究会へとつながってゐることを述べられた。本会道統の源流を回顧された先生は、これを機に小田村寅二郎先生の御著『昭和史に刻む我等が道統』を是非とも一読戴きたいと呼びかけ締め括られた。

予定されてゐた講義や班別研修は全て終了し、参加者による全体感想自由発表の時間となった。まづ初めに山口秀範合宿運営委員長が登壇して「この合宿で感じた皆さんそれぞれの『生の本当の人生の体験』を率直に発表してほしい」と呼びかけた。このあと学生・社会人参加者が次々に挙手して壇上に上り、胸の内に渦巻く思ひを語った。「ここで出会った友は単なる友人ではなく、伝統文化や我が国を思ふ中での友だと思ふ」「合宿での友は全国各地に別れても心が繋がってゐるやうに思ふ」「日本の皇室のすばらしさがわかった」「御製を学び、日本には国の始りから和歌によって繋がってゐる心があるやうに思った」「和歌を通じて日本の言の葉の美しさを学んだ」「短歌は時を超えて心と心を繋ぎ、生きる力を与えるものであると思った」「短歌相互批評で友が自分の思ひを受け止めてくれて、嬉しく楽しく温かさを感じた」「国のことを自分のことと捉へ、自分が国のためにどうあるべきかを考へ周りに伝えていきたい」「日本に生れた喜び、国を思ふ心を子供達に伝えていける教師になりたい」「大学に帰っても友人達と語り合ふ時間を持ちたい」等々の発表が続いた。

班ごとに最後の昼食を摂ったあと、午後一時半から閉会式が行はれた。主催者を代表して上村和男理事長は「本会の五十周年といふ機会に皆さんとお会ひできて第一回合宿教室の参加者として感慨深いものを覚える。若い世代が育たなければ国は衰へていく。若い人はもつと前向きに学び国のために働く意欲を燃え立たせて欲しい。言ふべきは言ふ、若者らしく素直にまっとうに進んでいかうではないか」と合宿後の精進を呼びかけた。続いて参加学生を代表して九州工業大学三年の林祥人君が「この合宿では多くの先生方、先輩、友人との出会ひがあり、今回もたくさんのお話を学んだ。合宿の終りはこれからの生活の始まりである。日常生活に戻ってから勉強を続けることで合宿で学んだことを生かしていきたい」と今後の勉学の抱負を語り、北海道大学三年の安田陽子さんが閉会宣言を行って第五十回全国学生青年合宿教室の全日程を終了した。

合宿詠草抄



合宿始る

九州工業大 情報工二年 瀬木 裕太郎

ぞくぞくと新しき友らの来し姿見ゆれば私の意気あがりけり

北九州市立飛幡中学校教諭 森山 秀孝

三十年の願ひ叶ひてやうやくに参加果たしぬ青年合宿

(株)ビッグ・エー 永田 裕子

師や友の御言葉聞くにも縁えだしあり集ひしことをありがたく思ふ

伊勢の神宮

成蹊大 法一 亀澤 矢汐

ありがたや伊勢の宮居は御先祖の祈りの心とともにつづきし

日本植生(株) 日笠 健

大木の幹に触りて悠久の歴史の深み肌を感じぬ

東京理科大 基礎工二 前田 隆太郎

あまてらす大神おはす伊勢の宮は今も変わらず生きたまひけり

福岡教育大 教二 平賀 初枝

御親らの詣で来られし御社にやうやく我も今参るかな

(株)東京白ゆり会 横井 里江

玉砂利を踏みしみ行けば神園に御神のおはすごとく感じぬ

亜細亜大 法四 佐野 宜志

生ひ繁れる木々の間にみ社が朝日を浴びて輝きてをり

講義

松浦光修先生の御講義を聞きて

東北大学 大学院五 大岡 一亘

遷宮の知恵とはかくも凄^{すご}きかと熱きみ言葉にしみじみ思ふ

佐賀大学 経四 川畑 孝志

皇室は歴史をつなぐ玉の緒とふ師の御言葉の心に残りぬ

長谷川三千子先生の御講義を聞きて

九州工業大学 情報工三 林 祥人

「てにをは」でつらなる言葉の美しさを語らるる師に目を開かれぬ

福岡教育大学 教三 山口 瑛美

日の本の心は永遠に「てにをは」と伝はりゆくと信じゆきたし

神楽奉納

西南女学院大 保険福祉三 櫻井 愛弓

神楽殿にひびきわたれる笛の音は小川の流れのごとくに聴こゆる

(社)福岡県中小企業経営者協会 篠原 寛治

神宮を覆ひ繁れる木立より湧き立つごとく蟬の音響く

(学)中村学園 岡本 健人

神楽殿に響く太鼓と笛の音にあはせて踊る巫女美しき

福岡県警 川下 継範

はじめの神楽の舞に感じるは太古の人の手振りなるかな

創作短歌の相互批評

歌に詠む友の心をつかまむと思ひ傾け言葉を探す

明星大 言語文化四 高橋 佑太

吾が為にともに苦心する友どちのその一言のありがたきかな

一橋大 社会一 坂田 道志

歌を詠む楽しみが吾に生まれけり伊勢の集ひの友のおかげで

社会人 中越 友三郎

和歌を班員らと共に詠みあへば夜の更けゆくもわからざりけり

九州大 工二 馬場 章夫

友との語らひ

真剣に国を憂ふる友どちの言葉に我もやらねばと想ふ

公務員 村山 健司

北海道大 文二 小林 雅典

合宿にて新たな友と巡り会ひ語らふ夜ぞ疾く過ぎにける

独協大 法二 鈴木正樹

伊勢の地で初めて会ひたる友どちの血の通ひたる言葉わすれず

(社)福岡県中小企業経営者協会 廣末好信

初めての知りえし友と語り合ふ楽しく時を忘れるほどに

合宿終る

日本大 経四 横山知之

古きよき日本の伝統に触れながら我的心は清められけり

中村学園大 人間発達三 松堂琢磨

我ここに日本男児と生まれなば大和島根の未来明るし

東京大 文四 石村善之亮

み友らと友に学びし四日間終生忘れぬ日々となりけり

築紫野光が丘郵便局 森田邦義

伊勢の地に集ふ若人らと御製読み心かよひてうれしかりけり

立命館大 経四 前田 多恵子

友達と心通ひしひと時を胸に刻みて合宿終はらむ

九州造形短大 デザイン一 諫山 仁美

来年もきつと会はうと約したる友の笑顔がうれしかりけり

大学教官有志協議会・国民文化研究会

(社)国民文化研究会理事長 上村 和男

五十鈴川渡りてゆけばふるさとに來たる心地し玉砂利なつかし

玉砂利をふみしめゆけばさくさくと音のみ強く心にひびきく

人もなき参り道には打水の心くばりの身にしみにけり

若き時教へを乞ひし師の君もいまはいまさず淋しさ身にしむ

内宮早朝参拝

元拓殖大学総長 小田村 四郎

さはやかに澄みきる朝の気を吸ひて心すがしく宇治橋わたる
透きとほる五十鈴の川の清流に手を差入れて心清めつ
杉木立そびゆる中の木漏れ日を受けつつ玉砂利を踏みしめ歩む
玉垣の奥深く鎮まる大宮を畏みをろがむ友らとともに
八年の後に迫れる次の遷宮のつつがなかれと祈りてやまず

内宮参拝

株宝辺商店相談役 宝 辺 正 久

五十鈴川に手を浸しつつ心深き亡き人のこと友と語りき
森かげの参り路友と共にゆけば筑紫の友の俣ばるるかな
大杉も大楠の木も正宮のみ前のみちに高々と立つ
み垣前に立ちてぞ拝むアマテラスオホミカミのみ名唱へまつりて
年古れる宮のみ屋根の金色の鱉木かつをぎ光る上る朝日に
宇治橋の橋板に立ち川の音聞くがすがしき朝詣りかも

八月二十六日内宮様み垣内参拝

元電源開発環境立地本部本部長代理 長 内 俊 平

島路山に朝日の昇る光さして渡る五十鈴の瀬音すがしも

五十鈴川永久とほに濁らぬ清き瀬の水を手に汲み頂きまつる

終つひのお参りとなるやも知れぬお参りを大み前ま近く拝すかしこさ

みあらかの千木鱈かつを木に朝日さし輝かがやふみれば大み光かと思ふ

大み光に名もなき臣も照らされて大み懐ふところに抱かるるがごとし

参り終へ仰ぐ神路のみ山かけてうろこ雲白くひろがりてあり

日鐵プラント設計(株)顧問 今林賢郁

五十年の歩み重ねてこの年は伊勢の宮居に集ひけるかな

とこしへのみ国のいのち祈りつつ努めきたりし月日なりけり

まがごとは絶ゆることなく起りきて憂ひは深しみ国思へば

音羽建物(株)顧問 磯貝保博

木々の間ゆさしこむ朝日かがやきて光のかげのあざやかに見ゆ

御正宮近づくにつれ玉砂利を踏む音高くひびきて聞こゆ

二日目、朝の集ひにて

(株)寺子屋モデル代表世話役社長 山口秀範

「神宮」で合宿せむと定まりて一年は経りけふを迎へつ

それぞれのなりはひ割きてこの夏もみ友ら集ひぬ南ゆ北ゆ

神路山望む広場の大ポールに日の丸掲げむとの念ひはかなふ

台風の過ぎしすがしき朝空に目にも著けき国旗翻る

いまの世に我らが誘ひに応へたる一人一人を尊しと見つ

三泊はつかの間なれど一生の友求ぎ給へ若き君らよ

株石村萬盛堂代表取締役社長 石村 儻 悟

吾が学兄の差配のもとに五十年の記念の集ひ今開かるる

ひたむきな学兄の思ひに吾も又せめて応へむと会社を出でぬ

岸本弘大兄の古事記朗読

福岡県立太宰府高等学校教諭 占 部 賢 志

おのが大刀慕ひつついのち果てませる倭建命のみ歌つつしみて聴く

古事の文読む先輩のなつかしきみ声迫り来波打つごとく

長谷川三千子先生のご講義を聞きて

株みずほコーポレート銀行 小 柳 志乃夫

にこやかにゆつくりとかみくだき語りますお話に次第にひきこまれゆく

“てにをは”の不思議の働きに日本人の思想の源を求めたまひき

無意識に語る言葉のそが中に日本文化の底力ありと

言の葉の豊けき海にいだかれて生きる我らの幸を思はむ

日章工業(株)代表取締役社長 藤新成信

事前合宿にて御垣内参拝をせし折り

神さぶる宮居の庭にみならびてこの合宿の無事を祈りぬ

五十回重ね継ぎ来し先輩らのいたつきを偲び手をば合はすも

来年もまた重ねなむ新らしき命育むご遷宮のごと

医学博士・千代田漢方クリニック 桑木崇秀

さはやかな伊勢の宮居の朝参り日の本に生まれし仕合はせ思ふ

幾千年経りにし杉かすくすくと伸びると見れば古へ偲ばゆ

古へゆ傳へ来しいのち若きらがしかと護りて傳へよかしと祈る

元高校教諭 末次祐司

いつまでも目に止めなむ五十鈴川清き流れのその面影を

汚れたる身も心をも洗はなむ五十鈴の川の清き流れに

品質環境ISO審査員 山本博資

伊勢の地の集ひの庭にて常若とこわかの学ぶ力を得たるは尊し

合宿開始を東京より思ひて

東京防衛施設局 山根 清

台風の過ぎし夏空仰ぎつつ伊勢に集へる友ら偲ばゆ

師や友に一目会ひ得てくさぐさのことを語りたしとの思ひつのも

合宿二日目、小柳志乃夫兄の短歌導入講義を聴きて

壇上の君の話はおちつきて言葉ことば耳に残る思ひす

作らむとの意志さへあれば歌へると君は語れり力強くも

岸本弘先輩の会員発表を聞きて

朗々と古事記ふることぶみをよみませる先輩の御声の忘れがたしも

国徳ぶ命の御歌を自らの肉声のごと先輩とともは誦よまれき

長谷川三千子先生が御講義後の班別研修に來られし折りに

小さかることにてあれど分ならずば質問せよと優しくのたまふ

学生のとつとつと発する質問をうなづきながら聞き給ひたり

ささやかな質問にても懇切にお答へ給ふ御姿尊し

(株)日本教文社 坂本芳明

神代よりつながるいのち湧きいづる伊勢の宮居に参るよろこび

指揮班長庭本秀一郎兄

平山直樹税理士事務所 北村公一

いつもより声上ずりて早口に連絡事項を君は伝ふる

その口調きつぱりとした響きありて会場の雰囲気引き締めたり

アルバイト生の短歌作り

東洋紡績(株)財務経理部 庭本秀一郎

懇ろねんろに語り合ひつつ指を折る君ら見守りて心楽しも

横浜市なしの木学園児童指導員 徳田浩介
二百余名心に胸に抱きたる決意はやがて世を照らすべし

(合宿事務局アルバイト)

目黒高等学校一年 山根誠一
五十鈴川近くによればすすしさに汗ひきたりて心地よきかな

東海中学校二年 浅野佑弥
友達とそれぞれの故郷の方言を教へ合ふのは楽しかりけり

伊丹西中学一年 富山智史
伊勢の朝のおいしい空気を吸い込んでラジオ体操心地良かった

東海中学校二年 福野貴仁
今までに聞いたこのとのない神楽舞ひのきれいな音楽心に残った

合宿地に寄せられたお歌

合宿教室を偲ぶ

元九州造形短期大学教授 小柳陽太郎

台風一過すみわたるみ空仰ぎつつ友集ふらむ遠き伊勢路に
長き月日伊勢の集ひを夢に描き今日を迎へけむ友らしぞ思ふ
玉砂利をふみゆく友らの足どりを遠偲びつつ胸迫りくる
ふり仰ぐ杉の木立を流れゆく雲すがやかに目にしみにけむ
今日もまた五十鈴の川の川水の流れゆくらむ神代ながらに
久々の友なつかしく語りあふ伊勢路はるかに偲びやまずも
なき友のみ霊よはろに天下り守りたまへよけふのつどひを

あとがき

第五十回の記念すべき「合宿教室」は、昨年の八月二十六日、二十九日の間、三重県伊勢市「神宮会館」において、「日本人の心のふるさと 伊勢神宮で学ぼう」を合言葉に大学生・社会人及び関係者、合計二二〇名の参加者によって真剣な研鑽が行なはれた。本書は、その合宿研修において繰り広げられた各種講義等を中心にしてその要旨を収録したものである。編集に当っては国文研会員の香川亮二、藤井貢両氏に校正の労をとって頂いた。心より感謝申し上げるとともに、合宿参加者の皆様にはこの合宿記録をあらためて味読いただき、人生の菜として、また日本のあるべき姿をもとめるための指針として活用されんことを願ふ次第である。

さて、今夏の「合宿教室」は、来たる八月二十四日(木)から二十七日(日)までの三泊四日間の日程で、神話のふるさとであり、第一回「合宿教室」開催地である鹿児島県霧島・高千穂の「ホテル霧島キャッスル」を会場として開催される。招聘講師の拓殖大学日本文化研究所長の井尻千男先生をお迎えし、ご講演いただくことを始め、国文研会員諸講師の登壇を予定してゐる。

全国の学生、青年諸氏多数のご参加を願ひつつあとがきとする。

平成十八年二月

編集委員

山内

健生

磯貝

保博

——日本への回帰——
(第41集)

平成十八年三月十五日発行

定価 九〇〇円

送料 二一〇円

編者

大学教官有志協議会

帰国民文化研究会

編集委員代表

上村和男

発行所

帰国民文化研究会

〒一五〇一〇〇一 東京都渋谷区東

一―三三―一四〇二

TEL (〇三三) 五四六八―六二三〇

振替〇〇一七〇―一六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします

大学教官有志協議会編
觀 国民文化研究会

